

三花
月
草
草

集紙

全

384.6

7

3



松平樂翁著
花月草
三
集紙



ひと日、一葉の船に乗りて、とある浦曲を漕ぎめぐりしに、渚近き鹽屋
 の烟の、細う立ちのぼりたれば、舟より上りてさし覗きたるに、松の柱、
 竹の編戸のおろそかなる窓に、さしはさめるものあり、取りて見れば、
 いたうたきしめたる陸奥紙に、やごとなき人の手して、筆のまに／＼
 走り書い給ふさま、世の常ならず、花によそへ、月になすらへて、世のた
 め人のため、ねもごろに教へ示されしおち／＼、道理をつくし、心に味
 ふるほど、至り深き事共のおほかれれば、我も自波の名にや立つらんと。
 うしろめたけれど、そと懐にして歸らんとせしに、うちよりあでなる
 翁立ち出で給ひ、手を引いて座にいざなひ霞をすひ、露をしたむで、酌
 みかはしつゝ、外面のかたを眺めやるに、園には名も知らぬ草木ども

三 草
 月 草
 紙 草

咲き亂れ池には色々の水鳥のあそべる風情浮世の外心地すれば、こは仙境にや入りけんとおぼめくあまりいかなる所にやと問ふに翁笑ひてこは名におふ蓬瀛の洲にして塵に交はる人の長くといまる所にあらず早歸りね〜と言ひすて、袖を拂ひて入り給ひぬ。さては夢にやあるらん現にやあらんとしばしためらひたるに、寢るともなく醒むるともなく獨り衾をかつぎて我家にありいぶかしさのまゝ、こゝかしこ見渡したれば枕紙に文の卷々ありやことなき手して花月草紙と題せり。よく見ればさきにもて歸らんとせしに、露たがふことなし。うれしき限りなく、何がしが老いず死なすの薬得たりけんもかくやと、とみに繰返へしぬるほど、傍よりはや明けはて侍り

ぬとの大聲なるに、おどろきて急ぎ起き出でつゝ常のごと装束き立て、日影の塵にまじらひぬる有様仙人の目にはいかにみるらん。

こは月の桂男の書き給ひしとや。

此の文を海士の囀とは、作者の卑下の言葉なるべし。本の雫富士の烟など呼びたる人もありとなんげに富士の烟は盡くることなき心を含めるにやはたこの卷々の末の章は殊に心こめたるものと見れば、本の雫とも呼びけらし。いづれいといたう深き心籠めたるものなれば、おなじ高峯の烟をも、或は雲とも見霞とも見るは、その人がらにも變り行く無盡の草紙とや言ふべきと、友垣のへだてなきまゝに記しぬるなり。

花 月 草 紙

松 平 樂 翁 著

久しう浦曲の里に住める翁ありけり。めかり鹽焼くいとまには、えう
 なき藻屑かい集めて、鹽屋の窓の戸にかいはさみ置きたるを、世のえ
 せものゝ取りて歸りにけり。又の年、行きて見れば、懲りすまにかいは
 さみ置きたり。かく白浪のよるゝ毎に數も積みしかば、竟に、この卷
 巻となりしとぞ。この藻屑のはしつかたに、月と花とのこと長々しく
 かいたれば、それをもて名立てしは、かのえせものゝせし事なりとぞ。

また或人の書き給ひしなり。

海士の嘯りとこそ云はまほしけれと、里の子は云ひし。
 なきと聞けば、ありと云はまほしく、あしきといふをば善きと事かへ
 て云はんこそ、いとねぢけたることなれ。櫻てふ花は、わが國のものな
 るを唐國にもありとて、さま／＼例など引きつくれど、櫻かいたる唐
 土の畫もなく、かなへなりと思ふ。詩もなければ、なしとこそ云ふべ
 れいでや、櫻と云はでしも、花とだに云へば、こと木にはまぎれぬもの
 をほの／＼と明け行く山際、雲か雪かとばかり咲き満ちたるも、かす
 みこめたる夕間暮花のけはひも、臍に見えて、こゝにのみ暮れ残すけ
 しきなど云ふは、浅かりけり。まいて、夢のゝびやかなれば、近劣りする
 など云ふは、かのことかへて才おふ心に云ふことなりかし。風に散り

かふも、雨にぬるゝも、遠山に見るも、軒端に向ふも、曙も、夕暮も、露の乾
 る間も、目離るゝ時しなきを、殊にわが國風の姿にて、枝もすなほに花
 の形もゆたけく、匂ひさへもこちたからぬも、あやしきまでにこそ覺
 ゆるものなれ。さるをいづこにもありといふは、更なり。曙夕暮などゝ
 面白からんやうに言葉そゆるは、いまだ深く染めし心にはあらざり
 けり。すべて言葉もて云ひ盡さんと思ふは、いと淺き心かな。
 月のさし登る頃、曙の空おぼえて、横雲の棚引きたるに、やゝ匂ひ染め
 たれど、遠山の梢にいざようて、姿も見えず、辛うじてさしのぼりけり。
 梢のうさも晴れにけりと思へば、いつしか雲の一つ出で來たるが、近
 寄るほどあやにくに、月の方より雲の中へかき入るやうに見ゆ。こは

いかにせんとし、しばし打ち守るに、雲の端つ方明う見ゆるにぞ、出ではなれたらば、早かゝらん隈はあらじと思ふに、いつのまにか、また白雲の月待ち顔にたなびきて見ゆれば、胸打ちつぶれて打見るに、初の雲より出でたる光いと新しう見えて、ことにさやけしかの待ち居たる雲に向へば、又はせ入るもいとつらし、月の入りて見れば、雲もさすがにこちたからず。こゝかしこに、それと面影みゆるにぞ、ひたすらに恨みはてゝ見居たる中に、衣手もしめり行きて、露も蟲の音もさかりなりけり。つく／＼と向ひ居たれば、心の果なきやうに覺えしが。

只人はいさり船といへば、同じやうに作るものと思ふべけれど、こはさつくりても、おのづからよく調ひて出で來しもあり。こゝは善くか

しこは悪しきもあり。打ち見てはいかにもよきが、乗り得てみれば違ふもありて、一つも同じからぬものぞかし。波風しのぐと思へば、行くこと鈍きもあり、行くこと疾きものは弱きもあり、いづれいさゝかもふしなきはなきものなり。のり試みてそれを明らかに知り得てこそ、遠くへもはせつべけれ。昔ある人が人を見て、いかにもよき人なり、いさゝかも悪きところなきと思は、先思ひかへして、聖はしらす賢き人とても、いづこも隈なくよき人はなきものなるを、さ見ゆるは、わが心のくらみしなり、まづその人の悪きところどころ、よく知りての後、に、あげ用ひ給へと、某が云ひしと聞きしが、翁が船にのるも、いま云ふごととして、悪しき處々を知れゝば、悪しき方へは波風受けず、よわきに

は波風ある日、沖を乗らでありしかば、竟に危きをもまぬかれし。久方の空にまかせて、わがさゝやかなる才を用ひざれとは云へど、空にまかするに深き心あるべし。星の光見ても、はや沖は荒き風吹き出でつ、このあたりへは、あすの晝つ方吹き來べしといふ事も知れ、ば、心して乗るを、空に任ずるとは云はめ、沖の風吹くも吹かぬも、問はずして、今この波平かなれば、早漕き出で、行くを、空に任ずるとは云はじ。物食ふものにて、もあれ、すべて身をやしなふ道をつくし、そのほどを、慎みて、後生死を空にまかすべきを、養のことは心とせず、たゞおのが欲することにのみ、隨ひて生死を空にまかすると言ふもありぬべし。

雪の降りたるに、小簾垂るゝも、口惜しければ、かの高嶺の雪はといひたれば、何となう打ち笑みて、また立ちもやらず、さすがに捨てもおかで、童ななどに、あれ掲げ給へよなど、ほのかに云ひしこそよけれ、いとも女はかゝるべしとぞ。竹をこのみ愛るも、菊も蓮も、道理ある事にはあらぬを、さまゝの道理云ひて、才負ふぞうるさき。つくも蟲嫌ふも、げちく嫌ふも、何の道理あるものにはあらずなん。親に孝するは、この身を人となし給へる御恵山よりも高く、海よりも深し。またその親もわれも子等も、かく存命ふるは、君の御恵なりと云ふは、淺かりけり。その報にて、孝し忠するものにはあらず。人しらぬ深

山の梅の花とても薫らざるはなく、深谷の鶯とてなかがざるはなし。子
となりては必かく、臣となりてはかくあるべき道は、もとより人に備
りたることにて、鳥獸も親を慕ひ、子をはぐみ、冤牛のことさへ語り
つぐものを。

霜夜を侘びて、水鳥のなくを物知顔なる人が、水鳥のさへづるよとい
ひしを同やうなる人打聞きて、鶯の囀るなど、とはきけど水鳥のと
云ふは、いと物事にあらたまり、珍しきことをきゝしかたと云ふ。初
人うそぶきながら、橋姫の巻に、水鳥の羽打交して、おのがじゝ囀る聲
とあるものをと、心得顔に云ひたるもわろし。求めて珍しきこと云
ふべきものは、蕎麥きを好み給ふやと云ふべきを河漏はいかに

と云へば、辛きものこそ好み侍れと云ひしを、問ひし人笑ひし。知るべ
き人には云ひもしなん、人をも知らで、かやうの事いふは、暗き心より
出づるなりと、人の云ひし。

かの人は、雪螢あつめし窓に年をつみて、蹈み見る道に心をつくし侍
るなり。されば世の中の事には、いと疎く侍りと云へば、さるこそ誠の
道學ぶ人なりけれと、賞めものする者もありとや。元より道學ぶ者は、
五の常、五の道よりして、人を治め、己を治むる道學ぶより、外の事はな
し。されば世の事にさとく、今のあたりのみかは、千歳の前つ世のこと、
見ぬ唐土の昔今のさまより、さかり衰ふるきざし、人の心の上より仕
ふる道のくさぐさに至るまでも、明らかなるをこそ道學ぶ人とは云

ふべけれ。此世の事に、おろそかにては、いかで道學ぶ人とは云ふべからんと。
 旱り續く頃は、東風かせ吹きて、雲の出でたるにぞ、さらば今日こそ降り出づらめと見るに、其の風もいつしか止みて、雲もむら／＼と絶間がちになれば、はや日の影のきらめき出でぬ。また雨の降りつく頃は、松吹く風の音いといさぎよくて、はや晴れなんと見れば、雲間もはやむら／＼と青く、入り日の方は、こちたきまで紅深く見ゆるにぞ、此の夜の月よ明らけくこそと思ふに、月出づる比は、雲出で、また玉水の音するものぞかし、代々の亂れ治る際も、わが心の上も、この如きものとかや。

或醫師が、君は必來ん秋の頃何ぞの病氣にかゝり給はんと云ふを、むづかりて、いかでさる事あらんと、秋までは云ひぬ。竟にいたづきにかかりてげれば、云ひあてし醫師に逢んも面伏せなりとて、よその醫師招ぎてげり。さまざま薬與へたるが、しるしも見えす初の程は、内のそこねしなるべしとて、内調ふる薬なりければ、胸のあたりいよ／＼苦しく、物もみいれねば、醫師も心得て、その薬は止めつ。こたびは汗にとらんとしても、驗なく、瀉さんとすれば腹のみ痛みて、いよ／＼苦しせんかたなくて、試にふと調せし薬、その病にあたりやしけん、飲み瀉すより、胸の中心地よく、終に其病癒にけり。命助けし人なりとて、家傾けても報はまほしく思ひしとなり。さるに來ん秋は、必この病出づべし、こ

の薬くすり今より飲み給へといふを、いま一人のをのこ、いかでさあらん、されどさ云いひ給は、い、飲みてまゐらすべしとて、人事ひとことのやうに飲み居たるが、つひにその病やまひも起らず、つねに變かはりし事もなかりしかば、さればこそかくあるべしと思おもひしを、あの薬飲くすりのみまでもあるべき物ものをと云いひしとや。

醫師いしもいと心高こころたかくなり、にけり昔むかしは巫醫みくすりしなどと云いひて、昔むかしのくすしの文ふみには、さま／＼の呪事まじなひことなどをも書かいおけるを、薬くすりももと多く呪まじなひより出でしのもあるを知らず、このくすしいかで呪まじなひすべきと、心高こころたかく思おもふ輩ともがらぞおほかめる。

或人あるひと、人麿ひとまろが明石あかしの浦うらのと云いへる歌うたを珍めづらしげに、打ちかへし打誦うちうし

て、いかに名歌なうたなりけりと云いふもをかし、獨ひとりが云いふ、此この歌うたこそ、其頃そのころの體ていにもあらずなん、撰集せんじふにもまさしく、それとも書かかず、何なにの御神みかみの歌うた何うたの菩薩はつさつのよみ給たまひし歌うたなど、云いふをも載のせられたるたぐひもあれば、打ちまかせてはと云いふを、あなかま、かくなのたまひを、重おももこの歌うたを、人麿ひとまろがなりと云いふものをと争あらそふもをかし、殊ことに此この歌うたは、篋たかぎらがなりとぞ云いふなる由よし、それとてもかゝることは、かゝる人ひとなどには云いはであるべきを。

古いにしへの事こととさへいへば、いと寛おほとろに、事少ことすくなきものと思おもふが、いかでさは有りなん、それはかの太古たいにこの世よを云いふにや、昔むかしべは今の世いまよりも開ひらけぬれば、今の薬くすりもて云いふとも、横笛わうてきの手てのしげきも、箏さうのことに左手用ひだりてもちひ

しも、かの蘇香のつくりざまの巧なるなど、いかで寛なる風とは云は
 ん。さるを樂の舞なんども、手を少して面白からぬさまにしなし、樂も
 こゝらのはいと長く引き伸ばして、人の睡生する様にするを、高き事
 と心得るぞ淺ましき雅樂とても、人の心をたのしましむるものなる
 を睡生するを本意とせんや、殊に今の樂は、房中又は妓樂なるを、面白
 からぬさまになすぞ本意失へりとやいふべき。樂のことは殊に誤の
 いとおほきをも、知る人なきぞうたてきと、人の口學にや、人の云ひし
 人の心の開けぬるにしたがひて、習慣はおのづから變りぬべし。百歳
 も經なば、いかに變り侍らん。かの今の茶立つる道なんどは、いかゝあ
 らんといへば、こはもとよりすたれぬべし。茶容るゝ壺あるは茶のむ

器などに、千々の黄金つひやすもの、誰かあるべき昔人いかでこれら
 に財費しきと言はんかしたゝ夷のならはしなどのやうなることお
 ほく立交り、見るところ若ならずして、利あることなど、せとやなりな
 んと云ひしとぞ。
 老い毫れたる者こそいといたう淺ましけれ、顔の色も黒みもて行く
 に、雨雲のむらゝ見ゆるやうなる物さへ見えて、さゝ波の皺より來に、
 腰もうちかゝめて、膝嘗むるさまし、しはぶきがちに涙おし拭ひつゝ、
 老舌いたいて聲もわなゝきつゝ、耳はかの時しらぬ蟬の聲に、物の音
 もうとくしく、おのが耳に入らねば、人も聞かじとや、いと聲高に罵
 り、物食ふにも目打しぼめて、顔は大地震ふるやうに打ち動かし、はて

は鼻をさへうちかみつゝ、居るぞ淺ましき。かくては人にも避けてこそ有るべきに、若う人にうちまじりて、人より先にいざり出でつゝ、老いたる者よと自許して、人の厭ふをも厭はず、盃人にさして、わが齡ゆづりてんなど凡俗に云ふも、傍痛し。ことに富みたる者などは、手弱女など二人三人をば去らずおきて、樂しむもありとや。それらは卑しき身なれば、父母などやしなはん爲にや、鬼が岩屋に立ち入りて、苦しきを忍びて宮仕へするをば、あはれにもいとほしくも思ふべかめるを、猶老耄れもて行きては、我がかく翁びたるをも知らず、昔の心ならひにかゝる人悪き心もありやせん。されど人は必衰ふることわりにして、老いず、死すの藥もなければ、せん術なし。されどかの狼藉のこと

なんどは云ふも更なり。世にも人にも遠ざかり、縁言なんどの愚さを戒めたらば、譏をもまぬかるべし。老いぬるとて昨日より今日に變るものならねば、鏡の影も面馴れて、みづからは驚かざんめれど、若き時に老いたる人見し心ばへ、忘れずしてこそあるべけれ。殊にわがかしこげに云ふことは、いつか人の云ひしことなりしをも、あるは忘れ、または耳に入らで、まめだちて云ふを、笑ふをまだしらす。此の事はやいく度聞きしをなど、指折りて笑ふをも猶よそごとと思ひてや、ひろらかに開きて笑ふをまた笑ふ。

わが欲を欲もて防がんとするはいとかたし。今日盃にひとつ酒飲まんよりは、明日は心にまかせて飲ますべしと云ふがごとし。この世は

かりの世なり、かの國にはよきねの鳥よき色香の花よりしてなど教
 ふるは、其國の愚かなる民ぐさの、はかなき程も知られぬ。假の世と此
 世を云は、君と親の恵は何と人に答へんとか、詠みしもありとかや。
 此の筆はいとわるし、三度四度ものすれば、皆禿のやうになりぬとて、
 頓に物かく折は墨もすらで、硯の水をかいまはし、書き果つれば、投げ
 おくにぞ硯や秘閣のはざまなどに横たはりて、いつが先も釣針のや
 うになりて、かわきにかわきたるを、また惜しげなくたてざまに、干漏
 のあたりにて音出づる計に搔い廻し、あるは齒もて噛み碎き、又は墨
 もて筆の先を押しひしぎて書きつかく、てはいかで命の長かるべき、
 よき筆をばまづ笠とるもしづめてし、物かいたる跡にても洗ひもの

し、紙に押しあて、又はすかし見て、一筋も亂さじとしておくめり。いと
 い命の長かるべき理なり、はやく損じなんと思ふをば、いとあら／＼
 しくしなして、これ見給へ、三度四度にはやかくなりしと云ふもをか
 し。
 風流好む者、今の世にいとおほかれど、いづれを誠のみやびとは云ひ
 も定めん。只月を見花を見るとても、いかで云はん。歌よみ漢詩つくる
 とていかで言はん。今のみやびと言ふは、まづ我名を銜ひてんと思ふ
 よりをかしと思はでも、古へ人の好みしものは物學びして、それもて
 名得んとするもあるべし。歌詠むとてもよその心より、詠み出で外
 の口學びして人に銜ひて譽得ん事をのみ思へば、心にもあらぬこと

を詠みなし、あるは奈良の都の故事を集めてつくりなせど、よみなす
 心の中は、今の世の末が未なる風を改めず、かくて古にかへせりと思
 ふもあるべし。又は世につかふる道をよそにして、人に高ぶるみや
 びもありなん。なかに謝氏とやらんの妓女携ふことは、かの器と
 言ひ、才と言ひ、世をも人をも治めものして、千歳の後も名を現すいさ
 をあれば、よしよからぬことのあるとも、よきに比れば、物の數ならず。
 さるに何の香しさもあらで、只色に耽り、酒にのまれて、かゝすりあり
 き、わがすべき事をもせず、晋の世のみやびなりと思ふたぐひは言ふ
 にも足らじ。たゞやんごとなき人は、花を見月を見るとても、いかで心
 のまゝにすべき。われ獨おもしろきとて、夜更くるまで月花の宴にふ

けらば、大炊殿のあたりはさらなり、従者などをはじめとして、睡る
 ことも得せじ。君はおそく寝ねばおそく起き出でなん、末つかたの
 者は猶早く起き出でぬべしと思ひやりて、名残惜しとも打ちすて、
 聞に入るをこそ、其ほど得しみやびとは言ふべけれ。殊に月花の宴と
 ても、それをばよそになして、戯れたる事にのみ、夜を明かすなどは
 言ふにも及ばずなん。いでや武夫ならば、かの槊横たへて漢詩よみ、弓
 に矢矧げて歌よみしなどは、眞のみやびなるべし。皆我がすべき事
 をもせず、我分限をしらで、卑しき者は高き眞似びし、高き者はかな
 き住居なんどの眞似びし、漢詩つくるものは唐國の物商ふ賤にても
 あれ、宇留馬百濟の人、唐國に近しとてや、その書いたるものなど殊

るが、姿はいかにありしやなど尋ねれば、我庭にも横のありしや、つね見侍れば忘れたりと言ひし。
 蝦夷の人に飯をあてへしかば、いと喜びながら、そこら食ひこぼしてけり。やよ米は玉の緒つなぐものなるを、などかくおろそかになすやと問へば、我等は米食ひて命を全うするにはあらず、鮭と言ふ魚食ひて生くるをと言ふ。さらば鮭の魚にて命をのばゆるならば、それをば尊ぶべからん。いまその足にはきたるものは、鮭の皮ならずやと言へば、しばし頭傾けて、君の足につけ給ふわらうづとやらんは、かの米の出でくる草にはあらずやと言ひしにぞ、あなどるまじきことよと、人の言ひしとぞ。わが國の人はよその事を知らねば、蝦夷人のなり形わ

に尊ぶたぐひもあり、歌よむものは雲の上人ならば、いつも名たゝる人のやうに覚えて、拙なき歌をもうつしものして、翫ぶもあるべし。又は古きもの集むとて、今の用あるものにかへても、用なきものを求めるもありぬべし。みやびは花のかをりなり、花と實とありて足りなん。されどこのかをりありてこそ、梅は桃に勝りぬれ。
 よく物を心にとめて忘れぬものが、昔いづこの山にのぼりしが、かゝる峯に松のいく本ありて、その中にかく枝垂れたるに、今一本は高くそびえて立てり。その傍に横の大きなやかなるが、横様に生ひ出で、青葛のかゝりし様などゝかたるに、いとこまやかに覺え給ふものかな。君が庭もその山によりて作り給ひしや、松のあるなかに横の見た

が國の人と違へば、いと愚にて、何知らぬものよと思ふたぐひぞおほき。それより漢土にてもあれ、えみしの人にててもあれ、たゞ姿の見なれぬを見ては、腹かゝへて言葉のわきがたきを聞きては、又笑ふ心狭くよそ見ぬ故なるべしと言ひぬ。

遠州政一あその色紙釜てふものあり。山の麓に寛のけしきかいたるに、西行法師の「とくく」と落つる岩間の苔清水、汲みほすまでもなき住居かなと言ふをつけたるが、あるやんごとなき人、かの茶の道としひてかゝること學ぶこそ心得ね、その程をこそ思ふべかめれとて、上句はそのまゝ置きて、くみてよわたる人もこそあれと、作り直したるとか。

大和歌は、人の心より天地鬼神をも感せしむるなど云ふは、和歌の道に限るにはあらず。たゞ一の誠もてこそ大空をも動しつべし。漢の高祖の太子動すべき私の御心をさまぐとわり盡して、人々諫むれども、うけがひ給はず。さるに周勃と言ふ人が、口には言ひ得ねども、よからぬ事を知れ、ばそのみとのりをば受けじといひし一言にて、さばかりの御心までひも晴れ給ひしとかさればよし。詞の花を咲せたりとも誠の貫くにあらざれば、要なき事なり。誠もつらぬきて、詞の色もそなはりなば、いと人の心をもうごかし和ぎつべければ、一様に實だにあらば、花はなくてもあり。なんとはい言はじ。

年の暮に、浅草寺のあたりに市といふ事ありて、殊に人おほく出づる

なり。或人薩摩の國よりあはびの貝おほく買ひもとめてけり。その貝の穴をふたぎ、木もてふたをつくりて、その市にて賣らんとはかりけるが、折節さはる事あれば、人にたのみて晝つ方には來るべし、それまでに賣りてたべといふにぞ、もて出で、賣るに、かへりみる人もなし。さればよ、かうやうのもの此市にて賣りしためしなきを要なき事に時つひやすものかなと思ひつゝ、いかに賣れども買ふ者なければ、行き來の人の袖ひかへて、これめさせ給へなどいふに、引き放ちてゆくめり。晝過ぐるころ、かの人來りて、いかにと問ば、かくといふ。何といひて賣りしと言へば、別になにとかはん、かひやきの貝めさせ給へとて、賣りしとこたふ。かれほ、笑みて、わが賣るを見給へやとて、いと

聲高かに、はやなべはやなべといへば、過ぎ行くものは立ちかへりて、かひ求め、そこら行く人も聲をとめて買ひぬ。見るかうちに多くの貝を皆賣りてけり。此の市は人多く出づれば、殊にかまびすしくて靜に心とむるものもなければ、手桶うるものはさはらはらといふ。さはらの木もてつくりし手桶よとは言ふ暇もなく、聞くひまもなしとかや物の勢と云ふものもまたことわりの外なるものなりけり。越路の深山は、いと奥深く、雨に水そふとても、山あひの谷河なれば、流とづれば山など崩れて災なせど、水はいと早く落つるとぞ。その深山に住めるのを、一歳美濃の國へ行きたりしに、雨いと降りつゝきてければ、人々堤に出で、水防ぐに、かの男は水防ぐ事も知

らざれば、よねをいさゝか袋にいれて、腰につけ居たり。はやその堤も崩れぬと、人々よばはれば、高浪みなぎりて、ながれ行く水の勢に目くるめきて、逃げまどふひまもなき程なり。かのをのこ故郷にては、左も右も山なれば、たいちに打ち登りて、かの聊のよなくひつくさるに、はや水落つる心ならひに、人よりしづめて打ち見るにある限り岡もなく、山もなし、竟におしながされけるとぞ。

邦道あると云ひ、なしと云ふを、堯舜の御代を邦道あるといひ、桀紂の代をなしと心得るは、あやまりなり。三代の初の世とても、かしこき人のみあるものかは。いま名の聞ゆるを見てもしるべし。そのかしこき人とてもそれく、氣質とやらんもあるべし。また折にふれては、心あ

やまりもあるべし。よそごとの聞きたがへもありなん。また正しく直ぐなる心より、まがごとをもしばしまこと、心得る折もあるべければ、わが其時に逢ひては、いまは道ありと思ひ、道なしと思ひつべしと云ふその折もしり得ぬものは、いつも行をつゝしむにしかじとぞ。

こゝろざし五ありて、智の七より以上のものは、必功をなす志五つありて、智の五六あるものは、功しなすこともあれど、おほく敗をとるとぞ。志五にして、智の五より以下なるものは、おほく敗をとるとかや必智おとりて、志厚きものは、時をもらさず、分限をもわきまへず、人をもしらで、わればかり許して、わが智の足らざるをも知らざるより、かゝるものよと云ひしとや。

軍の道として、さまぐの流わかち、門立てゝきそひてらふ輩をさまれる代におほく出来ぬるもをかし。かつて昔の軍のこともしらす、今はた斯く變りぬべしと心つくすこともせず。いつもわが流くむ人を敵として軍する心なりやと、さかしらするをも聞かぬさまして居し翁ありけり。或夜夢に軍するところを見けり。かのつねの心から人より先に何くれとすれど、かねて云ひしごとくはあらず。まづ敵よせ來るときこえしかば、いで物見といふ事仕うまつれと云へど、誰も出でこず。せんかたなくみづからのり出で、見しが、いづこに隠くしおける兵士のあるべきや、いかなる森林より遠矢は射るやと思ふのみにて、敵のけしき見るひまもなく、こせりあひなど始まりたらば、味方には

これぞと思ふ者もなければと思ひつきて、まづ鞭をうちてかへりぬ。いで箕手に足輕くばれよといへど、こゝろみなれし事にもあらぬに、夏草はいと高し、土地も平らかならねば、しひてくばり置きにし人も見えわかず。はや敵は近よりぬ。今やかたきの方より弓とり交へて、うち出だすべしと思ふに、鳴神の如して、鞠のやうなるものの二つ三つ落ちたるにぞ、かねて思ひしと違ひたれば、いかゞはせんと思へど、せんすべなく、槍たづさへて進むべし。かの一番、二番の功はさらなり。場中槍わきなど、さまぐのことあるをといさむれど、敵の方には、長柄も見えず、ただ馬に乗りたる者弓などもちて、かけ出づるにぞ、かくは軍せぬものなり。道しらぬ人のする事よといへど、かたらふ人もな

月の夜半こそ思ふくまもなく、心の底もすみわたりぬるものなれ。されど、闇の夜の空晴れて、星の光さやかなるに風たかく吹き通ふは、またまさりぬるやうに覺ゆるといへば、雨ぞいとまさりぬるをと云ふ。いかにと問へば、いでや旱天の雨はさらなり、草木の花咲きみのるも、皆この恵にこそあんなれ。またその感情のふかさを云は、今日は元日なりけりと云ふに、雨そは降りて霞わたりたるは、げに春哉とぞ思ふめる。師走のみそかのどやかに降りたるも、春待ちがほにていとをかす。すべて春は雨こそ長閑なれ。軒端より霞わたりて、いとこまやかに降れるが、衣うるほせども降るとは見えず。軒の玉水も間遠に音して、すみ捨てし蜘蛛の巢に玉貫くけしき、庭のおもの枯生の底に緑や、

し、采配とりて、かの定めめ如くふりたれど、兵どもは敵の方ばかり見居たれば、采配のふりざま見る者もなし。鼓など數の掟もあれば、そのごとうちたれど、耳にも入らず、寢覺の鐘の音さへ折々はよみたがふこともあんなるに、まして心も身にそはぬ折なれば、數みゝる人もあらしがし。せんかたなくてふと見れば、傍に漢土の七つの文を明らめて、つねにはさまさま軍のことなど云ひ争ふをのこあれば、かゝる折はさすがたのもしく、それに語ひみれど、たいに道理のみ云ひて、とみの用に立つべからず。はや敵はいと近よりぬ。いかにと云ひつゝ、食ふみさきて、ひた汗になりて、めさめしとぞ。かの越の國のをのこ、よその國の水に逢ひしにもたとへつべしとかや。

そひ行くも、柳の糸の動きもやらで露そふも、共にいとのかかなれ、燈火かゝげても、何となく光しめりたるに、鐘の音の仄かに響きくるも、心すみわたりぬるものぞかし、其外梅が香のしめり、夜ふかく匂ひわたるも、花にうしとかこちぬるも、哀はありけり、春も老い行く頃、蛙の時得がほにすだくもをかし、ほとゝぎすの初音いかにと思ふころ、村雨のはら／＼とふり出でたるも、五月雨の幾日も降りくらして、文の巻々くりかへしつゝ居たれば、何となく世中の事にも遠ざかりぬる心地ぞする。また暑さに堪へかぬる頃、雲のみなぎり出づる勢ありて、風ひとしきり吹き落ちたるに、柳達葉なんどの葉うら白く見せたるも、涼しやがておほきやかなる雨の間、遠におちたるが、後にはしきりに降りきて、物音もきこえず、土のにはひきたるもいと心地よし、軒端

は玉のすだれかけたらんやうに、玉水のたえまなくおちたるに、庭はひとつ湖となりて、あるは瀧おとし、または水はしらせたるに、人々しばし物いはで、うちまもり居たるもをかし、やゝ雲うすくなれば、池の面にはかぞふる計り雨みえて、小鳥など庭へをどり出で、餌ひろふさまなり、はじめ雲のたち出でし方は、はや空の一しは緑に見えて、蚯蚓など見ゆるに、木々のみどりの庭深に影みゆるもいとすいし。老たる、女など雷の音におどろきて、はひ出でたるが、今日のは幼かりしとき、の如くはれにけり、いま時のはかく晴るゝことまれなり、など、はやくり言いふもあり、彼れは斯くあわてしなど云ひて、かたみに笑

ひとよみつゝ、今日は蚊もすくなかるべし、かみの音もいとかななり。此頃の暑さもわすれぬとて、端近ういづれば、夕月の光さしわたりて草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙の物待ちがほに空うちからみて、ふつゝかなる音になくもをかし。秋來るころの雨は、昨日にかはりて、何となう寂し萩の上風外山の鹿の音なんと、月よりも身に染む心地ぞする。つねにきゝなれし、寛の水の音までも、あはれふかくこそ。月の前のむら雨もまたをかし。まいてや、夜寒の頃鳴きからしたる虫の音の、雨の小止にかすかなる聲して、枕ちかく鳴きよるも哀なり。この雨に木々も染めなんと、思へば、茸なども生ひいでなん。栗もはやおつべしなど、童のものさびしげに、燈火にむかひつゝ、云ひ出づ

るも、げにさまゝなり。夜ふかき鐘の音の打ちしめるものから、さがに秋は聲さえてきこゆるにぞ、待つ夜、わかれのおもひまでも、思ひ出で、鐘つく人の心をもあはれとおもふばかり。感情はいとふかゝりけり。紅葉の染めそふも、白菊のうつりゆきて、ひとさかり見するも、尾花の露重げにうちしをれたるに、龍膽のうらみ深く咲きたるあたりも、つきゝし朝顔のみな枯れたる中に、さゝやかに赤う咲き出でたるが、午過るまでしほみおくれたる、又あはれなり。野分の風は、おどろくしきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがに哀をそふるは、秋の習なるべし。時雨のざと音して、夕日に白く降りくるも、また音かへて枕とふもをかし。月よりも闇の夜よりも、哀ふかき物には侍らずや

といへば、かうやうに云ひ並べては、げにもと云ふべからんが、一年も降る心地してよみ見れば、この雨はをとつ日より降りいでしをと思ふ心はかはらじと、心の中に思ひて聞居しもまたをかしかりけり。遠からぬ頃より夏のうち疫とて病めるが、いとおほし。はじめは泄瀉し、又は熱甚しく、汗流るゝ如出で、舌は變せざるもあり、たちまち譫語妄語し、大渴となり、あるは發狂す、太陽の症なりとて、發表し、或は下劑投ずれば、二三日にして虚症と變じて死す。かゝる傳經の早きはなかりけりとて、或は初に附子用ふれば、彌乾燥甚しくなるなり。皆ヒをすて、けり。さるにはや傷寒論には、喝病のことを記して、汗下も溫もすべからざるよし書いたるが、其後代々それを知るものなくやあり

けん、回春に至り、その事を委しく記すを、今はかの古き方を背になすものら、回春などは後れたるものゝやうにおぼえて、試みすひとりそれをもて治療すれば、たちどころに癒ゆ癒ゆればさしての病にはなかりしと云ばかりなり。また近き頃より、腹いと甚く痛みて、水を吐く病おほし、疝とし、又は翻胃などにあつれども、おほくは治しがたしと云ふも、心用ひざるにやあらんかし。亞科は何の病見ても胎毒とし、つよき藥投じて、事去れば、藥力及ばざりしと云ふたぐひぞおほき。いとおほくていと少きものは、醫師とか。

學問は人の道學ぶことなり。漢詩つくり文つくるはせんなしと、よく人の云ふことなれど、風流は花のかをりの如く、物のうるほひのごう

しまいてかの國の文字をおぼえて、文よむとも、文字のつかひざまにて深さ淺さの違目あるものにて、彼の國の人の言葉しり得がたかんめれど、さすがに漢詩つくり、文つくればおのづから言葉の外なる心をも得るものとかがきぬ。さればなすにはしかじかし、などてこれを禁すべき。

夏は麻の衣を着るべし、冬は綿入れし衣重ぬべしといふはことわりなり。されど伏陰ある折は夏も綿入れし衣着ることもあるべし。冬熱陽ある折は、單衣袴の衣を着るべし、さるをことわりのごとくせばまた病をも得べし。今の世たゞに理のみ云ひて國を治め、人を治めんとするものは、かゝることやあらん。

神佛を信ずるものを見て、いと愚なることなりしかと、わかきをのこ打ちよりて言ふを、君たちは年わかくても佛なんどの道にまよひ給ふ事なしと見えたり、いかにしてかくも心の端正しく修し給ひしや、いとたふとき事にこそ翁はもとより愚なればにや、ちかき頃や、まよはじとは思ひぬれど、そをだに心の修行怠りなばいかゝあらんなど、と思ふぞかしといへば、いかにさはの給ふ、地獄極樂のなきことは今の世誰かしらざらんといふ。神佛にまよはじとは、その地獄極樂のことにはあらず、佛道心法は唐國の博學の人達、このむもあるぞかし。またその修法において、願事などするをいと無下なること、言ふべけれど、唐國にては、名山大川などに祈ると言ふも、こゝらには古より

勅願所の祈願所のと言ふも少なからずさるをもぬけぬることは、まづ易の道をよく心にいれ、生死の道に疑なきにあらざれば、この迷は解けがたしとかきけり。たゞに血氣にていま言ふは、いとうきたる事になりぬべし。薬は我がいとふものなり。病みて死ぬとも薬はのまじなどいひ、または酒に酔ひて我が恐るゝものなしなどいふたぐひにて皆醉事なり。それら病にかゝれば、ことにあはれげに唸り出して、薬あたふれば押しいたゞきて飲むめり。この苦しさを退く呪ひよといふとも、まめだちて受けぬべし。またかの酒の酔さむれば、もとより拙き心はかはらず、何とか言ひけん忘れにけり、その折人は怒はし給はざりしやと、心にかけてものも食はで居るたぐひは、皆何しらぬもの

の血氣にて神佛を知るたぐひなり。我慢つよきものは、たとひ病むとき薬のますとも過しぬべけれども、心に尋ねたらんには、人だに見ずばのまゝほしくやあらんかし。沖こぎ行く船の中にて、波風のわざはひにあへば、驚きるもありぬべし。今この疊の上にては、いかでさありとも、我はなどてなどいひ給はんが、さもなきものぞかし。其上いきしには、更なり、色にまよひ香にうつる心ありて、いかで迷はじとは言はん。昔は人の心すなほなりければ、胃着るにも驚の内に信ずる佛などいれて、軍にも出でゝげり。或は奉納寄附などし、敵に勝ち、本意とげんことを願ふ輩もおほかりし。元よりよき事にあらぬは、云ふにも及ばず士卒の心をとるには、またあるべきことなり。いまは女にても大

方に神佛のことをぞしり、なにくれと高きこといふ輩ぞありける。かれら生死の道はさらなり、色香に迷ふのみかは聊のものにも心とられぬるものが、高きこといふは皆心に問は、はぢぬべし。されば佛の道にまよはずといふは、よき事なれど素直なる心失せたるなれば、むかし人のをかしきまでに、佛に媚び僧に諂ふよりは、劣れりとも云ふべからんかし。かうやうの事はよく我が心に問ひて、のちにいふべし。神佛に祈りて病を去らんとし、得がたき位を得、職を得んとし、聊も欲りすることを遂げんとする心は、迷ひなり。されどもその迷ひに淺きと深きとありて、又おのづから誠の道を得べき端ともなるべきことにもあるべければ、強ひてまた深く咎むべきにもあらじ。生を求め、死

を惡むよりして、諸々の強ひて欲りすることあるがうち、はこのまゝひ實に遂げしとは云ひがたかるべければ、まづ餘りに高きことなど言ふは、心にとふまでもあらず、わが程をも知りて、慎むべしとか、言ひしとぞ。那須の興市は弓の上手にてもあるべけれど、馬を海にのり入れて、風に動きてさだまらぬ扇を射んといふは、いと難きことなり。射損んじなば死ぬべしといふも、さもあるべき心なるべし。たゞ扇にのみ心ありて放ちたりとて、必あたるべしとも云ひがたかるべし。さるに心にたちかへりて、神に祈念したるにて、心は内に止りて、外へ馳せず。つひに思ふ矢坪たがはざりしは、わが心の誠へかへりて、神明良能の妙の

出でしなりと云ひしが、さあらんこともありぬべし。
 或人の庭見しが、松の枝をため、葉をすかし、一草一木みな作り立て、
 けり。まして石などは様々の色あるをも並べわけ、大なるも小なるも、
 佇をかしくしなしたるを、翁殊にほめにけり。かへりて後に、翁のつね
 に好み給ふは、草は階前より立ちのび、松も檜ばらも己が儘になしお
 き給ふかと思へば、今日の庭をばことにほめ給ふはいかにと問ふ。何
 もさせることわりなし、世の人我が好むところに逢ふものをば賞め
 喧り心に合はぬものをば譏りなどすれど、ことわり盡くして思ふに
 はあらず。茶立つること好むものは、基など圍むものを見て惜しき月
 日を空しくし給ふ、木野狐の名を忘れ給へりやなどいへど、茶立つる

一時の心遣にて、よきあしきいふべき品もなし。いでこの庭といへば、
 室町の比の庭の残れるを見て、も知るべし。野山の景色なすもまた假
 につくりなせしなり。實にさまぐの石など面白かれとなしたるは、
 おもしろからぬやうもなし。翁が庭はといへば、おのがまゝになすに
 て古の庭などの事ともたがへば、心高きわけもなし。紅紫の色よきと
 て賞しぬれど、衣にして翁など着まほしとは思はざるなり。わが心に
 たがへば譏るは、みな道理知らぬものゝすること。にや。
 或人のいふ、われは劍難の相ありと云ふものあり、いかにして劍難を
 遁れ侍らん。翁のいふ、武士の劍難の相あるはいと頼もしきことなり。
 たゞ忠孝仁義の道にたがはざるのみ。楠正成も劍難なり。熊坂長範も

同じ相なるべし。正成帝の召しに應せず、逃げ隠れなば、劍難にも遁れん。されどたれか賢人忠臣の名をもて賞すべき。觀相は拙なきわざなり。聖人の中道いづこにか障るべき、いづこの道かまさりなん。

兵は今日にありとて、正心より治國のことなど、經書を書拔して、わが物顔に説くぞをかしき。鈐録はさながら、今世にある流のたぐひならず。火術も自得流は開けざることおほけれども、その比、人にさきだちてかく思ひ初めしは、殊勝なり。かゝるさへあるをと勵まば、又藍より色よき例もあり。とにかく志を勵ますべきことなりかし。

或人のかしこきを舉げて政を任するほかに、國を治むる道はなしと、事も無氣に言ふをきゝて、いかにさは言ひ給ふぞ。わが國の帝おほき

中にも延喜の帝をこそ、聖の代と今にも言へど、菅原のおほちぎの事なんども、きこゆるぞかし。二十餘りの代をつみしが、中の唐國の帝のおほきが中にもかゝる人を用ひたまはざりけん。この人を用ひ給ひし故に、つひにかゝる事出来にけりなど言ふこともたえぬぞかし。堯舜三代の初には、もとより聞えねども、それも後の世の如く詳しく記しつたふ文あらば、またのちの沙汰もありぬべし。はやそれにも縁とかいふ人を用ひて、その職にかなはざりしことも、管蔡の君の禍せられて、聖のしばしぬれぎぬ着給ひしこともありしぞかし。

さるに君はたいかしこき人を用ひて、任せよと事も無氣にいひ給ふは、聖にもまさりぬと思ひ給ふか。事のあとより見るごとくならば、人

をしるの難きなど、は言ひ置き給はじ。
道理なきが道理のまことなり。道理のごと行はるゝ物ならば、何のか
たきこともあらじを、さも知らで、人と争ひ、政を譏りなどして高ぶる
者はことわりの誠を知らぬとやいふらん。
おほなる松杉は、さゝやかなる岡にはおひ出でず、童何を知らんなど思
ふ心より、をさなき者のいふこと、なすこと、打ち聞きては驚き感ずれ
ど、みな人並の事にて、年長けしものはもとより遙にまされど、さある
べき事と思へば、感すべきことを感せずなん才ある人の佛の道など
信ずるは、佛の道は聖の道より高きにもあらず、明らかなるにもあら
ねど、佛達のよくはかゝること知りけりと思ふより、おどろき感ずる

もあるべし。かの不動智とやらんを世になき高きこといへど、いつ
か寂然不動天下の故に通ずるてふこと、聖の文にもあるを味はずや。
すべてあなどる心より禍を享くると知るべし。古の英明の帝をはじ
め、すぐれたる人等女童にたぶらかされて、後には制することも方及
ばで亂るゝ端を知りつゝ、打黙し居りし人もありけり。これもかのい
かで知らんとあなどるが故に、いつか斯くはなるとや。
諫は明らかなる所より入る。讒は暗き所より入る。たゞ代々の帝の欲
りするところの心のまゝならぬものは、我身と我名の二つなり。その
二つを損ねんと聞けば、いとおそろしく思ふべらなり。かの其暗きと
ころより入れば、遂に賢も疑はれなどするとかや。

我が誠より貫き出づれば見ざる事も見え聞かざる事も聞ゆめりと
いふは、いと至りしことにて、それをば彼の孔子の君も六十にて耳順
ふとも宣へりしぞかし。さるにわが輩の色に染み香に愛づる心は更
なり、聊も欲りする心あれば誠をおほふにぞ其の境に至ることなし。
弓射る道を得て、かの妙なる奥意得しものは、弓にはまことの端をも
得べし。

天が下の御事などをさまぐ心にかけ、心碎くさまに語るものあり
けり。君は妻に子に持ち給ふがをり、妻は君と争ひ、その子もかた
みに牆に鬨ぐに、君も普き心にはあらずや。子を見給ふにも深き浅き
あかはりあるは、よそより見てさへ何くれと言ふとぞ。さゝやかなる

家のうちも治らず、今日の煙も立て得ぬとなん聞きぬみづからを思
ひ給ふの浅きにや打ちまかせて言はいづこを見る心もみな深か
らずや。よく言には出し給ふかの憂國の心あるべし。憂國の語あるべ
からずともきけり。言に出すは心の深きにはあらじとか。

わがまことより貫きいづれば、見ざる事も見え聞ざる事も聞ゆめり
といふは、いと至りしことにて、それをばかの孔子の君も六十にて耳
順ふともたまへりしぞかし。さるにわが輩の色にそみ、香に愛づる
心はさらなり。いさゝかも欲する心あれば誠をおほふにぞその境に
至ることなき。弓射る道を得て、かの妙なる奥意得しものは、弓には誠
の端をも得べし。弓に得しとて、それをもて馬にのるべしと思ふべけ

んや。皆道しらぬより容易からぬことをたやすきやうに言ふかと言ひし。

聖の樂むてふことは、天地の心なり。天地の心は、つねに春なれば、いつものどけからぬ事なし。苦しきをたのしむにはあらず。苦しきは苦しく、嬉しきは嬉しきに外なけれど、たゞ哀樂喜怒の四も、みな樂の哀樂の怒にて、いはゞ秋は春の肅殺、冬は春の閉藏なりといふに同じこととなん思ふとなり。

昔の鎧と、今のとはいかでかくまでは違ひしにやと問ふ人のありけり。この區別は代々の昔の風をよく心得ぬれば、明らかなるをさはせで戦といへば、父兄天正のころの近きことの聞き覚えなかりし。

書いたるをば、かゝる事ありしやなど、夢物語のやうに心得て、かの甲斐の國のなにか云ふ人の記せしものと偽りいひしを誠として、今の鎧のよきなど思ふたぐひぞ多かる。まづ古の戦はひとりぐに道をみがき、名ををしみ、ほまれを後に傳へんことのみ思へば、み祖のこにより言ひ出で、みづからの名を呼りて出づれば、敵の方よりも劣らじと、おなじく名乗りて出で會ふなり。さればかたみに物音もせず、目拭ひてこれを見る。そのうち合ふなにも、いで組まんと聲かけて、打物捨て、寄りくれば、力かひなくして、必勝ち難からんと思ひても、さ云ふ時に組までは名をけがすにぞ命棄つる道に二つはなしと思ひ極めて、おのれも打物すて、組み合ふなり。組敷かれて首取るゝま

も着す、しぶ染の羽織てふものなど肩にかけて出づるをいと高くい
さぎよきことのやうに覺えて、まことの侍はかくよと云ふさまにな
りにけり。それより其頃の大將の鎧のいと賤しきを、のちに見て大將
と見受けられざるやうに、雜人にひとしきを着給ふものなりと、あま
りなる事にまで云ふことにはなりにけり。すべて世の中のならはし
の下りもて行きしことをば、これを見てもかれを見ても、知るべしと
答へしとぞ。

或人の問ふ、朱學とやらん云ひて、程朱の説ける事をのみ尊びて用ひ
給へど、程朱の説においても疑ふべきこと少なからず。たゞ學は聖の
道なり、古今に通じて聖の旨をもて折衷するにはしかじなど半の義

になり給ふや翁の答へしに、問ひ給ふ旨は聞えたれど、程朱の大才絶
倫だにまだこの所はいかなど疑ひ給ふ事あるにて知り給ふべし。
かの國の大なるに、人もおほく、そのうちに秀でし人のかの國の人、か
の國の文字をもてまねび得たるなれば、わが國の人の及ぶべきにあ
らざることは知りぬべし。まいて宋元明清の大儒たち皆その説を尊
信したるを、この比書物よみていさゝか此のあたりの人に知られた
るのみの君が、その宋元明清の大儒の上に立ちてそれらの説を開き
てたゞちに聖の旨を得んとは、いかにぞや。その秀でたる大儒のいひ
給ひしことをさへ、あとよりみれば、疑ふべきこともある習なるを、君
がほどなる書生は升に量り、車につむ計なるを、互にこれぞ聖の旨な

何をもて後の世を救ひなんかゝることだに未きとり給はぬ人が己
 が力をもはからで、何くれと云ふはいかなる心にかあらんと云ひさ
 して、溜息して居たりしとぞ。
 いづかたに火ありと聞きても、ありあふ調度なほど繩に結びつけて、
 井の内へ入れつ。水に入れたきものは袋やうのものへうち入れて、
 傍さらず置きぬ。火のかく遠きをいかでさはし給ふといへば、焼ける
 かば遠きも近くなりぬべしといふ。風よければ此方へは来らじとい
 へば、風變りなばさはあらじといふ。人みな笑ひぬ。或日いと遠方のな
 りしか、風とみに吹き出で、またくうちに焼ける。廣がり、かの男子の
 あたりも焼け失せぬ。火鎖まりて近きあたりの者ら、もの食はんとし

りといふとも、たれか一定すべきさあらば甲の説を乙はそしり、東の
 論をば西にてやぶりて、かの升にはかり車につむべき族さまぐの
 説をいひ喧り、湯の沸くが如く、絲の亂れたる如くになりたらば、誰か
 この學を維持すべき、それが故に亂れたる世のいまだ治らざるうち
 にはや。
 御神のかゝる事をはからせ給ひければ、道春といふ人をあげ給ひて、
 代々の學の目當しるしを立て、置き給ひにければ、藤樹、蕃山、伊物の
 徒出でたれども、公の學の道はかはる事なし。もし人の心のまにぐ
 己がさまぐ、論説を経文に加へなば代々の
 大君の御説々よりして、諸侯大夫をはじめ、思ひ寄ること言ひたらば、

見れば、血色かはりて、今日は一寸ばかりも腐れぬといふがうちに肉
 附きて臓腑に腐れいりぬ。また脈へさし入れたる針を抜けば、糸條の
 やうに血の走り出でゝとまらず、遂に爪の色も失せて顔も青ざめに
 けり。かくても心を痛めず、樂むものあらんや、また誰がかうやうの事
 をせん人の身にとりても、腐腸伐性などいふ事もありしとぞ。
 藥の病に應じて、その人の運よき折は、飲下すより心地よく覺ゆるも
 のなり。運あしき時は、其藥飲めば或は喉に障り、又は氣のぼりなどし
 て、病因の外なることにさはり出で来るなり。押して用ふれば、功をな
 すくすり病に應せず、その人運善ければ忽ちその障見ゆ。運悪しければ
 其障見えす。必しばし善きやうに見ゆるは、病の沈みて俄に災をなさ

ても器もなしと歎けば、かの男子したりがほにて、借してまゐらせん
 とて、かの繩を引きたぐれば、缺よ、櫛よなど云ふもの引き上げつ。又袋
 の内より、器物など出だしつゝ、つね々々人に笑はれずば、いかでかゝ
 る時ほまれしつべきと云ひしを、げにもと云ひし人もありしとぞ。
 小松内府が平氏の衰へ行くを見んよりはとて、早く此世去りてんと
 願ひしと、書いたれど、素より、させる事はあらかじかし。若し有し事と見
 ては、薄き心とや云ふべからん。猶存在て平氏の成ん果をも見力の及
 ぶ丈は、過を救ひて、諫留めつべきを、早く此世去んと思ひしは、げに薄
 き心なるべし。例の浮屠氏の後より云たる事なるべしと人の云し。
 肉腐らす膏藥を張り、血をとる針をさすに、藥の付きたるあたりを

す。たゞその枝葉の憂癒ゆるやうに見ゆるなり。救ひがたきに至りて人々かの藥應せざるよといふ。是もまた藥のみかは。齒の固き者ありけり。石など嚙みくだくを譽のごと思ひにたり。一人の男子は生れてより齒柔かにて、かたきもの嚙む事をえせず。さるにかの石碎く男子、齒の一つ動きて脹れ痛みければ、此一つ齒の爲にもの食ふ事も快からずとて、ものを打ち當て、その齒を抜きにけり。それより又昔へかへりぬるとて、石など嚙み碎きければ、人も皆賞めのしりたるが、一歳も経たざるに、かの打ちあてし隣の齒殊に脹れ痛みて抜けたれば、左右の隣の齒又抜けて、終に半は落ちてけり。残るも見るも動き搖ぎて、なきに劣るさましてけり。かの生れてより柔かな

る齒の男は、今に變らず、齒一つも落ちずとて、又今にては自ら負ふを齒なき男切齒して怒らんもなきをとて人も笑ひにけり。傍より言ふとは、甚よく當るものなり。彼人は衰へ給ひしといへど、鏡見てもさは思はず。かれは今斯すれど、後には悔い思ふべしなど云へど、知らざるものぞかし。私の心だになくば、傍にて見ると同じかるべし。詠歌大概に、情は新を先にすと云ふことを、何くれと云へど、こはかの日々に新なるといふ心ばえにて、流るゝ水の如し。されば善きを惡しく、惡しきを善くなど引き違へいふは、珍らしきにて新しきとは云はじ。花を雲と見雪を花と見る、いくたび言ふともわが誠より言へば、いつも新らし心して故意といふは、新らしきと言ふものならず。

雨の様にはあらず、劇しきとして夕立のやうにはあらず。風添ふとても、秋の末つがたの野分又は木枯のやうにはあらぬものを、花を惜めば、ことさらに雨も風も世になきやうに思ひ給ふかといひし。昔戦するとして、たがひに陣を構へて居しが、敵の方にて大なる音の三つ四つして、げり。さらば報のあるよと備を立て、待てども、何のけしきなし。人を出だして窺はせければ、程なく敵の使のものを捕らへて來りぬ。尋ねれど、こたへす言をとれば、鉢のうちに消息あり、封押し切りて見れば、かねて定め置きたることく、庭月の相圖せしが、いかゞしたりけん、火移らで落ちぬ。三光の相圖したるが、一つの星は火移らざりしかば、二星とや思ひたがふらん。二星ならば陣拂ひて歸れとの

われ愚なれど、親に孝し、君に忠する事は知れり。されば別に文見る事もあらず。誰か此の二つの道を知らざらんと、言ふは、いと知らぬなり。かの曾子とやらんの賢き人も、打る、杖によて、重きふけうとなりし事を知らざる類もありけり。まして君を輔け、國を治むるは、忠のいと重きものなり。只に又惡しき事諫め、善き事を勸むるとて、その諫むるにもさまぐの程も、道もあるべし。その善きの惡しきのこと言ふも、かうやうの淺々しき人、善きと言ふも必善きものかは、惡しきといふも、花の咲く比、雨の降り出でたるに、風さへ添ひぬれば、かならず花の時雨風の憂さ添ふ習にて、人の世の別離るゝ道理見する事にこそざりとては、つらき雨かな。うき風かな。といふを聞きて、雨降るとても五月

定なれど、三光にてあるなれば、必ず陣拂ひて歸るまじ。煙柳をも打たせてけるが、折節ひとむらの雨雲に入りてげり。されば音のみして姿は見えざれど、煙柳と心得て、山の左の谷間より、うち出づべしと書いたりければ、大將も微笑みて、廻し置きたる兵を探し得て勝ちにけり。戸毎に富み、家毎に足るなどいふは、いかなる事にやあらんといふに、風俗質朴にして、上下の制あるをいふ。おのゝその分を守らず、奢に流れもて行かば、貢皆民に與ふとも富みたることはあらじかし。三年四年門より出づる事もなく、夜も寢で文のみ見居たりしが、つひに病出來にけり。文見るは、病のもとなれば、われはせずといへば、君は酒飲み過ぎて病出來し人を見て、酒止め給ふやといひし。

何にかへじと思ふみどり子の這ひまほるを見て、げにこの子は行末才も秀でぬべし。乳房見すれば、びたすらに這ひ行くめり。心に逆ふことあれば、ありあふものもて、人をうつわが子の頭の疵を見給へ。この子の煙管もて打ちしあとなり。親とても心にたがへば、かくするぞ心のすなはなるなり。年のほどより力もありて、この疵を出でかしにけれと、痕おしなで、賞めぬるを思なるものも笑ひにけり。笑ふ人よりは賢き人なるが。神はわれなり、外に求むべからずと云ひたる人に、そはかの剝の卦に、陰もまたしかり。聖人云はざるなりと報られしは、いまだ至り深からざりしにやと云ふが如くにこそ。いで神はわれなりと思ひ給ふなら

ばまたよく思ひて見給へ。わが如く色に染みたる神ありや、酒好みて程しらぬ神ありや。見るものに奪はれ、聞くごとに心とられ、人に欺かれても知らざる神ありや。たい神は人なり、われは神なりといふは、いと易かめれど、正しく直き神徳の曇ることなく、照さいることなきを得て後にこそ。

攝津の國に川あり。その川の末にかの酒作る所ありて、その川水を汲みて作るが、天が下にすぐれし酒とは云ふなりけり。川の上には穢多といひて、獸の皮など作るものが住み居て、川のうちへ枕立て、生皮を晒すこと常のことなり。或る年、その事を云ひ出で、この酒は神にも備へ、神にも養ふものなるを、皮を剥ぎ、川水にて作らんはいかにぞや。

穢多なるものをば川の末へうつして給はれと訴へしかば、遂にその如くなりけり。その歳よりいかに酒つくれども、例のごとあらねば。今はひそかにまたその皮浸す水の末汲みてや作らんとすらむ。年々えみしの國へ吹き流さるゝ船子ども、命全うして歸り來る者もあることなり。必ず二三十人乗りて出づるが多く死してかへるは二人三人に過ぎず。まづ高浪見ては膽を消し、食乏しきを見ては心を痛め、なんどする族は、多く死に絶ゆると聞こえぬ。よし人なき島へ着きても、しらぬ木の實とり食ひ、知らぬ鳥捕らへて、その皮をはぎて身に纏ひ、肉を干して食に蓄ふなど、事に觸れても心の極りなく常度失はぬものは、必異國の人に逢ひても夜離れず、遂に命全うしてかへ

らが私語して、よべ酒の過ぎ給ひつらんと思ひしが、はたして見れ
 もし給はぬなり。いざかたみに今日はおほく食うべ侍らん、うれしや
 など云ふも聞えぬ。悪き限りなきものから聞きしともはた云ひ難し。
 まいて隣の物語には聞き苦しきこともおほく、ここやかしこの言葉
 より、鳥の聲、虫の音遠近洩さず聞ゆれば、喧さ云ふ計りなくて、耳ほど
 うるさきものはあらじと、疎かりし世を戀ひしとのせしとかや。
 或翁に、かの人はいかなる人にやと問へば、いと善き人なりと答ふ。彼
 はといへば、善き人といふ必ず彼をば悪しきといはんを、選びて尋ね
 見るに、善き人と答ふいかなることぞと尋ねしに、人を見るには、まづ
 十にして五つば、か人も善きことあるは、いと善き人と見るべし。十に

るとかや。されば一船の中の英雄必ず生き残りてかくあるなりけり。
 仙人の傳へし薬とて、いと耳のさとなるを持ち傳へたるありけり。
 耳疎きものが、今いひ給ふことは何ぞと、二度みたび問ひかへせば、人
 も笑ひて云ひもせぬさまなり。聞えぬまゝに打ち黙し居れば、又笑ふ
 さまは、さすがに見ゆめり。餘りの恥かしさに、かの薬を乞ひ受けて飲
 みしかば、にはかに耳いとさとなりしは、嬉しきものから、餘りによ
 そのよその事までも洩るゝことなく聞えけり。米かしぐをのこが此
 の飯に虫の這ひ入りたるが、云は、いむづかり給はんの恐しさに、ひそ
 かに取り捨て、げりと、いとひそかにいふも、早きこゆ。知らぬさすれ
 と、藥袋あれば、聞けはいと厭ふ心ありて、善きとらねば、又かのをのこ

りかの感冒かんぼうなんといひて、疾厄宮しやくやくきうに暗氣あんきのあらはるゝはいと淺き事あさきことなり。惡しきとても著く見ゆるは、あさはかなり。これをみて見れば見えざるをつゝしむむが外ほかに道はあらじと。
賤しきものなりけるが、常食ふべき米をも食はず。ひさぎて黄金こがねにかへて命いのちにもかへじと袋ふくろに入れて用ゐたるに、秋の末すまつ方かたにはかの水みづ出でにければ、かの袋を首くびにかけて、高きところへ行かんとするに、はや水嵩みづかみ高くて行くべきやうなければ、せん方なく木によち登りてけるが、ことの外ほかに上にのぞみけり。さるに米いさゝか苞つつにし負うて、水およぐものを見て、かの袋の黄金を見せ、これを皆みなまゐらせん。その負ふところの米をいさゝか分けて給はれといへば、いと怒りて惡き

して一つ二つも善き事あるは、善き人なり。十にして皆あしきをば、あしきと心得給へといひしとぞ。こは人をかくみるなり。われを見るの道ならず。善きも惡しきも、かるきと重きの區別わかつちもあらんかし。
遠慮えんりょ遠謀えんぼうせざる人は、とみの禍わざはひにあふことは、人の知れることなり。その遠慮遠謀に似たるやうにても、殊更に物恐おし、例の道理にくしたる心より出でくれば、なほ人の物笑ひとこそはなりぬれ。かのもの恐ぢして何くれと心くだくものに、君が傍添ふもの、もし心風やまば、いかいし給はん、男女をも退けて、黒金の櫃ひつに入りても居給はんが、君もし心風やみ給は、いかにし給ふらんと云ひてげり。また或者が打刀うちがたな側かたはらを去らず、たも居るものものしくして、いで敵衆かたしやうたらばと云はん

りにかまへたる人に、君寝ね給ふ時、鎧着てや伏し給ふらんと云ひし。またそのたぐひの人が、鎧を金厚くしてつくらせたるを見て、いかにも全備りし御鎧なり。惜しきことには、この面頬の目のあなも、ふたぎ給へ。矢なんどの此處へ來たらんが危く侍ふといひし。四の時のうつり行くけしきこそ、又なぐをかしきを、咲かざる折の花を咲かせんとし、散るころに散らさじと思ふは、いとくるし。散れば又來ん年は咲きぬべし。いかに心を苦むるとも、霜白く氷堅き折に、蓮の咲くべきことわりなし。されど咲くを待ち、散るを惜むは道なり。散るをもよそにして、心とせぬは道しらぬ心なるべし。觀相の人のいふ深き病、又は災は、いと氣のしづみて見えざるものな

をのこの云ひざまかな、かゝるとき黄金もちて何にかはせんといひすて、およぎ行きしとなり。大名といふ人たち、集ひ物語りし給ひける時、ひとりの君のいひ給ふ手よく書く人あらば、一二百石の地あたへ給ふや、弓馬の道まれなる計り得てし人あらば、千石計りの地あたへ給ふや。才も秀で文の道より、武士の道皆至れると云は、一萬石の地をあたへ給はんやといへば、昔はさなん云ふ事もありけらし。今はいづこにてもさすべしとは覺えずとこたへ給ふ。さらば此の圓居のうちの君たち、文の道人にすぐれ給ふもありや。武士の道もありやと思へど、人なみには嗜み給へど、秀でしことはきゝ侍らず、いかゝあらんといへば、いかにも秀でし

召して風の吹きくるぞ。ともしびも消えなん。障子たてよといひ給ひ
 ければ父君ことに怒り給ひて、さやうなる言葉遣しては、歌はいかで
 か讀むべきとて、むづかり給へば、御子はいとおそれて退き給へり。御
 次に居たるもの、いかしたる御教ぞと思ひて、御色うかひて問ひ
 奉りければ、ものを盡して云ふべきものにはあらずと、宣ひしとぞ。
 武氏の折、狄仁潔などのつかへざまは、かくあらざれば、唐室保ちがた
 きを知りてこそありけれ。されどもし其中興せざらば、おもねり諛ひ
 し人とのみ云はれなんと云ふものに、呂尚が釣垂れて、かの奇遇なく
 ば釣たれし翁とよばれん。たゞその時にあひて、かくなすなり。かゝら
 ば後に何といひて、わが才をも知られんと、その人たちいかで思ふべ

など言ふことは、一ふしもなしとこたへ給ふ。初のものに勝れしもの
 とても、一二百石の地だにあたへかねたるが、わが輩のあるは十萬石
 二十萬石の地を給ふは、いかなることゝ思ひ給ふや。たゞにみ祖のい
 さをと、大君のゆたけき大なる御惠なり。しかるに生れしより、かく尊
 きものとのみ思ひて、なほいやましに位司も人にこえんとし、大路あ
 りく行装も、わが格よりも高く、わが家の定よりもみやびかにと、市
 わらべのほめなんことを欲するのみにて、うちにかへりみる心のな
 きはいとうたてしといひ給ひしとかや。
 雲の上のやんごとなき君おはしましけり。その御子の御傍にまし
 しけるが外面より風の吹き來て、ともしびの光定まらざりければ、人

をながし、乾かすをうるほすも、みな打ちまかせていへば、氣の滯らぬやうになすより外はなし。その滯ることおほければ、其害もおほく滯ること久しければ、その害も深し。其急なるはまづ其處を打ち、末をそゝぎて源に及ぶもあり。車の輪のめぐらざるもさまぐに、て、かわければ油さし、油過ぐればかわかせて、たいにそのめぐれとのみの心もて輪を擦りするなり。補ふ藥とて、いかで別にものをもてきて擦りすべけん。たいに氣血を本のごとせんとなりけり。

聖賢の道學びて、唐土の文など好むものが、ふと禪家の法語などみて、つひにそれに耽るものありけり。ある人の今めづらしく信じたまふは、道體性理のことにつくしたるには、心もとめず、日のあかきをつね

き。これらは凡智もて不凡の人の心を論するなりといひき。

酒過ぐれば、彌飲まほしく、行ひゆるめば、彌亂る。わざはひのぞめば、みづからうながすものとかや聞けり。

補藥とても、草根木皮もて天受のかけたるはさらなり、うちのやぶれしをも、いかで補ふべき。補ふといへば、造作のすりする様に思ふぞわろき。先この人はこのあめつちの氣をもていくるなり。されば出づる息に古き氣をはけば、毛穴よりもその氣を出だすなり。又氣を吸ふときは、そのごとく入るなり。その出で入る氣のいさゝか滯ることなれば、病てふものはなきことなり。さるにその氣滯れば、熱をもつ。熱あれば、ものをかわかすなり。其氣の熱るゝをふたぎ、寒るゝをひらき、

として、もしびの力を尊むたぐひなり。それも誠はかの良智にて、ひじりの文見れば、心にかゝりて恥かしきの置き所なければ、かの法語など見て心をおのれとなだむるなりと云ひしはをかし。

相州の日金の峯といふは、いと高き山にて十州を見ろといふ。或人登らんとするよ、雷はためきて、雨は水こぼす如くなりしが、夜明くるころは忘るばかり晴れて、霧もなく霞もなし。かの峯に登りたれば、七つの島々も手にとる計り見えて、八丈の島のあなたも鏡もて照しなば、かの人なき島とか言ふをも、見つべくおほえしを、そのもののこの峯に立ちゐて、こゝに家立てたらば、かのえみしの船々いまは八丈に來りけりと、こともなく見ゆあり、さるを此處の岸に停船ならべて、こゝ

やかしこに知らせんはいかにぞやといふ。かゝる晴れし日はひとせにまれなるを、その日に必えみしの船來たるべしやと言はまほしけれど、知れたる事いひて争はんはと念じて居しと語りし。

道路は足底の廣さだにあらは歩むべしといふは、例のことわりのみなり。いかで歩むべからん、梁の上を歩まば落ちぬべし。こはかの陳氏のいひたる餘地なきなり。あまりにことに甚しく物に切なれば、行れぬのみか、疎れぬべし。こは事物に對して、餘地なきなりときゝぬ。

目盲しものゝ人の言ひがたき事をもいふは、色も見えず、けしきにも知らねば言ふなりけり。くらき人は我があしきも見えねばよきと心得て人に恥ぢざるは、目盲し人のたぐひなり。されば古よりおもてに

かきするなどいふめり。
ある貴き人旅の道は早く寐ねて、勞をだに休めなば、下が下までも憂
きことはあらじ。さらば早く宿を立ち出で、早く宿に着くにしかず。
これぞ下をめぐむの道なれば、喜びぬべしといひける。まづその君、早
く宿に着きて格子おろし、燈火出だしてひるの半ばごろより寐ぬれ
ど、下のものはわが心のまゝならず、人の寐る頃ならでは、寐ねがたし。
殊に晝のうちは騒がしく道行く人もたえぬを、世の人に背きてよる
なりけりともいひがたく、寐ねんとする頃、其君は早起き出で、夜半
に供そろへて立つめり。下を哀れむ心はあれど、上の心もて下を見る
より、かくは違ふなり。恵む心ありて下の事知らねば、かくぞ有りける。

二人連れだちて相みる人にあひて、君の仰せに因て、これば旅立つ事
あり。いかに侍らん見給へといひしに、相者見終りて二人とも必旅に
て難あらん、つゝしみ給へといひぬ。一人はいそぎの御事なれど、旅の
道にて難あらば、おのづから君の仰せも滞るべし。遅くとも難なきに
如かじとて、もしび消つ比宿を出で、日の暮ゝ頃には宿をとる。一人
は頓の御使者なり。慎むとは君命をつゝしむにしかじ。この身はたと
ひ難に逢ふともいはいはせん。とて、星をいたゞきて宿を出で、燈とり
て宿をとる。さればことにはやく思ふ方に着きてければ、君よりも賞
を得たり。一人の方はおそきとて罪にあひにけり。されば相はともま
れ、我がすべき所をつとむれば難なきものよとは言ひてげり。

満面紅潤の人あり一人の相者見て君はかならず祿を得名を得壽を得たまはむあゝその幸まことに言ふべからずと言ひてげり一人の相者は君かならず近きうちに頓のやまうにかゝりて死にたまはんといひければその人腹立ち袖拂ひてかへりしが程もなく病得てとみに死してげり言ひ當し者にいかゞしてかくは言ひ給ひしと問ひければかの人満面紅潤かゝることあるべきものならずいは幸あれば必ず散財あるが如く左の方よければ右の方悪きは天地の常なりさるにかく悪き所なきは必そのうらに變するものなり一天雲なければ三日のうちに雨ふるといへば相書にある事にはあらねどかゝる吉のうらは凶に變るべしとなん思ひしなりとは語りしとぞ

筑紫に敵國降伏の額は延喜のみかどの勅願にてしたしく御筆を認められしといふ敵國は外國をさしての事とかやむくりのおそひ來りしことだにありし例をだに知らざる輩もありぬべしたゞに外國のありとだに心にとめざる計りに見ゆるやうにもなりゆくべくや豊臣氏のこなたの戦になれたる兵を選びて朝鮮のひさしく戦のこともしらすおこたりすさびたる暗き世の君と臣とを打破りしより外國はすべて智もなく力もなき者よと思ふたぐひぞいとうたてき武の平氏の末の歌よみなどし専風流にながれたる一族なりとて弱きものゝやうに人はいへどもさすがによくかれが如くはありしとおほゆ朝鮮の戦の折かの國の忽破れしはよわきと計りは言ひがた

しいかで智もなく力もなきとは言はむ。遂に責めかねてあきたるは
 智もなく力もなしとかへしてや言ふべきといひしも、もどり過ぎた
 る事にやあらんか。いづれ外國のありとだに知らざるばかりになり
 行きて、よその國の要なきもてあそびの物のみ好み集めて、いつか此
 の禍の深からん事をしらざる輩もありやせんと、かへすゝもおそ
 れ思ふとか、語りしとや。
 今こゝにては黒きを鈴虫といひ、柿の核のごとなるを松蟲といへど、
 もとはりん／＼と鳴くは、松にて、ちんちろりと鳴くは鈴なるを誤り
 にけりともいふ。蟲賣るかたへ行きて松のを得んとおもはば、鈴のか
 たをと言ふなり。ひとり／＼にこは誤りなり。黒きかたは松蟲なりと

教ふとも、皆それとたがへば、賣るものもせん方なかるべし。行燈をち
 やうちんと云はまほしくても、いかゞはせん。是も誤にならひてこそ
 世に行はるれ。
 物知りがほなるもの、三人四人圓居せしが、かつみはこもをいふ。花か
 つみとはこもの花をいふと、能因法師のさ云ひ給へればといふを、能
 因さ云ひしとて、あのさゝやかなる花を、花の字冠すべき據ある事を
 いはねば、能因がとてうけがふべきにや古よりさま／＼説々あるは、
 河社にてもあれ。百鳥のくさぐさ、岩戸柏夢野の鹿飛火の鏡など、みな
 信すべしとは云はじ。浅香の沼に、よひらの花のあやめあり、それを花
 がつみとはいふべし。されば武士の鎧てふものゝ草用ふるところに

は、かつてふことに通はしてつくるを、今は菖蒲草といへど、中のあかりたけ高くして、花の形ついたり。されば疑ふべくもあらぬをといふを、又傍よりもとす草をかたばみといひ、よひらある田字草を花かたばみと云ひしと見ゆ。こは、陸と水との分ちあれど、古は今の様に細やかに言はず、葱は軒に生ふる苔にて、そのうちにはかの金星草もありぬべし。中比より云ふ葱もあるべし。一にして是を葱と打ちまかせて云ひしごとく、つひに田字草をかたばみと計りも云ひしなり。されば枕草紙に上の衣はかたばみあやの紋にもかたばみとあり。かたばみとはかつみなりけり。雑要抄の書に、四片ある花の形せし手箱の上の方に、花かたばみと記せれば、つひに轉略してはなかつみとはいひ

しなりといふはじめより何とも言はざりし人が、昔人のかつよみながら、知らぬなりけりと讀みたる事もあれば、いまいづれとも分けがたかるべし。今のことぐきゝては、四片あるの花かたばみと言ふは、をかしきやうに我はおもへれど、人をもそれにせんとするは、いと苦しきわざなめり。よしこの一種あやまりしとても、させることもあらじを、しひて力を入れ給ふは、詮なきことよと言ひてげり。

捕鵜をもて、蠅といふ蟲をおほく捕りたるを、ふと顯微鏡とて、目もおよばぬものを見る眼鏡のあれば、それも見しに、その鵜に着きたる蠅が、逃げんとして羽を動かすが、はてはその羽も鵜につきて動き得ず、首動かして苦しむもあり、又久しくつきしは飢にのぞみて、弱り死

するけしきもあり。たゞに羽をならす音のみきゝしが、よく見れば、いと悲きさまなりしと語るを、さあらんなど人のこたへしを見しと聞きしとはいと違ふものぞかし。見し如くきゝ給はゞ、さあらんなどと計りはいひ給はじ。まいて目の及ばぬあたりのことは、猶心にて見給へかしと言ひしものありけり。

ある醫師ありけり。病むものあれば、上下選まず、いとせちに心をつくしけり。いといたう賤しきもの病めるありけり。藥箱いだいて藥調するに、その母なりける老婆のつくぐと見て居しが、いざり出で、憚りなることながら、願ぎ思ふことこそ侍れとて、いと云ひかねたるを、何のことにてもあれ、思ふことは打現して云ひぬといへば、つゝまし

げに聲ふるはして、下にくみ置き給ふ箱の御藥も給はれかしと言ひけるにぞ、思はずほゝゑみて、さらばあたへんとて下にありしがうちのははりなき藥二三とりいで、調せしが必その藥はしるしあるべしとかたりぬ。かくおろかなるものに、この病には何といふ方劑調ずることなり、それは何々の藥を用ふ。この箱の上のかたにおのづから入れ置きたれば、とり出だして調せしなり。下に組みたる箱のとて尊き卑きのへだてなしと、眞實だちて言ふとも、いかできゝ分くべき。さはりなくば其心にまかするにてこそ、をかしかりけれ。

ものを引きのばいて、時失ふものありけり。人の早苗植うる頃種ほどこしてげり。葉月のころ早苗の穂の出でたるに、嵐吹きてげれば、花散

りぬとなげくを、あまりに物急ぎし給へばこそあれ。わが稻はこの比
植ゑにしかば、嵐のわざはひにもあひ侍らずと人にたかぶりけり。人
の刈り收むるころ、少し計り穂の見えたるが、はや霜の置きてげれば、
みな枯れぬ。ことしはいと早う霜のおきしなりとて、年をのみつみし
て、いまだ悟らざりしとなり。

君も門の外へ出で、見給へ、あまりにこの膝容るゝにてたりぬとて、
よそもしらで、その日くをたのしび給ふが、またいかばかりおどろ
き給ふともありぬべし。此頃きしにも君が屋に忍びいらんとにや、
劔もたるをのこや、門近くより來たれど、例のうちには知らで、やす
らかにたのしび給ひたり。もとよりその夜はいかゞしたりけん、うか

がひしのみにてかへりしとや。月なき夜半などには必來るべしと。
言ふものありといへば、いかでさやうなるものあらん。君はたゞ遠き
こと、言ふがなかにも人の思ひよらぬ事を言ひ出して、人おどろか
す事を好み給ふ。人はおどろくとも、いかで驚かされんなどいひて、あ
ざ笑ひぬ。かれは必わざはひに逢ひなん、思ひよるべきことをも思は
ぬ人なりといひし。

娘の十あまり六つ七つになりたるを、月花にもかへじと思ひたるに、
年頃飼ふ猫の、むすめが厠へ行けば、必あつより着きて行く。いかに制
すれどもきかず。つなぎおくに厠へ行くときは、必知りて猛うなりて、
縄食ひきりてはせて行く。いかにとたづぬれば、厠のうちにつと着き

添ひて居侍るといふ。いかに心^{こころ}の底^{そこ}知りがたしとて、親なりけるもの、劍^{つぎ}もちてかの猫^{ねこ}の廁^{かみせ}へ馳^はせ行くとき、首^{かうべ}をきりたれば、その首^{かうべ}のう^うちなるうちに入^いりぬ。彌々あやしみおどろきて見^みれば、その首^{かうべ}のう^うちなる蛇^{くちなは}に食^くひ付^つきて、蛇^{くちなは}は死^ししてげり。さらばその娘^{むすめ}に蛇^{くちなは}の思^{おも}ひいりたるを知^しりてかくはありけりと、涙^{なみだ}おとさぬはなかりしとなり。冤^{えん}牛^{ぎゅう}とかいふ事^{こと}、かの國^{くに}の文^{ふみ}にもありとなり。猫^{ねこ}の恨^{うらみ}はいかにといへば、もとよりものいふ事^{こと}ならぬ身^みなれば、それに恨^{うらみ}もなし。かの蛇^{くちなは}を殺^{ころ}して、君^{きみ}の難^{なん}をすくひぬれば、たゞに本^{ほん}意^いとげしなり。もとより功^{こう}名^{めい}に心^{こころ}なれば、思^{おも}ひおくこともあらじかし。たゞ蓄^かひおける主^{あるじ}人の心^{こころ}はいかいありけん。

狐^{きつね}のよなく、來^くるを必^{かならず}餌^え與^{あた}ふものありけり。かれは獸^{けもの}のうちにて、才^{さい}あるものなれば、かくしなばかれも惠^{めぐみ}を知^しりて報^{はぐ}ることもあり。なんとて、日^ひ毎^{ごと}に怠^{おこた}らずあたふれば、かれも馴^なれにけり。或^{あるひ}日^ひうま子^こ生^うれてければ、いとことしげさに、二^{ふた}日^かばかり餌^えあたふことを忘れなければ、狐^{きつね}うらみいかりてや、そのうま子^こを食^くひてげりとぞ。やんごとなき人^{ひと}ありけり。茶^{ちや}立^たつことを好^{この}みて、かの宗^{そう}易^{えき}が流^{ながれ}をくみて、彼^{かれ}が持^もたる器^{うつは}など多く取^{とり}集^{あつ}め、宗^{そう}佐^さより今^{いま}の代^よ々のつくらせたる什^じ器^ぎやうのものまでも、缺^かくる事^{こと}なくそなへしなど、みづからおひ給^{たま}ひてげり。或^{あるとき}時^{とき}、宗^{そう}易^{えき}が像^{ざう}を壁^{かべ}にかけて、かく尊^{たふと}びぬるは、われに勝^{まさ}るものやあらなど、傍^{かたは}らのものにも淺^{あき}くしく言^いひて茶^{ちや}ひきて

で、いとおもきことゝ心得給ふ心の低くつたなさはわれもいと卑みて、思へどさすが流れくみ給ふえにしもあれば、語りぬ君いま心たかうて、其身のほどにしたがひなすべき事をつとめ給は、君が手ならしつる器物よとて、千年の後もつたへものすべし。これをわれより古をなすといふなり。卑しき我等の持たる器物などに、おほくの財を盡して買ひ求むるのはかなさにては、このさゝやかなる道とても心にはいかで得給ふべきとはたと睨むと思へば、眠りもさめにけりとぞげにかの敷島の道とても、それをもちて家國治むべきものゝやうに言へど、定家卿が苔の下に埋もれぬ名をのこすとも、はかなの道や敷島の歌とよみ給へれば、いくたの歌嗜むものゝうちにも、定家卿のにくみ

居給ひしが、かの像より煙のごと、霧の立つやうに見えしが、宗易來りて、われはもとより卑きものなるが、物にかゝはらず、心たかき氣象ありければ、太閤のとり用ひ給ひてげり。茶立つる事は、一時の心遣にて、なしてもありなん、なさでもあるべきものなれど、その頃いともてあそび艸となりて、さまざま心にまかせ、つひには法もなく、亂れもて行くべしと思へば、さゝやかなる道ながら、式を立て法を定めて、人にも教へものしたるを、今はいとおもき事のやうに心得て、其の道しらぬもの、其室に入れば、顔赤めて一言も出だし得ざるやうに、人の心に染みわたりしも、いと恐なることゝ悲しび思ふさるに、君は人にもかずまへられ給ふ身にて、我が如ものを尊び、この道のはかなきをも知ら

なりしうへに調の高く直なるふりを學ば、つひに千首に一首は佳
 き歌も出できなんと思ふなりと語りしは、もとより過ぎたるにやあら
 ん。されども古今集はいとたくみなる歌も多かれど、一つ誠より出で
 たれば巧とは見えずなん初よりかうやうにせんとしては、品こえて
 學び得ざるものとかや花さへ實さへ薫さへ、はじめより得んとては
 いかで得ん。
 禪意を得たりといふものあり、いかにして得給ひしと問へば、わがこ
 の身は天地のものにて、われといふものはなし。われなければ、敵もな
 し。これとかの浩然の氣ともいひ置き給ひしなりと、高く心得て、言ひ
 てげり。いかにしてその所を得給ひしやといへば思ひくつてつひに

給はんもありぬべし。釋迦の道、孔子の道、學ぶものもいかゞあらんと、
 人のいひし。
 和歌は、只すなほなれとても、餘りに力もなく、味もなく、止水の如くな
 れば、思ひを述ることも得ず。まいて調はさたにも及ばずなん。かの三
 玉の比はあまりに力いれていひ給へば、調のすこし賤きを、たゞ歌は
 古今集によるべしといへども、目も及びがたければ、草庵などの集に
 よりて、よみ習ふ事となりて、たゞすなほに正しかれと思ふより、百首
 一體にいたり、力もなく、味もなく、わがものにもあらぬ風とはなるべ
 きなり。歌はわがものとなりての後に、調のさたにも及ぶべし。まづ今
 の勢にていはし、五葉集難なんにとよりて、力を究むべし。わがものと

得しなりといふ。きゝたる人いと笑ひて、さまぐ聖も説きおかれ
れど、かゝるところ得てしひとは、いまの世にあるべしともおもほえ
ぬ計りまれなるを、いまだ其事々も知り給はで、いかで得給ふべきと
いへば、腹立ちて、知らざらん人はいかにいふとも、われこそ得しもの
を、なとて君はしかいふ、わが得ざる事を知りたまは、言ひのべたま
へと聲ふるはして言ふにぞ、それ見給へ、怒をもいまだ捨て得ずして、
この身を捨てしとの給ふや。ことに色と酒とに耽けり給ふとき、ぬ
それだにかち給はで、わが身にかち給はんとや。よしかり得しとて、
忘るてふことは、いと難きことなめりかし。得しと思ふもの、いかで得
ん。君は武士なれば、弓射る事も言はん。よく引きてよく放つが外に、

弓の道はなし。かくすればよくあたるを知りても、さは出来ぬはいか
にぞや。勝負争ふとき、人おほくあてぬる折ななどは、たゞそれに勝た
まほしく思ふぞかし。又早く放つ弓の病もあり、放し得難き病もあり。
いづれも心の外なるものぞかし。又弓弦のゆるみて、わが耳を打てば、
いと懲りに懲りて、又や耳うたんかと思ふぞかし。耳をすつること
も得せず、おそく放ちはやく放つことだに、心にまかせず、人にまくる
の口惜きをも、いまだ捨て得ずして、いかでこの身を忘れたまはん。と
にかくいまは身に行ふことはつもらで、口のみたかくなり行きぬ。あ
るやんごとなき人ありけり。劍の道を得てしとて、みづから世になら
びなしとのみつねに言ひ給ひてげり。或日、書屋に居給ふとき、末の間

ふこともなりがたかりしぞかし。これをよく／＼思ひ給は、御身の
あやまちもあらじと、涙こぼして言ひしかば、君もことに感じ給ひて、
わが無下に拙かりし事を、さとり給ひしとぞ。よくこれらのことをき
き給ひて、悟とやらんの道は、止め給へとかいひしとかや。
世の人のせばき心から、潮の満干の如く、時たがはぬ事はさ思へど、か
の餘慶餘殃の空より下し給ふことななどは、浮きたることに思ふぞ
かし。かの年の實の豊けさうちついきぬれば、それに苦みて、何くれと
言へど、はては必すたのみ少なくなり行く基なるを知るべきなり。さ
れど、時たがはず、めぐり来るものならねば、さは思はぬなり。豊なる年
に、悪しき年の心持たずしては、虫けらにも劣りつべし。冬ひそまるも

の障子をひらき、跳り出でたるを見れば、大なる男の赤裸になりて、君
をめぐけて、とびかゝるを、いで心得たりと、刀抜きて、切らんとすれば、
跳り超え、或は伏し、左へさけ、右へ走りなどして、いかにもうち得ずと
やかくするうち、すら／＼と走りよりて、その刀を執りてければ、口惜
しき限なく、いかにせんとあせり給へば、かのをのこ疊にひれ伏して
げり。よく見給へば、外衛の臣下なり。その者のいふ、君は劍の道はよく
心得給へども、いまだもぬけし位にもいたり給はず。さるゆゑにみづ
からおうて得てしとのみ思ひ給ふ。まことに得しものは、誰かよきと
思ふべき。さる御心にてましまさば、いかなる過ちかし給はん。臣は劍
の道として習ひしにはあらねど、死を覚めてすれば、臣をたに打ち給

のはその蓄へをこそなせ。たゞあさはかに今年豊なれば、はや悪しき年はあらしと思ふこそはかなけれ。世の人みな善きは悪しきの基なるに、疑なくば、必ゆたかなる年とても、米のあふるゝことはあらしといへば、いかで人々をして、かくはなすべきといふ。さはまだその心にあらぬ故なりと、田つくる翁のいひしをきゝて、わが輩かすかにその日を送るを、いかでまた悪しき年の備なすべからんと言へば、さにあらず、たふとき米とおもへば、日ごとにくるゝも鳥獸にあたふるも、又はかしぐにも、その心はありけり。やすきと思へば、このうらとなりて、打ちこばれぬるも、常木もてはきも捨つべし。この心天が下皆おなじければ、一日のつひやす所いかにばかりと思ひ給ふやあるを此の心

なるは、悪しき實の來るさきつさがと思へば、この一むらにても、其心にて一年に米つむ程にもなりぬべし。米たかうなれば、人々積みおこまほしく思ふにぞ、米のいやしき年よりは、つめる米おほけれども、猶足らずと思ふなり。この心あめがした皆さるやうになれば、いと米は動かす、この村里などとはさらなり、米なき山里までも、何に換へつとも、米つまゝしと思ふぞ、値高うなることわりなり。この心を村里にてよく教へ導きなば、聊はその驗しもあるべけれど、忠實立ちて云ひけれど、牛のかたなにてと云へるたぐひにやと聞きつれど、老いたる人のこと非くべきにあらずと、聞き居たりしとぞ。月なき夜はいと心の底澄みまさるものなりけり。海のおもて暗うし

て、寄せくる波の音ゆたかにして、いそべの松にも音せぬ風の袖にそよと吹きかふに、ひるの暑さもわすれぬべし。秋はなほ虫の音もきそひ行くに、千種の花の色も見えて、沖こぐ船にまがふ雁金のわたるも、いづこなるらんと哀なるに、浦のあしべに聲あはせたるもをかし。まいてあかつき比に月の出づれば、宵の入日の残れるたぐひにはあらず。海のおもてこがねの波の満ち来るにぞ、言葉にもものぶべしとは思はず。昔いぎたなくて、在明の月に疎かりし頃もありけりと思へば、口惜きものから、又うらやましくも思へり。それより想ひの移り行きて、實にいにしへはあしき波にも舟うけて、かつを釣りしこともありし。またはいと寒きころ海に入りて鮑とりし事もありしが、今の昔人は、

まだきに老いぬる様するものぞおほき。其頃の昔物語に聞けば、浦曲の戦の恐しさに、妻子うちつれて深山へ入りし世もありしとき、つるに、月なき空にも心のたのしびを究めぬるは、いかにぞや。かゝることも、かの若人の老いたるさまするをも、あはせていはまほしけれど、また例の老いばれて、繰言云ふとやむつかりなん。人をせむるは、あらはなるを責むべしとか聞きし。まづ面改めたらばよしとこそ云はめ。かれは虎の皮着ぬる羊なりとはいはじ。羊にもせよ、虎の皮來たらば、虎にしてこそやしなはめ。さらば千里をば走らずとも、羊の力の及ぶたけは、走りもしなん。外をせめて、うちを責めざれと昔よりきゝしを。

のみは云はじとは云はじ。温泉を見て水の冷なるのみにあらずと
 は云はじ。さるに何くれと人の五の道を備へて生るゝことはさらな
 り。人は善くも悪しくも、うまれたるなどゝ、さまざま疑へることなど、
 賢きといふ人さへも云ふとかいといふかし。
 千里の駒を送りしものあり、受けざりしかども、忘れがたかりしとか
 云ひしを、善きことのやうには云へど、さはいかと思ふやと疑はしき
 やうなるを、いかでかくは云ふらん。かの國のよきといふ人にも、うけ
 がひがたき事もありとや。王導といへるものが、この良友に背きしと
 いひしは、もはら私なり。よき侍をもてつかひ給へば、その道をもてあ
 だむくいしといふも、かの深谷のうぐひす、深山の梅が香にはおとり

藝能ありしものも昔はおほく聞えたれど、今はさいふ計りのものも
 稀なるにやあらん。すべて昔の人はたがへりしや。今残れる鎧などい
 ふものを見て、も鏃など見ても、しりぬべし。天王寺にある鶏婁は、いと
 重くて、今の世の人はかけがたしとかいふ。そのほか昔物語を今にし
 て見ても、今の世のよろづおとりたる事は知りぬべし。さるに漢の張
 氏の治法とても、斟酌すべきことをも思はず。ことに張氏は汗下の劑
 なんどは、いと心をこめて、其非までも厚く示し置きしをも、疎そかに
 し、一つ病の治法をもて、萬の病を癒さんとし、方は古今など口には云
 へど、わが心に病を牽きつけんとするもありぬべし。
 楓の芽の紅なるに、榎の芽の白きを見て、必草木の葉は緑なるものと

ぬべしとか。
 雨いさゝか降り續くと思へば、はや水嵩添ふ所あり。されば常に船を
 うかべて、水嵩そひゆけば、打ち乗りてさくることのみ心とす。あると
 し絶えて雨のふらざりければ、かねて水をおそるゝより、高き所に田
 作たるが、みな枯れなんとす。水くみてそゝが、んも力及ばずとやせん
 かくやと騒ぐうちに、かのつなぎおける船のすりくはふること、も打
 ち忘れぬ。世はいと變りにけり。越の國もいまは雪、いとうすく、信濃の
 國の寒さもよそに變らずとかや。この國のかばかり雨すくなきこと
 は、八十の翁も知らずとかや。船も要なきものなりなど云ひてげり。
 に明の年は、田をことごとく川面ちかき方へうつしてければ、井など

の寄り來し所なりければ、山田よりはいと生ひ立つるまもことなり
 とて喜びあへりしとぞ。常におろかなりとて笑はるゝをのこ計り、は
 るゝ、鍬かたげて山田をつくるを、指ざして笑ひけり。その年も川面
 の田はよくみのりけり。
 或日、海士の子など呼び集めて、昔わが若き時は、藻刈鹽焼くことも汝
 等がやうにはなかりしぞかし。今は唯空のみあふぎつゝ、よく降る雨
 かな、斯くてはいつしか鹽は焼くらんとのみいふ。もとより鹽汲む業
 には雨ほどつらき物はなけれど、はや晴れぬ、急ぎて汲むかと思れば、
 此の晴れしも時のまなるべし、よし潮くみても、夜の間にふり出でな
 ば押し流して要なき事になりなんとて、夕日の輝くにも、たい浦曲を

ねたるを音立て、競ひありくなり。わが若きころは酒のむ事もなかりしが、この村里にも早酒造る所多く出で来て、それらが爲に、時費やし、財費やして貢物の妨とはなるなり。此の屋にも久しくすみ得んことはかたかるべしなど、さまぐ云ふうちに、きゝ居しと思ひしが、ふとみれば、いつか寝にけり。翁もあまりの事にあきれて、降魔の相もやめてけり。

或翁がまた此の浦曲うち廻りて、おなじ昔の物語に立ちよりたれば、かの翁もゐざり出で、ひたすらに昔の事のみ云ひ出でければ、憂しと見し世も過ぎにし事は、なつかしきものぞかし。昔とても要なきものもありし。我が若き時など、庭の教のみかは、その比のはやり行きし

徒に打ちめぐりて居るを、いかにと驚かせば、あのむかひの島のちかう見ゆれば、また夜半には降り出でなんなど、いつしか口賢き事をおぼえてけり。又明の日もはれぬれば、はやく出づるかと思れば、朝寢して晝つ方やうく出で、鹽くむが、それもいさゝかして早かへりぬ。その怠りを咎むれば、出で、行くけしきなり。いづこの神の祭などいへば、鹽焼きすて、出で来りつひには、林の木々も、人にきらせぬれば、いと魚はより来ぬまゝに、網もよそのものとなしぬ。老魚のより來るときゝても、人の捕るを見ありくのみなり。

今は髪ゆひ候といふ所さへ出できぬ。昔はわらもて束ねなえたる鳥帽子ひき入れてゐるしが、今は髪ふりとやらん見もせぬ。風にし、

かたちを咎められしとき、親の古風と云ひ給ふも、その頃のはやりも
て行きし事なるをと、心の底に思ひし事もありけり。されどげにいと
今の若人は、ふりあしく怠りすぎむ事となりてげり。昔は會かうやう
の人ありしが、今はおしなべていづこの山へ海づらの里とても、みな
その風になりて、口にはかしこき事などいひて、老いたるものを欺き、
村の長をもはいからず。はては公の事をも、おそれみ薄きやうになり
なんと思ふ事のみおほかればとて、つひにはおなじ心に涙こぼして
げり。

草木やしなふ者の云ひし、西より吹く風は草木を枯し極む。さるは西
より北におよぶ故なり。北より吹く風は極まれははや陽をふくむが

故に、枯し極めずとかや云ひしげにさもありなんかし。

大凡躬行にてもあれ、人事にあづかる事にてもあれ、政にてもあれ、新
なりといふ文字を忘るべからず。目に新なりといふは物かは、事々に
新にももの／＼に新なるべし。昨日の事になれて、思ひあやまるも、かね
て知れる事と思ひて、やぶれとるもおほし。かのかしこき人も、女など
に迷ひ愚かなる人に欺かるゝも、ひとつ／＼に新ならねばこそあり
けれ。昨日にくしと思ふ事、心にそみ、去年のうれしと思ふこと、心に
きてはなれねば、それより根ざして、迷ふとか聞きけり。げに日新の教
へこそ、萬にかよはして身を終ふるまでも、忘るなとかたりし老人も
ありけり。

これよりいらへ仕かふまつらんと云へといふこはむこ君よりのな
 り兄の君よりのとて消息いだせば見もやらす俗事紛々たりなどい
 ひて側へなげやりつこの應書くも文なれ今日の事なすこそ學ぶ道
 なれかの量料平かなり畜蕃足らずとは云はずやかゝる目の前にあ
 る事をもよそごとと思ふぞはかなきされど我が才をも足れりとし
 いさゝか漢土の書籍手弄りし計りにてわが邦の戰物語など見て時
 の勢もしらす人情をも辨へず例のことわり云ひつゝのりて童など教
 へ引き入れんとするはいと害とこそはなりぬれ風流に流るゝもの
 は道知る人に笑はるゝのみにてやあらん
 鳶の子の巢立するころあに鳥の巢よりとび出でしに弟のは羽もい

或客齋なるもの今年はことにもの費やしぬとて指折りてかぞへた
 てぬまづ春より秋までかのいたづきに因て飲める薬もかばかりな
 り、それにかゝる事もありしなどかぞへつゝいふをつくゝと聞き
 居し人がいとさがたきが上に君が身につきたるもの、一つあり是
 をいかで費といはんといへばなになるかと問ふ薬飲給はずばかく
 今日なげき事も得いひ給はじ、かくいひ給ふは薬のめぐみなればそ
 れにむくい給ふを費と心得給ふかといひしかの人はこれを費とせ
 ちに思ひけんかし
 文つくり、詩つくりんと硯ひきよせて朝より夕つ方までも思ひこら
 し居たるにこは親君よりの御消息なりともて来れば喜あしきなりて、

いにけり。
 老いて齒の抜けしは、はや脾胃のめぐりも悪しく、わかき折のごとく
 ならねば、和かなるもの食へとなり。さるを堅きものなど強ひて飲み
 下せば、遂に害となる。耳遠きは、はや密に物事聞かぬ爲なれば、物事に
 遠ざかりて、ものにかゝづらはぬが道理なり。さるを人中に立ち交り、
 謗られ笑はるゝこと知らぬも有るべし。これら聊ながら、おのづから
 の道にさかふ故となん云ひき。
 友に交る道は、いかなることか心得べきと云ふに、友はその所長を友

まだとゝのはざるを知らで、つひに飛びたれば、梢より落ちてげり。親
 鳥いかに思へども、形ははや親にまさる計りに、羽のふくらかに生ひ
 立ちたれば、詮方なく、巢に入りてよべども、もとよりとび得ざれば、立
 ち歸るべきやうなし。二三日経ちて見るに、おなじ處に蹲り居たり。捕
 へて見れば、動きもやらず、いと飢ゑに飢ゑたるさまなれば、一夜さま
 ぐ餌をあたへてげり。明けの日は、餌をやらんとすれば、おそろしき
 姿しておどす。昨日は飢ゑてげれば、その心も出で來ざりきと見えき。
 人を威すはにくけれども、このまゝにして殺さん忍びずとて、はぐ
 ゝみやりけり。廿日ばかり立ちてければ、羽もよくとゝのひぬ。さらば
 とて、もとの木陰に連れ行きて、籠よりやせらぬよしをいふ。さらば

いとまれなるものなり。夫等よく言葉を求めなばもとより云ふべし。されどしばぐすべきにはあらずかし。淺き契りの友なりとて、友といふうちならば、その人の上の存亡にかゝはる計りのことならば云ふべし。すべて強てかくせん、かく救ひてんとまげてもとと思ふは、みな中道には背けりといはん。たゞその所長を友とすれば、交はりがたき人もなく、われに益なき友もあらず。かの友に因てわが方の亂れんとするは、皆その短を友とする故なり。とこたへしものありしとや。花の散るは、勢のうちの實のおほきやかになりて、花瓣の居どころなき故に散るなり。此の雨に花は散りぬといふは、雨のうるほひにて、かの實の大きくなればなり。秋冬に至りて、葉の落つるは、若芽の莖のうら

とすべし。古きこと好むには、そのことに友とし、武技このむには、それに友とし、歌よむものには、その道に友とするぞよき。さるに歌とても此の風はあしけれ、かれに學び給ふは、僻事なりなどと云ふにも及よばじ。たゞ交はりてこそあるべけれ。古にいふ管鮑の交はりと云へども、この二人おなじ徳、おなじ心なりしにもあらずかし。世の中に同じ心の人といふものは、いとまれなる事なるべし。たゞわが好める方に引き入れんとするもうるさし。此の人、此の所は長じぬれど、こゝはいと短かし。その短かき所を引きのばへんとするはいと苦し。さ思ふ我もまたその短き所あるものを、ことに思ふことみな諫めものせんとするを、かの信と思ふはたかへりけり。交はるはうらも知已の人、

よりめぐみて、その若芽の大きくなれば、古き葉の居どころなければ散るなりけり。或女疣といふもの襟のあたりより出で来て、一夜のうちに數増してげり。いま一人のは、額に多く出で来て、鮫といふ魚の皮なんどのごとく、星ある胃よりはしげく見えし女のことなれば、いとなげきて、目黒と云ふ所に、蛸薬師と名づくる佛のあるを、人の教へにまかせて、信じて蛸食はじと誓ひて、夜ひとよ心を凝らして願事したり。夜明けて、手洗ひ顔など洗ふに随ひて、二つ三つづゝ疣の落ちにければ、いとうれしくて、猶心こらしければ、二日三日のうちに皆落ちてげり。かの額に出で來し者も見習ひければ、これは十日許りに赤痘瘡のかせたるやうに、霜のごとなりて、みな消えぬ。かほどの靈妙なる人

が、たゞ心のせちならねばこそ、さまゞ心のなやみなどはありとなん、人のいひき。

或る人脚の疾ありて、歩むことも得せず、いいたう悩みてげり。三歳になりたれど、いさゝか愈らざりしを、或醫師みて、この薬まるらすべし。三歳も経なば、つねに服すべしといふを、さらばその薬飲みてんといふ。かたはらの者打聞きて、此の上三歳としては六歳の間の苦みなるをと云へば、さにはあらじ。その薬に因て三歳たちて、もとに復するならば、まづ一歳たちなば、今よりはいさゝかよかるべし。二歳たちなば、猶よかるべし。かくて三歳にてもとに復しなん。いかで三歳がうち今の如くにして、三歳たちしとて、俄に本に復すべきや。今よりいさゝ

かにても、年を追うてよからば、三歳はさらなり、九歳にてもあれ、藥飲
 みなんといひし。
 或人庭好みて、こゝに山築きて、此の木を植ゑ、こゝに池つくりて岸べ
 に何植ゑんなどいひけり。いつ作るかと問へば、まづこの木をこなた
 へ移しぬべし。此の木は來ん春うつし、これは秋移しなん移し終りて
 池を掘りて其土もて山築かんといふを、例物急ぎし給ふに、これ計り
 はいと心長きこと宣ふ。二歳三歳にては、いまだ全き山水のけしきは
 成さじといへば、此木いま植うれば、枯るゝことを眞に知れゝば、今植
 ゑんの心はつゆもなし。これは立冬のころ、かれは立夏の頃植うべし。
 此草は清明のころ植うべし。いま見てをかしと思ふ計りの大きなる

木山なにとに植ゑたらば、枝もかれなどして、風景を損するなれば、五
 六尺のわか木植ゑて、この山にておのづから長ずれば、心の外のけし
 きをなすものなり。いかで二歳三歳に全そなはるべき、十歳もたちて
 こそ、をかしうも見るべし。いま俄にすべきものならぬことを、眞に知
 りぬれば、初より物急ぎする心は露もなし、いちはやく功なさんと思
 ひ給ふは、本草植うる時を、眞に知り給はざる故なりと云ひしげに、知
 るはおなじく知るなれど、眞に知るにあらざれば、知るとはいひがた
 し。古の釣垂れし人も、眞に時をば知りにしなりと、また人にかたりし
 とぞ。

櫻の花を鹽にし、壺にたくはへ、封つけておきけり。客人のおはする頃

などと思ひ置きたり。夏のころ客人おはしけれど、酒もくみ給はねばかゝる折出ださんも玉の盃のなにと云はん心地すればとて出ださず。また異君來給ひしには、酒このみ給へど、風流好み給はぬものに、いかでとて封きらず。秋の末つ方になりなければ、此の頃かへり咲きとて、こゝかしこの枝にはかなけれども、咲くこともあれば、これをもそれと思はんはいと恨あればとて出ださず。師走の頃例の草木賣るかたには、櫻はさらなり、藤なんども咲せて、賣りひさぐと云ふをきけば、いかいせん。それとひとしからむもいと口惜し。來ん春もはや近し。さればとてたくはへ置きし花を、無下になすべくもあらずと思へど、客人もおはせねば爲ん方なく、只酒飲む人の來りぬるとき、封きり

て花をとり出だしたれば、客人打ち見し計りにて、やがて食ひさしながら、これに鹽氣ある花なり。此の頃さるかたにて、酒飲みしとき、盆に植ゑたる櫻を出だしたまひしかば、盃にうけて飲みぬ。花はしほけなきこそよかりけれと言ひしをきゝて、涙落して悔いけりとかや。秋の末つかた、雨風殊にはげしく、樓のたぐひ吹き荒すもおほかりけり。その冬にかありけん、眺望よき所に至りて見れば、案内の男が出で、ことし秋の嵐にこゝの樓かしこの臺も吹き倒れにけり。されど此一つばかりは、嵐にも障らざりしと云ふを見れば、いたう古き樓なり。いかにしてかと問へば、人多くのぼりて、風の吹き來るごとに聲あげて居たりしが、人の勢はいかにも恐しきものにて、かくはありけ

り川の堤または橋なんども、皆かくして防げば、みなぎる浪も避ぎて行くとか聞きぬるといふげにわれも聞きしことなり。されどこの高殿はいと古くて、人防ぐとも耐ふべしとは思はぬを防ぎし手術もありけん、と猶尋ねれば、かの主人、人を選びて防がせたりしと聞きぬといふ、聲高き男えらびしにやと問へば、さにはあらず、人の顔をうち見て、かれは疾くのぼりて防ぐべし、かれは登り侍るまじといふ、いかに此の頓のことなるに、人嫌ひし給ふといへば、かれはいとうすき相なり、かゝる事なさせそと言ひしと語りし。

晴雨をよく豫めいふ者ありけり。朝は雪降らんといふ、その日になれと降らず、風はげしからんといふ、その日になれと吹かず、いかにしつ

る事よといへば、こゝは降らねども、いづこか降りしなり、こゝは吹かねども、いづこか吹きしなりといふ、聞く人笑ふ。後にきけば、その日箱根の山は雪ふり、武藏野のあたりは風いと劇しかりしとぞ。こゝの里の晴雨にたがへば、人の笑ひは免れじ。さらば云はぬにはしかじかし。今の世書を好むも、おほかた書を知らず。されば尊ぶべきことをば云はで、尊からぬ事を擧列ねて、尊ぶなり。書のこと何にかも書きけん如く、言葉と文筆の及ばざるを助くるものなり。いでや黒き白きとは云ひもし書きもすれど、かゝるを黒きと云ひ、とあるを白きとは何をもちあらはさん。さるに此の書ありてこそ、言葉にも言ひがたきことを、そのまゝに知るなれ。まして古のさまより、代々の服章風俗なんども、文

その初は花の宴の巻より起りたるを人の心の靈妙いかでそれを感
じ知らざらんと思へば早やその事を書いおけり人すくななる容子
なり奥の樞戸も開きて人音もせずかやうにて世の中のあやまちは
するぞかしと思ひてやをら登りて覗き給ふと書いたるいとをかし
と云ひぬ。

蠻國の文字よむ事は古ことにはあらざりけり近き頃はいと翫ぶこ
とゝなりし也或人の云ひしは蠻書の和解など見たるがこゝにて要
なきと思ふことは審にしていゝぞと思ふ事いとあらしおしなべて
云へば要なき事ぞ多かめる今の世、專醫師の文を讀みて、諸の病を癒
さんとする者もありぬべし人も珍しきには傾く習なれば頼むもの

筆もて傳ふとてもこの畫なくては見ざるものゝ見るやうにはいか
であらん書と畫とを左右の離るべからざるが如いひしは畫の尊き
をよく知りたるなりしかるにかれはよく畫くものなり筆を下せば
何となう雲の勢をなしつあるは遠山のほのく見ゆるも海原のう
ち霞たるも心に造化をこめて筆にあらはすに妙なる事なりと言ふ
はたゞに一技にしたるなり云はゞ獨樂よく廻す鞠よく蹴ると云ふ
にひとしたゞにその尊きこと知らざる故に尊からぬ事を上げて云
ふはかへりて其道を穢すなりと云ひき。

源氏物語の心深く作れるがうちにも殊にいといたう感じぬる事こ
そありけれその中にも須磨の流離は生涯のいと大きな事なるに、

も出で來にけらし。若一向になりもて行かば、危きことにこそと人も云ふなれ。いかにとなれば、夷の文字讀むとても、その心をよし得るとても、唐國の文見る如くに精微には至らじかし。云は、不學なる者、字書を傍に置いて、ひとつゝ見つゝ讀む類ならまし。かくしてありあふ醫書師もなく、口授もなく、代々の末書註釋もなく、字書のまにゝ讀み下すとも、いかで審には得てん。夷の文は、その類とや言ふべからん。其文字とてもくはしく、我がものにはなり難きが故なり。今言ふ如く、醫書の二部三部師もなく、末書註釋もなく、たゞ一通り讀み得しものゝ、俄に濟生の術なさんとしても、信じがたくやあらん。まして風土も違へれば、草木も木も我が國とは同じからず生れ得し人もまた違ひ

ぬべし。さるに、臚げに讀み得て、似よりたる草木とりて、風土たがひして、人に與へんとするはいかにあらん。たゞ珍らしきを好む心より、信するやうにもなるべからん。蠻學十年の功つみて、治療すといはい信じなん。唐大和の醫師の文のかすゝ讀み得て、治療せずして老にいたる醫師も少なからじを、まして蠻國の醫師の卷々こなたへ渡るも多からねば、その多からぬ書を片言讀みにして、いでその風をなさんと云ふたぐひならまし。近き頃蠻國の草木のこと書いたる文を和解したるをば、ありあふ醫師の助にせんとはいふは、いと宜なり。いかにも民間の妙藥とても功著しきも多ければ、また彼の國の事よとて、よき事をも惡むは、屋の上の鳥を惡む類にして、そのよきを知るの教へ

にも違へりなん。されど唐大和の傳ふことをも餘所にして、夷風の醫師の道ひたすらに新うものせんとする人も出で來べきやとて、此の事の多く要なきことを、まづ云ふと云へりけり。げに此の事は人にもかゝりぬることなれば、よそ事にはせじと思ひて、語りけんかし。さらでも夷風のことは何となう流行り行くなる人情の、いといたう好からぬと云ふことも聞きたれば、かくは繰言云ひにけんかし。

人並よりは聲たかく、心つよく愚なるものが、わが思ふまゝのことで云ふを、いと道理なき事と知りても、こなたも同じく聲あげて争はんも要なき事なれば、そのまゝになし置くなり。されば、いよく我れ計り道理あるものゝやうにおぼして、かの車を横に押し、舟を陸にと

云はんばかりになり行くめり。後にては笑ひ譏れど争ふにも及ばざれば、知らぬさますれば、いよく高ぶりてばうぞくの振舞ひなすものぞかし。まして惡しきも人にすぐれたるが心強く道理なきことを押し立てゝ、世をおほひ人のかすめて暫く勝をとるもの、古の文にも多きを見るべし。それに因ても思ふべし、かの至大至剛の浩然の氣、天地の間に満つてふこと、實に然もあらんかし。惡しきも一筋に行ひて疑はざれば、一度は世をおほひぬるものを。

閉藏の氣ひとたび變じて開け出づる頃は、必風吹き雨もはげし、又のびたる陽氣のひとたび變じて潜らんとする折も、かくあるなり。いかで雨風の花を嫉み紅葉のあだをなさん同じく降る雨なれど、一重の

筋をよく見て、さて利害得失をも照し見るべし。世にいふ才あるものは、まづ我が利害得失早く見ゆれば、利につき、害に遠ざからんとのみして、その筋を失ふなり。たゞ害ありとも、かくすべきと云ふは、いいたう重き筋の事なり。されば、その筋の重きと、輕きと、利害の重きと、輕きをかけ合せても、その筋のかた重きは、害に逢ふとも、その筋にしたがふべし。また才なくして、筋にも暗く、たゞ一筋に心得るものは、筋の輕きにも重き害を得て、辭せじとするもありぬべし。才ありても、道學びて明らかなるにあらざれば、輕きを重しとして、終に道失なふものこそ、多かれ。

生れて物覺ゆる頃より、老い行くまで、些少も怠らずする事あらば、必

花にははや散なんと怨み、八重のかたには咲き初めんと待つものし、この雨いつか晴れなんと、麥つくものは云ひ、雨こそうれしと、苗植うるものは云ふらん、麥つくかたの雲をはらし、苗植うる空は降らせんとは、いかであらん、小民うらみ歎くは、たえぬものとや云はんかし。

孔子喪ある折、常をかへて拱手し給ひしを、門弟子それを學びしがば、二三子學をたしむの甚しきとの給ひしをもても知るべし。いにしへ形の教へありて、形よりうちに及ぼしてこそなるべきを、今は心もて心を治めんとして、勞しても功薄きにはあらずや、まして勞するほどに至るも少きをや。

事に處するに、利害得失に心をつくるも宜なれども、まづそのことの

いかなる業にも秀でぬべしといへば、たいに心用ふるにあらざれば、幾度なすとも得べしとは思はず。この飯食ひ、汁吸ふは物覺えてよ、日に三度は缺くることなけれども、かくせんと思ふ心なければ、飯食ふに上手もなく、却りて食ひこぼし、または魚の骨立てしよなど云ふもあるべし。さればかくせんと思ふ心ざしの、一つなりと云ひし。醫師の心得べきことを語り給へと云ふものに、まづ師を選ぶべし。世にいふ才あるものは、學ぶところ淺く味はふところ薄し。年老いたる石の而も文などもよく味はひ、治療世になせども、晝夜殊に奔走する程にもあらぬものにならふべし。規矩を守り居るものは、世中の交はり心にせされば、左も右も、前も北も取り用ふるやうにはあらぬものなり。今云ふ流行るとか云ふ醫師を見ても知るべし。總て、またものに片寄りて、傷寒論中の藥のみ強ひて用ひんとするも、東垣などの流

によるも、また用には立ちがたし。古今の方より俗間の方までをも試み、それを心してつかふものは頼むべし。さて師としても其師の僻をよく見て、わが心に戒むべし。今は師の僻を似するを心とし、果ては老いたる師なれば、腰打ち屈め、老聲學び出ださんぞ腹かゝへぬべき事なる。さて物をもよく習ひ覺えてのち、病家に始めて行けば、こゝぞ大事と心得て、診察はさらなり、ヒとりても容易くは盛らず、この心を後後も忘るべからず。其うちむづかしき病あれば、たい心にかゝりて、夜半も案じものし、明くる待ちて行きて見んと思ふ、この心をも忘るべ

る醫師とはなるとなり人招かねば黄橋の苦にせまりてわが方より
 規矩をすて、病家にへつらひ、又はわが道をば次にし、酒など食うべ
 猿樂やうの事などして、それもて人に用ひられんことを欲するの類
 其餘さまざま利に走りて、終にわが業に怠る者もあるぞかし。さるに
 人招かぬ折も、わが規矩亂さず、潜まり居て文々能く見て、心に會得し、
 三歳にてもあれ、何日までも心をかへず日をあはせて、物食ひなどし
 て時を待つ。かくの如き者時に逢へば必終には名ある者となるなり
 と、忠實だちて殊更に云ひしは、醫師のそのみにはあらずかし。高貴き
 人、俄に病氣に罹れりけり。容易からぬ様なりければ、今此の醫師一人
 に任せんもいかなり。彼れも醫師の道には尋常ならねば、これと心

からず藥與へたるが、遂に救ひがたきに至れば、一日二日は物食ふこ
 とも得せず、心を傷むるなり。この心猶忘るべからず。さてその心にも、
 人々自ら感じて、いと年若けれども、切に心用ひぬ、かの風も怠りぬ、こ
 の痞も遂に癒えぬと、稚なき者の筆とりて、書くによきことなけれ
 ど、見るものその幼きにしては能書なりと賞むれば、自は誠の能書と
 心得て、下達する如く、風の心地おこたりしとて、賞むるにも及ばざれ
 ども、年若くしてと思ふ心から、人も珍しきを歡ぶ心よりして、もては
 やすを、我が心にも慢する兆出で来て、切に思ふ心も薄くなりぬ。素よ
 り拙きに勤むる心もゆるびたれば、病多く癒えず。また招く人もなし。
 この時ぞ、醫師終身の覺悟の定まる時なり。この時よく心得しが名あ

を合せて、藥調せよと云へば、初の醫師頭ふりて、さらばその世の常ならぬものに任せ給へ、かゝるとみの病氣を療治せん人に語ひては、いかで出で來べきと云ひければ、實にもとて、初のに任せてければ、その病氣も速に怠りぬ。

時ありとてや、梢より心かろく散る紅葉の、庭にうち積れば、木枯の風は梢に聲たえて、庭の落葉のいまさら時めきがほに、舞ひつ騒ぎつ音立つるもいと騒がし。かの世捨人の今さらまた人交りなすに例へつべしと云ふを聞きて、げに彼のつかひかへして、風月の全身にはこるなど云はんには、世の事をば塵土の如く思ひ捨つべけれど、わが家をば、わが子に譲りてし上は、わが今の職は、風月なりけりとて、後のこと

も家のことも餘所ごとく思ふべくやと問へば、いかで然あらん。大君の御祖に賜ひそめし此家の譲を得て、また御許し蒙りて、その子に譲りしなるを、いかなりとも餘所に見んは、かの獨善の人ならんかし。されど其子の爲、家の爲とて、また落葉の立ち舞ふやうにし侍れば、其子のすべき事をもかすめ、其威徳をも消つべきなり。さればとて物によそへなどして、少し力助くるやうなる事は、慙なることにて、徳なくして害とはなりぬべし。素より其子の才にしたがひては、猶豫てより、猶その助くる者らよりして、心備へもあるべき事ならんかし。何處の家にもある習にて、よし事纏れしたること出で來ぬるとも、其子をも凌ぎて、よし清らに打ちそゝぎたりとて、後の爲よしとは云はじかし。後

の害をも厭はでなすは、殊に異なるにあらざれば、いかであらん。されども、こは易き事なるべし。後の害の重きと、今の重きとをよく思ひ比べて止むことを得ずば爲すとも、中國よりしばし夷の力借りしやうなる悔事をも思ひ計るべし。たい二人の君ある姿になしつゝ、後の爲にも惡しからぬ程をなさんの道は、時にもよるべけれど、いと難きことに、猶後の害はありぬべし。たい仕へ返しぬる身は、よし身後の心地とても、生けらんうちこそ、いいたう大事なれ。いかにとなれば、こは人のとぢめなればなり。若きがうちは、よし過ちし事ありとも、また改めて後も年を積むものなるに、人のとぢめとなりては、改めての後とても、いくほどかあらん。ならば仕へ返し、人は仕ふるうちよりも、

事慎みてこそありぬべし。

禍福は組みあふ繩の如なる事は、もとより知れることなり。唐土の古文の世々の亂るゝあとを見たまへ。いいたうめでたきといふ所より、亂るゝ端をなすものぞと云ひしは、一言ながら心留むべき事とや。

或山里ありけり。人もいと多く住み居て、何乏しき事なく、家々皆富み足りぬ。糸とり、はた織りて衣とし、自ら作りし稲麥刈り收めて一歳の食とす。外にもとむる事なければ、其里年を逐うて繁昌す。海も遠からねど、四方に山を隔つれば、關を置きて、異里より物商ふ事を禁ず。魚は月に幾度と定めて、干したるのを買ひ來りて、村のうち賣りひさぎて

食ふなり。異村へ出づるものもなければ、羨む心もなし。異村よりいと富めれば、爰へ魚など持ち來したらば、珍しさの餘り打擧りて買ひなんと思へ共、其村の掟正しくして、破り難し。或浦の長、年頃心にかけて居けるが、彼山里のうちに、心合するものありければ、それと調じ合せて、魚など賣り來る事を許されぬ。いでやとて、持ち來したるが、珍しきうちは、鯛よ、すいきよと買ひにけり。又異浦のもの打聞きて昔より彼山里へ賣らまほしく思へど、掟あれば、黙し居しなり。彼浦より魚ひさぐと聞きぬ。浦に隔てのあるべきやとて、又持ち來したり。最早彼里人止めんやうもなし。此處彼處の浦より持ちこして、名も知らぬ魚見るは、珍らしと云ひしが、それも常になりければ、買ふものもなく、山

越え來し魚多く腐れぬとて、浦々よりは根など云ひぬ。其里の若き者らは、異浦の人々に交れば、昔よりもてきしふりもたがひつゝ、魚なくては、物食ひしやうに覺えず。自ら織りてし衣巾は、面伏せなりとて、こどもの好みぬる風となりて、げれば、富榮えたる里なりしが、衰へ行き、異里の人々數多入りくれば、争ひ事も絶えざりしとかや。年經る鯉のありけり。いかにして様々のことにもかゝり給はで斯くましゝ給ふやと問へば、さらば語りものせん。香しき餌のあれば、とめきても食はまほしき事ながら、これぞ大事の事と心に占めて見れば、妖しきことあるものなり。さ思ひつくれば、鰭振りて遠く遁れて、些少も顧りみず、よその魚も怪しきことよとは思へど、遠く去ることを

て水底につきて放れず網引は上のかたを行きぬ故に捕るゝことなし。かはうそ、あじかなんと云ふものもあれど深く潜まり隠るれば、その憂も免れぬ。また俄に雨降り出で、思ひ寄りぬ邊、またはつねいささか水の落つる岩がねなどより、瀧の白糸繰りためて、落ちそふ勢のはげしさに、心もうき立ちて、かの龍門の瀧ならぬ事は知りながらも、あまりに心地のよさに絆されて、その瀧を登るにぞ、あるは岩角に當りて傷くもあり、辛うじて登りぬるも、雨止みぬれば、いと浅き瀬なり。歸らん道も知らねば、深き所々辿り行くを、行く人などの見つけて捕るぞかし。かうやうのにはかなる勢にも乗らずして、かく百歳をも幾度か經にけんと語りし。

せず、童などとは、かの釣針てふ物にかゝりて、いかほども捕るゝを見ながら、兎に角その香しさに心つなかれて、あたり離れず歩いて、心のうちには思かなる魚共は皆かの餌に捕るれど、いかで我は彼れにものせられんと思へど、晝夜この邊に漂ひぬれば、かの怪しき外に餌のなきに爲ん方なく、立ち寄りて少し食ひてんなどゝするうちに、遂にはかゝるもあるぞかし。また網と云ふものあり。ざと音しぬれば、四方みな網の目なり。こはいかにせんと思ふに、或は周章騒ぐもあり。又何計りの事かあらんなど、かしこき人をもあなどりて、跳りあがりて越えんとし、または破らんとするを、人はもとより人なれば、様々に扱ひて、つひに捕るぞかし。我れは彼れのと音するを聞けば、心してめ

寢覺の里に行きて見れば、案内の者出て来て、この岩は獅子といふ、虎といふなど教ふるもうるさく、いかで、こは獅子なるべき、これも將虎の形とは見えぬをなんと、一つ云ひ消たして行きぬ。その歸さの道に名もなき岩のありしをふと見れば、よくも猿の腰掛けし姿に似たりといへば、實にと人も云ひけり。後より來たる人を招きて、猿に似たる石ありと誇らしげに云ひて、これ見給へといへば、似たる所なしと云ひけり。明の年、かの寢覺の里へ行きて見しが、案内の者の云ひし詞はや忘れてければ、これ虎の姿なり、これは獅子の勢なりとみなしぬ。初めは虎よ獅子よと聞きて見れば、似たるやうには思はざりしか。

こゝに行幸あり、はや鳳輦の既にかやき見ゆる程なるに、市巷の雜人群り居て、何となう人の聲の響きたるを、前驅なんど走り廻りて制止するが中に、一人大きな聲出して、早やこゝに行幸あるに、何とて聲高うはするぞと制止したれば、群る中に誰れとはなけれど、その制止する聲、我れらが聲よりいと高しと云ふも、人多ければ高く聞ゆ。彌いさめきて、聲高に雜言交へて制止すれば、猶いと聲高く制止する聲いと高しと、どつと笑ふ。

仙人を珍しと人は云へど、世のさかしき風にのり得て、歩く人もあり、要なきものを飼ひ養ひて、樂しむ人もあり。鶴をめで龜になれて、齡むさばる人もあり。瓢の酒に因て、心の駒の繋ぎがたきに至るものもあ

の出づると聞きしがもし見しやと問へばげにも柳の邊に白き衣着し女の立ちて居しやうに見しとて驚く氣色もなし。いかにして怖しくは思はずやと問へば都へ出づる頃たらちねのこの観音の御守と、北野のとは肌放さでよとて袋に入れて給ひぬ。變化のものあらば、観世音も北野の御神もましまさん。彼れ我れを殺さんとせば、守り給ふべし。神も佛もなき世ならば、變化のものもあるまじと思ひしなりと云ひしとぞ。

源氏物語に、薄雲の后に心をかけそめ給ひしは、たらちねによう似かよひ給ふと聞きて、何となう幼き御時より慕しく思ふを初めとせしさまに書けるはをかし。花の宴の時、酒の酔に紛れし過、遂に身をおふ

り。千歳を一時として、此の世に存在ふる中にはや名亡すもあり。碁なると圍みて、一日を時の間に費すもあるべし。たゞ仙人は、よし要なくとも、その名は今に残れど、今の仙人の眞似するものは、この所たがふにやと笑ふ。

田舎より出でたる今參りの女、年もいと若かりければ、人々何くれと欺きなどしけり。黄昏の比使に出でぬ歸らん比はまだ暮れじ。かれを驚かしてんと、門のうちなる柳のいと繁りたる邊へ白き衣引き纏ひ、女の髪亂せしやうに作りて置きけり。物の差別もさだかならぬ頃、歸りにけり。柳の前を通りたらば、聲あげて遁げ惑ふべしと、息殺して垣間見居し。か何とも云はで過ぎにけり。柳の邊にはこの比變化のもの

る禍となりしも、初めのほど天が下に轟きたる御勢ひ、つひに櫛の巻に至りて衰へにたる頃、御みづからの行ひもいと亂れもて行きて、禍催しけるさまも必ずかゝるものなるを書いのせ、須磨の流離に至りても、御みづから咎なきやうに云ひ給ひて、何となく濡衣着給ひし風に書けれど、その浦の波風の咎にて、大空のゆるし給はざる事を現はし、使の者らが都の長雨のことなど云ひて、紛らし、後、大炊殿のかみのおちけるも、須磨の浦に限りたることを示したる、いと巧なり。また源氏の君再び歸り給ひて、繪合せに至りて、大臣の心いどみあふけしき、常に自らが威をふり給ふさまを記し、後にいや高くなりきはまり給ひては、何の禍があるべきと思ふに、女三宮の後見のこと出で来て、

終り全くし給はざりしに留まれるを殊におぼえぬ女三宮の物怪は、柏木の生魂など書くべきを、こは人も知らねば、さは書かで、かの御息所は人々の心の残るよりはたかゝりけりとむかへて、思ふ心を示したるはいとをかし、その比、藤氏の盛になりて、君をなみし、勢を憚からずかいて、源氏の君を大臣の列に加へ給ひて、藤氏をおしゝづめしことも、夕霧を大學寮に入れ給ひしも、皆かゝらんかしと思ふことを餘所事にして書けるぞたふとき、實にまたなき物語なりけり。されば見るごとに、奥意の深きをおぼゆた、佛の道にのみ入りて、誠の道に暗ければ、冷泉の帝、光君の御子なりし事を始めて、治したるところの書いざま道知らぬよりして、誤れりけり。こゝのみぞ、女童などの見

ても、道ふみたがふべくやと、危くぞ覺ゆる。薄雲、朧月、夜なんどの人の道に背けしは、童も知りぬべければ、迷ふべしとは思はずなん。佛の事をばやんごとなく、尊きかぎり書けれど、宵の僧の要なき事さし出でて云ふさま、三所にまで書いたるは、又をかし。此物語を、たゞにあはれを盡したるものにて、させる道理あらはしたるものにはあらずと、本居の云ひたるはをかし。されども、はしく心はこめて書いたるには疑ひなし。藤の花は近う見れば美しけれど、餘りに近づくれば、薫はまた佳からず。花やかに咲くかと見れば、未までは開き得ず。殊に己獨盛を見すること難く、必異木に凭りて、丈高き勢見するが、その凭りそふ木の枝も葉も見えぬ計りに、おほひぬれば、其木も遂に枯れぬるにぞ

われ一人の心ばへ見えて、木高く咲き満つると思へば、嵐などに逢ふ時、もとより枯れし木なれば、打倒れてげり。高う見えし花も、終に叢に埋れて、また見る人もなし。代々の小人の情態にも例つべしと、人の云ひけり。

しふねき深きは、山吹と常夏なり。春も過ぎて、桃も櫻も一つ、柳と見ゆるに、こきませし春の錦も忘れぬ。頃山吹のいさゝか咲き出でたるも、云はぬ恨ぞ深げなる。また花さへ散りはてゝ、あぢさるもおもかげ残すころ、はかなげに咲きたるも。

深川の八幡の社の祭ある日、多くの人見に行きけり。二つ三つ許の子を抱きて、母の行きたるが、大きな橋あり。渡らんとすれば、その子の

んを知らざりしなり。こは蟲けらも其生くる道を求め死すべきを厭ひて、殺すに心なきものには、馴れ近づく類はこれ自ら生々の徳備し、大空の御心にて、それを受け得し萬のもの、皆斯くあるべき事なり。されば占にあらはるゝも、龜焼きて見るも、みな天地の中にあるとあるもの、知らざるはなく、感ぜざるはなければ聖も一つの教へともものし給ふとや。

人をしるは偏なき處より明かなり。かの辟すれば正しきを失ふ。いかでわが心曇りて、人の心を照さん。わが才智きてんにて、照さんとすれど時にとり暗き時あり。いかで照さん。家國の姿は、若々とあらまほしもし年老いたる姿になりもて行けば、物事沈みはてゝ、人に見知られ

ひた泣きに泣きて止まず。橋を渡らじとかへれば泣き止みつ。いかにしつる事よとて、さまざまにすれど、初めに變らず。先づさらば、こゝらに憩ふべしとて、橋の傍に居たるが、暫しゝて橋の上の人騒ぎ立ちて、聲の限りに呼びつゝ、周章ふためき遁げ惑ふ。いかなることとも分かず。よく聞けば、その橋の半より落ちて、渡りかゝりし人、千人計りも落ちしとなり。それを聞くより彼の母も、おぼえず涙落ちてげり。いかにして、この子の知りつらん。神佛の援け給ひしなりとて、伏し拜みつゝ、急ぎ歸りにけり。その子のみかは、その母も知りたれども、たい私の心におほはれて、照らし得ぬなりけり。素より、その災に逢ふものは、面にもあふれて、その惡しき色を現はすべければ、心の鏡ははや照らしけ

やどとなき司の人に云ひし君は諸の司のうちにて云はゞ先づ手と
 や云はん足あればこそ手の尊きを知るとかや云ふぞかし山の高き
 も麓の土よりこそ出で来るなれ足なくば手もて這ひ歩かなん手も
 し足の代りをなさば足必手とやなりなんかしと云ひぬ。
 民草の雨風を厭ふ餘りに昨日の風に、はや葉末萎れぬ。この比の雨に
 丈も伸び過ぎぬれば、みのりも少なかるべしなど云ふは力ある民草
 なり。此の雨にはいかいあらんと問へど、さして障りもあらじ、明日さ
 へ晴れなば、かへりておひ立ち早やかるべしと云ふは、心のうちは秋
 のたのみ心にかゝれど、云ふもさすがに心地あしければ、口にはよき
 さまに云ふは、民草の力の衰へしなりけり。重き病につき居たる縁者

じと、物のいろめも花やかならざれと思ふまでになり行くぞかし。そ
 の心よりして、人に秀でんの心素よりなければ、物の堪能上手も絶え
 はてぬるものとなん。
 大内家の強大なるより驕り出で、管絃亂舞、詩歌風流に流れて、雲上
 の學びし、もとゝすべき武の道も衰へければ、終に忽ち亡びにけり。い
 といたうやんごとなき御訓へといふにも、大内今川室町の事をば、鑒
 戒とすべき御響もあるなれ。今も猶愚かなる例には云ふなりけり。か
 の詩歌管絃など、惡事にもあらざれば、自ら赦して、節度の流るゝをも
 知らず、終に武道を忘れて、物笑ひとはなりにけり。さすがにあらき事
 をば、誰も憤めど。

の者ら、今日も昨日も同じさまにて、悪しき事はなしと云ふは、病重るなりと人の云ひし。

昔兩頭の蛇ありしと聞けばとて、蛇の同じほなるを捕へて、二つの尾をしかと結びて、離れざるやうにして、庭へ放したり。一つは南の方の草むらさして行かんとすれば、一つは北の方の林へ入らんとし、頓に行かんとのみして、一つ所にのみ居けり。戯れに下り立ちて驚かすれば、愈いどみあひて、一つ所にをどり居けり。如何すらんと、折々見たるが、三日計り経て、二つの蛇和ぎて心を共に合はせ、尾の方を繩の如くにして頭を二つ並べて行くにぞ、常のよりは遙に速かに這ひ行きけり。げに人も心の一つなれば、目も耳も心も一つに随ひて見聞さし事ある

一つ心なればこそ、かゝりけれ。若し一つ心の心ならば、右の手は左

を凌ぎ、左は右ををねみ、手して取らんとすれば、足は餘所へ行き、左は左に行かんとすれば、右は右へ行かんとして、一つも人の事たる事はあらずかし。さるに古より國の司たる者ら、或はをねみ憎み、又は互にしのぎなどして、たゞに我が威をふらんとするは何の心にやあらん。國家の事を餘所にして、只わが身ある事をのみ心とするにや。かくては亂れざる國はあらずを、わが身にのみかゝづらひて、その事を思はぬは、たとひ何の才あり、何の力ある者とて、何にかはせん。政をなすも、時と勢と位とを知るを要とすと云ふを、或る人の風に譬へし。江都にていは、春を待ち得しは、時を得しなり。風を得しは、勢

る人ぞなきと云ふを書いてもものしたりしとなり言葉添ふるまでも
 あらずいとをかし。
 膽をねると云ふはいかにして得てんと尋ねしに、天命を知るにあり。
 此知るは誠に知るを云ふなり。只黄金などの欲は去り易し。好名の欲
 ぞ、いと悲しき。古にも父君の命に背きて、身を潔くし、朝廷の事を譏り
 て、直を賣る。これを忍ぶならば、何か忍び得ざらんとまで、古より云ひ
 しをや。只その天命を誠に知りて、疑ふ事なければ、つゆも心の煩なく
 塵計りも穢なし。獨寢衾に恥ぢずとか云ふ、かの浩浩たる氣とも云ふ
 らん。
 物の大きく見ゆる人は、睡子の中高なるにて、中凹なるは、物を小かに

を得しなり。わが身は高き所に居て、四方の梢を下視して、糸を放つは
 位を得しなり。その風を持ち、糸など持つ者あるは、人を得しなり。風の
 ほども見て、尾など云ふもの、又は糸などのほども計り、引きつ緩めつ
 して、風待つは術なり。術といふも、風をあぐるの外ならず。別に巧にす
 べきにもあらずかし。昏愚の下民を救はんととも、人毎に説き、戸毎に
 悟さるべきものにあらざれば、假に術を設けて、その道によらしむる
 事もあるべきと云ひしも聞えぬ。兎に角善き事にても、その功なきは、
 このみつを待ちつくる心の薄きなりとなん云ひし。
 人の上たるもの、心得べき古歌をと望みし者に、いか計りかありな
 ん。いまだ胸に浮びしとて、心ひくかた計りにてなべて世の人に情のあ

見^みする故^{ゆゑ}に、遠^{とほ}くの物^{もの}は見^みえず。人^{ひと}に問^とはざれば、世^よの人^{ひと}皆^{みな}かく見^みゆると思^{おも}ふなり。陽^{やう}氣^き多^{おほ}き人^{ひと}は、水^{みづ}飲^{いん}水^{みづ}浴^{よく}して、ますく善^よきをおぼゆ。それをもて、世^よの人^{ひと}かへれと思^{おも}ふ類^{たぐひ}にて、かれ喜^{よろこ}ばんと思^{おも}ひて云^いふことをふづくむあり。恨^{うら}まんと思^{おも}ふ事^{こと}を喜^{よろこ}ぶあり。わが私^し智^ち獨^ど見^{けん}にて、人^{ひと}をいかで計^{はか}らん。敵^{てき}情^{じやう}を察^{さつ}し、軍^{いくさ}に勝^かつものもあるを。

今^{いま}いふ費^{つひえ}は、かくせずともあるべきを爲^なすなり。世^よに云^いふ吝^{しん}きと云^いふは、かくすべき事^{こと}をせぬなり。云^いは、水^{みづ}を壘^{たみ}の上^{うへ}に零^{こほ}したりとて些^{いさ}かの水^{みづ}を懷^{ふところ}の紙^{かみ}手^てに當^{あた}るまに、掴^{つか}み出^いだして、押^おし拭^{ぬぐ}ひ棄^すつるもあり。また多^{おほ}く零^{こほ}れぬる水^{みづ}に、少^{すこ}し取^とり出^いだして拭^{ぬぐ}へど、水^{みづ}は壘^{たみ}に流^{なが}れ行^ゆくを、又^{また}少^{すこ}し取^とり出^いだして拭^{ぬぐ}ふ終^{つひ}に壘^{たみ}に水^{みづ}は半^{なか}入^{はい}りてければ、さて置^おきぬ

るもあるべし。水^{みづ}の程^{ほど}に従^{したが}ひて紙^{かみ}もておし拭^{ぬぐ}ふべきを、多^{おほ}きも少^{すこ}きも、その程^{ほど}を知らざるは、皆^{みな}聖^{せい}の教^をに違^{たが}ふと云^いへば、聞^きく人^{ひと}笑^{わら}ひて、神^{かみ}なんどに聖^{せい}の道^{みち}など、は如何^{いか}なれ。こは如何^{いか}にしてもありなると云^いふを、神^{かみ}とて空^{そら}より降^ふり來^きしものにはあらず。大^{おほ}君^{きみ}の賜^{たまひ}よりして、日^{にち}用^{よう}の事^{こと}を辨^{せん}するなり。わが家^か國^{こく}の用^{よう}度^ども戰^{いくさ}出^いだすも、惡^あしき年^{とし}を救^{すく}ふ備^{そな}へも、飲^のみ食^くふものも、皆^{みな}その賜^{たまひ}物^{もの}のうちよりして、分^{わか}ち出^いだす事^{こと}にて、これ是我^{わが}が物^{もの}ならぬ事^{こと}なり。扱^{さつ}客^{きゃく}くして、わが物^{もの}と思^{おも}ふも、費^{つひや}して顧^{かへり}みぬも、皆^{みな}賜^{たまひ}物^{もの}なるを知らざるより起^{おこ}るとぞ。げに國^{こく}郡^{ぐん}多^{おほ}く賜^{たまひ}ひしも、少^{すく}きもあるを、その程^{ほど}知^しらで身^みを終^おふるは、力^{ちから}あるもの、學^{まね}びして、重^{おも}き物^{もの}揚^あげんとしても、われ力^{ちから}なければ、揚^あぐることを得^えざるは、誰^{たれ}も知^しれるを、

わが身のほどを知りを云ふとか人の云ひし、
 鷹の羽にすむ虫ありけり空高く飛びかける時は遙に人の住家など
 をも見くだしつ實に我れは事足れる身かな翼も動かさで千里の遠
 きに行き通ひ雲居のよそまでも揚るめり殊にさまざまの鳥は皆恐
 れて遁げ走る實にも我れに勝つものは大方あらじなど思ひつ、彼
 の鷹の毛のうちに居つゝ頻に肉をさし血を吸ひて居しがその族い
 と多くなりもて行きしにや終にその鷹も倒れにけりそれより自ら
 出でて飛びかけらんと思へども飛び得ず走らんと思へども疾なら
 ず血も盡き肉も枯れぬれば今は命つなくやうもなし辛うじてまづ
 其の毛の中を潜り出で、這ひ行けば雀の子の居たりけりわれを恐

たる人の少なきこそをかしけれと笑ひし。
 寒を嫌ふものは寒さに障らす暑さ忌むものは暑さにあたらす我れ
 こそ健にして遠里行くとも勞るゝ事なしと云ふものは多く足に病
 を生ずわれは目の明なるにや遙なるもの幽なるものと云へども遁
 す事なしと云ふものは必目に病を生ず今日は頭痛み昨日は胸のあ
 たり塞りぬと日毎に云ふものは大きな病得ること稀なり若き折
 より薬飲みし事なし病は聊も知らずといふ者は頓に大いなる病を
 得ると云へばやむごとなき人聞き給ひて實にもとて點頭き給ひし
 とか。

夫婦の別といふ道は、新枕の明の日起き出でたらん時の心を忘れぬ

これにあしく、毒あれば毒をもて打つことなんども知らず如何なる
 病出で來たらん時は、必悔い思ふべしと、人も云ひけるが、そのもの幸
 に病なく、齡もいと長かりければ、いと我が思ふより外に、醫師の道
 なしとて、その子孫等へも云ひ置きて、家の掟とぞしたりける。
 雨風の時たがへぬと云ふも、甘露下ると云ふも、必強ひ事とのみは云
 はじ。政寛きに過ぎぬれば、暑も寒さもゆるく、政流るれば、季候の
 移るも正しからずなど云ふ。天人一理なれば、然もあらんかし。また
 政に過あれば、大空の咎ありと云ふも、過知るものは責を見る。過知
 らざるものは、責をも知らず。何日も豊にて災なしとす。適災知りて
 も昔の例など云ひて、心にかかけぬ輩は、終に身にかゝる災となりぬる

れなんと見れば、雀の子は知らぬさまなり、いかにして見つけざるや
 と傍へ這ひ寄れば、うれしげに見て、嘴さし出だして、啄まんとす。例な
 き事なれば、恐しくて遁げ隠れぬと、かの友どちに語りにけり。
 醫師の道知り得しと、自ら云ふ人有りけり。附子人參は、人をして氣の
 上る病を生ず。大黃の類は、素より怖ろしきものにて、味も亦いと苦し。
 芩連はうちを冷すの毒あり。況して巴豆なんどはさらなり。石膏のた
 ぐひの石薬もと人を害するものなり。麻黄は人をして汗を洩さしむ。
 たゞ彼の君子の名よびたる茯苓、白朮、陳皮の類のみこそ、薬なりけり
 と云ひぬ。病ありても、かうやうの薬のみ用ひけるが、もとより輕かり
 しにや、遂に癒えにけり。彌斯かるものゝみ用ひて、ひと道によければ、

とかや語りし、漢儒なんどの大空の事など云ひて、人を責めし例あれば、なしとは如何云はん。されども、また大空のかへりみを受くるものは、よくその責めを得るとかや云ひて、父母の我が子を善く育てなさんと思へば、さまざま教へ導くまゝに、或はいきめきて罵りなどすれど、わが子ながらも、思ひすつる時は、むつかる聲をもなさず。されば父母の責なしと思へば、終に大いなる災を得るなり。禹水湯旱とか云ふ如く、聖は猶その責ありて改め給ふ事も速なるべし。殊に斯くても民草の憂少なきを以て、尊しとも云ふと、また云ひし。

伊勢物語は梅の如く、源氏物語は櫻の如く、狭衣は山吹の如し。徒然草は薬玉につくれる花の如しと人は云ひけり。

わが惡きをば榮紉を引きて、宥め人の善きをば堯舜を引きて出で、咎む。彼れはかゝる惡き事なしぬと云へば、實に然あらんと云ふ。此の者斯く善きことし侍りぬと云へば、如何あらん。不審と云ふ。實にも人は惡き心あるものかなと云へば、よき名得まほしと思ふが故に、人の惡きに、我が心を宥め、人の善きをば嫉むより出で来るなりとは云ひし。

唐土の君と臣との道は、わが國のとは違へれば、云ひ分くべき事にはあらねど、范蠡が功遂げて後船に乗りて去りしを、難き事のやうに云へど、代々の功遂げし人の終善からぬより見れば、善しとは云はめ。されど船泛べて去ることだにならば、難き事はあらじと云ふを、善きを

人もなし況して斯く晴れたる日は、頗る雨風のあるなど云ふ事は、露思ふものもあらじかし。この長閑なる御代の春の御恵にぞ、かく心ゆたかに樂び遊びて、歸路忘るゝ計りしても、何の煩ひ憂もなきに、此花も昔よりつきぬ御恵深き露に生ひ添ひしとやらんも聞けば、さ思ふ人もありや無しやと見れど、王世の民の心とや、かゝる照る日の恵をば思ひもよらず。何日もかく空晴るゝものと計りも思はぬ輩、多からんなど思ひ返して、四方をふと打ち見れば、筑波峯の邊いと細くひらめきたる雲こそありけれ。この雲よ、世に云ふ疾風など云ふものなりけり。餘りに朝より珍しく晴れたる日なればとて、豫て簀も笠も放たで居しが、はや臆押し立て漕ぎ歸るを、如何にこの花を見捨て歸るは、

ば善きになして見給へ。善きをも其の上のこと云ひて責むるはいと悪しき心ぞや。聖ならでは許す人はあらじと。今日はいと長閑なり。いでや隅田河原の花見んと、小船に乗りて行きたるが、花見んと立ち出づる諸人のさま、實に都の風流を盡せり。さまざまの心々に打群れて行くに、女房なども何か口たゝきつゝ、心空に歩くもあり。馬はせて花をも目につけず。いとばうぞくに行くもあり。やごとなき人にや、人々打ち圍みて、慎しげに行く女もあり。或は木影にて、早や瓢傾け、何やらん矢立出だし書い付け、紙縊して花の枝に付けて、我れは顔なる風情なるもあり。今日は實に晴に晴れて、一天に雲なく、富士も筑波も手にとる計りに見えたれど、又それを打ち眺むる

雁金につらさやならへる、その音計り學べよかしなど、口々に笑ふを、
耳にも入れて漕ぎ去りぬ。何時か其雲のいと擴がりてけるが、彼の輩
は露も知らず。日のかげらふも知らず。今日は暑き計りなりとて、肌脱
ぐもあり。又は衣など脱ぎて、馳せ歩くもありぬべし。雨に先だつ風の
ひと通り吹き落ちたれば、こは花よと思ふ者もなく、いさご吹き立て
たれば、唯驚きて居るうちに、雨の降り出でたり。初めは心地よき雨
などゝも云ひたらんが、後には人の聲に、雨の音もせず。馬を馳せて歸
るもあれば、驚き周章て、堤より轉び落つるもあり。女などはいといた
う見苦しきまで周章てふためきて、初めよそひしをも自ら夢と思
ふらん様なり。況して酒に酔ひて、雨に降られて、雨の音も聞きな

もあれば、思ひ寄らぬ思なる雨かなと怒り、喧呼るもありぬべし。かの
舟は早く漕ぎ行きぬれど、我が住む浦は遠ければ、とある橋の下に船
留めて居しが、橋の上など、人の走り騒ぐは、鳴神のやうに聞えぬ。はや
雨も數ふる計りに、川の面に見ゆる頃、夕月の殊更に新らしく磨き出
でたれば、早や雨の名残もなし。堤の花如何あらんと、漕ぎ返して見れ
ば、その比は早や人もなし。櫻の木の間、灰と月の見えたるは、我が爲
に作りなしけんと思ふ計りなり。濡れにし人は如何したりけん。此月
などは思ひも寄らであらむなど、ひとり思ふも、何となく心おごり行
きぬ。父母も、我れ獨人に超えて、心地よきと思ふ時は、と戒め給ひたれ
ば、又過やしぬべくと、恐しく覺えければ、飲み残したる酒携へて、終に

漕ぎ歸りしとか。

花月草紙終

三草集を讀む

佐佐木信綱

文藝學問の途は、個人の獨創に俟つもの多ければ、父すぐれたる文人にして、子凡なるあり。名もなき人の子に、大いなる學者の出づるもあり。されどまた一方には、父子繼承して、卓出せる例もあり。わが徳川時代の國文學の上にこれを見るも、宣長の春庭に於ける、成章の御杖に於ける、また枝直の千蔭に於ける、などあり。而して田安宗武の白河樂翁に於けるも、又之に屬す。

宗武樂翁の父子は、徳川諸侯中、最も文藝學問の道にいたりふかかりし人なり。

宗武は、在滿眞淵を聘し、有職の學にくはしく、萬葉を好み、また自ら萬葉風の歌を詠じ、家集天降言あもりことの一卷は、近世和歌史を飾りて、眞淵家集と光を爭へり。

しかも宗武の名は、久しく知られず。その歌人としての聲名の如き、明治和歌新興のはじめに際し、吾人の徒が推奨せしによりて、世に知られしなるが、その子の樂翁に至りては、然らず。蓋し、樂翁の政治家としての才幹のすぐれし爲、その文名また當時世すでに喧傳せられて、(かの黄昏の少將と呼ばれし如き)、その集古十種は廣く世を益し、花月草紙またしきりに愛讀せられき。

樂翁の歌は、宗武の歌とは趣を異にし、新古今風の美しき歌風にして、春海千蔭等當時の江戸派歌人の作風と同じ。彼つねに六家集を愛讀して、それを類題にし、獨看和歌集を刊行せり。またその作を、春海の高弟濱臣に評せしめし事あり。以てその好むところを見るべし。彼の歌は、父宗武の異彩ある歌風に比すれば、劣れりといへども、新古今を學びて、溫雅渾成の境に入れるところ、また決して

尋常侯伯の作にあらず。その文章に至つては、和歌以上なり。

樂翁には、家集三草集あり。自筆の原本を上梓せしものにて、小形の三冊本なり。吾人かつて、續歌學全書第七編近世名家々集上編に收めしが、こたび花月草紙と共に、一卷となして、婦人文庫第一編に收めむとすと聞く。文人としても推奨すべきこの名宰相の歌文が、世の婦女子諸君を慰め益すること少なからざるべきは、おのが期してまた望むところなり。編輯者の請ひによりて、一言書き記しつ。

三 草 集

松 平 定 信

歌の學びの心ばかりなれども、おのがまに／＼詠み出づれば、麻をはなれし蓬の生ひ繁れるが如く、いといたううるさくて昔詠みしは皆うち拂ひてけり。享和の始より生ひ出でたるが中をいさゝか残して朝夕露のよすがとなすものなり。

うきものも程經てのちはなつかしき

おもかげ見する霜のよもぎふ

見らむ人もありやせむ

文化四年の冬の火桶により添ひてかけり

よ も ぞ

春

元日初^{ぐわんじつ}めて定^{さだ}永^{なが}伴^{ともなひ}てまう上^{のほ}りて詠^よめる

ゆたかなる袂^{たもと}にふくも大^{おほ}君^{きみ}の恵^{めぐ}みのうち^の春^{はる}の初^{はつ}風^{かぜ}

老^{おい}鶴^{つる}も雛^{ひな}うちつれて今^{こと}年^{とし}より共^{とも}に千^ち歳^{さい}を君^{きみ}にさゝげむ

五十^{ごじゅう}になりぬる年^{とし}の試^し筆^{ひつ}に

梓^{あづさ}弓^{ゆみ}いそちの春^{はる}を迎^{むか}ふれどやたけ心^{こころ}は撓^{なみ}まざりけり

御^{おん}着^き背^せ長^{なが}のおんことほぎにまう登^{のぼ}りて詠^よめりける

天^{あめ}が下^{した}靡^{なび}くつるぎの光^{ひかり}にも曇^{くも}らぬ御^み代^よの春^{はる}は見えけり

霞をよめる

白雪ののこるやいづこ三吉野の山は霞のいくへ隔てゝ

鶯をよめる

朝な夕な軒端に來鳴く鶯を籠にかふ人に聞かせてしがな

閨に梅のかをりければ

曉の寐覺の梅の香をふかみしらで見し夜の夢もくやしき

柳をよめる

青柳の糸のみだれを春風の豊かなる世に忘れずもがな

白露を花になしてもかをりなきうらみやかけむ青柳の糸

春雨のふるとも見えぬ遠方にひとむら響く青柳のかけ

雨をよめる

我も亦此春雨のふるとしも人に知られて世にやすまゝし

月を

ことわりの春とばかりはかこたじな老も加はる朧夜の月

年々に霞も深くなりにつけり見しや幾夜の春の夜の月

雲ならばかこたむものを吹く風も共にかすめる朧夜の月

曙を

鳥さへ色どり添ひてほの／＼と横雲かすむあけぼの、山

雲雀を

何事ものばれば下る悔の道しらぬ雲雀や雲に入らむ

櫻を

待ち侘ぶる此日永さを山櫻咲きての後の春にしてまし

待ちくしうさはものは櫻花咲きにし日より山風ぞ吹く

櫻花たえてしなくばのどけさの春の心を何に見てまし

まぢ惜む心をすてゝ見つれども花こそ春のほだしなりけれ

いと日永ければ

春のことゝいひにがしたる怠も忘れて長き日をくらしつゝ

蛙を

言の葉の種とし聞けば蛙にもいきとしいける身をば隔てし

彌生のつこもり蛭にかあらん

櫻花けふはすぐとも散りのこれ五十の春に又あはめやも

夏

遅櫻を

散らば散れ残るとしてしも遅櫻いつまでひとり春にあふべき

新樹をよめる

その山といはむばかりに夏木立すゝめがほにも繁る庭かな

早苗を

なほざりに思ふな人の玉の緒も二葉にこもる小田の早苗を

菖蒲をよめる

たが枕たが袂にかかゝらまし思へばねたきあやめ草かな
 年の内にけふを盛りのあやめ草かれても軒に香をばといめよ

五月六日によめる

中々に残るにほひのなくもがなとても六日の菖蒲なりせば

水鶏を

叩くをもそれかと見しは昔にて待つ夜なき身に水鶏をぞきく

夏野の草を

拂ひてもしげる砌にくらべては末葉みじかき野邊の夏草

或人の許より撫子を我庭に植ゑて直ちに奉るといひこしぬこ

は歌よめとの事ならむと戯れに

言の葉にかゝれとしてしも撫子を君が園には植ゑずやありけむ

夕立をよめる

一方に心なとめそ何事も只時の間ぞ夕立の空

山雲夏忽繁といふことを

時のまに風吹き絶えて暑さをもこゝにたゝめる山の端の雲

蚊遣を

焚きすてゝ残る煙の中ばかり安くいぬらむ賤が蚊遣火

雨の蚊遣

蚊遣火の煙は軒を傳ひつゝ立ちものぼらぬ雨のゆふぐれ

螢を

草叢くさむらの底そこに螢ほたるのかげ見えて露つゆは葉はのぼるゆふぐれの庭にわ

氷室ひむろといふことを

夏なつかけて残のこる氷室ひむろにたらちねのまさばますべき世よを恨うらみつゝ

こは足乳根あしちねの君きみの暑あつさに障さまたり給たまひて遂つひに御病おんやまひのすゝみ給たまひしを思おもひたへねばなむ

長松ちやうしょうのもとと涼すずしかりければ

松高まつたかみ親おやのいさめの假寝うたたねも忘わするばかりの風かぜのすゝしさ

曉あかつきの頃ころよめる

短夜みじかよは老おいの寢覺ねぎようもおこたりて此このごろうとき有明ありあけの月つき

櫻山さくらやまの亭ていにて日の暮くるゝ頃ころ

鯛だいの聲こゑのうちより暮くれをめて雲うみしづかなりたをがれの山やま

秋

初秋はつあきの心こころを

浪花江ななはの蘆あしのひと夜よにふきかへてこや珍めづらしき浪なみの秋風あきかぜ

七夕たなはたによめる

星ほしまつる琴ことのしらべもすみゆきて秋風あきかぜ高たかし天あまの川浪かはなみ

我われも亦また願ねがひの糸いとの一筋ひとすぢは星ほしにたむけて空そらにまかせむ

こは致仕ちしの事心ことこころにねぎ思おもふころにかありけむ

萩はぎをよめる

うとまるゝ老のならひを見てもしれ若葉の萩は風も音せず
 いつかはと思ひし萩の秋の聲をこの頃おいの寢覺にぞきく

萩をよめる

朽ちもせで今年の秋も咲きにけり古枝の萩の本の心は

たが袖もわくれば萩のすり衣ゆかりおほかる野邊の色かな

朝顔を

緑なる空に通へる朝顔の花はゆふ日の色にしぼめり

朝顔の花は瑠璃の色こそをかしけれと苗選びて植ゑしが咲き

ぬれば戯れに

生ひ出でし二葉の根ざし葉のゆかりたがはぬ朝顔の花

庭の草を

一つ色の緑とばかり刈り捨てば悔しかるべき秋の八千草

虫を

露ふかみ野原の草も虫の音もかるゝ迄とや鳴き明すらむ

風寒みなびく尾花の浪こえて秋さへ末の松虫ぞなく

遠近の鹿といふことを

手枕に近くきゝしも山風のたゆめば遠き小男鹿のこゑ

兩方のといふを

妹と背の山によびかふ鹿の音はなかなる河に戀やせくらむ

秋の夕を

出づるやと月まつ外は秋とても思ふことなき宿の夕暮
稻妻

つく／＼と思へばかなし稻妻の消えて跡なき雲の行方
宵闇に思ひも寄らぬ遠山のすがたかつ見る稻妻のかけ

田の面を見て

何事もやしなひて見よ秋の田の稻葉ももとは植ゑし早苗を

山路の雨を

吹く風に木の葉の露も一しきり雨に降りそふ秋の山路
月をよめる

思ふこと思はじとすればなとてかく隠し影なれや秋の夜の月

誰か又なき世の後に思ひいでゝ我が見し月の影したふらむ

八月望の月を

みちぬるを思ふが故に其山と契るを知るや望月の影

さまざま見るに従ひ又は繪などによて

月はたゞ行くとも見えす中空に獨すみぬる影ぞ長閑けき

月影のうつるも遠くひく汐にひかた曇れる秋の海原

柴人のものいふ聲も夕間暮月にまちかき峯のかけはし

山すみも月見る時は浮雲のうきやうき世に又かへるらむ

隔てなき月は九重八重葎ひとへに君が光とぞ見る

田安の箱崎の御園にて月の出でけるを見て

月も今玉の臺に照りそひて世に似ぬ秋の光をぞ見る

李白が静夜思の心をといてばよめる

仰ぎ見る高根の月に故郷の草葉の霜のいろをしぞ思ふ

霧をよめる

麓よりやゝくれそめて山川の一筋白き秋の夕霧

葛を

汝ばかり枯れゆく物か秋風にうらみなかけそ軒の葛の葉

菊の花見に行きて

斧の柄の朽つるもしらぬ圓居かな菊は山路の種しるくして

朝な夕な二木の柞行く秋も散らでをあれと思ふ年

此歌を今見出してこゝに書いて留むるも懷舊に堪へず秋の色

を二木に見てし昨日さへ今日はかへらぬ昔なりけり又心の

中に祝し奉りて唐崎の松を例にいやちぎれ一木の柞千代は

ふるとも

東海寺の紅葉見に行きてよめる中に萬年石を

萬代の名こそ動かぬこの庭の石ものいはぬかげしづかにて

潮音閣を見て

心すめばうしほの音もたか殿にまぎるゝ松の風もまぎれず

やゝ夜寒なる頃

秋もやゝ夜寒になればおのづから我身したしき一人寝の床

暮秋に

霜とくる庭の日影の下草に晝鳴く虫の聲ぞ聞ゆる

九月盡に

白川の關は心にまかせても過ぎ行く秋ぞといめかねぬる

冬

時雨をよめる

桐の葉の朽ちしが上の小夜時雨音なきもまた寂しかりけり

小夜風にしばし遅れて散る音は空にたいよふ木葉なるらむ
心からく散るかと思れば吹く風に又立ち騒ぐ庭のもみぢ葉

木枯

吹きしをる木々に思へば雪と散る尾花にかろき木枯の風

こと木には吹くとも見えぬ山風の松をたづねて聲やたつらむ

霜

行末のかたき氷のさむさまで契りや結ぶ庭の初霜

谷川の氷を

うちいでむ春を思へば谷川のこほりや花の蕾なるらむ

千鳥の浦つたふ書に

一かたに心さだめよ小夜千鳥いづこの浦か波風はなき

夜半の霰をきゝて

こての上^{うへ}にふりし夜^よ知らで厚衾^{あつふすま}かさねて夜半の霰^{あられ}をぞきく

雪をよめる

いたづらに降り^ふにける哉白雪^{かなしろゆき}のつもれど解^とけぬ迷^{まよ}ひばかりに

うちいでむ言葉^{ことば}も今は埋^{うづ}もれて我身^{わがみ}もともにふれる雪^{ゆき}かな

書^みによてよめる

しきみつむ道^{みち}さへたえて古寺^{ふるでら}のあか井^{あかみ}の水^{みづ}も雪^{ゆき}にわかれず

衾^{ふすま}を

埋火^{うづみび}を

埋火^{うづみび}のあたり長閑^{のどか}にはらからの圓居^{まどめ}せし夜^よぞ戀^{こひ}しかりける

炭竈^{すみかま}

雪^{ゆき}はみなかへり盡^{つく}して一筋^{ひとすぢ}のけぶりまがはぬ峯^{みね}の炭竈^{すみかま}

年の暮雪^{としくれゆき}の降りけるを

立ちかへる春^{はる}の光^{ひかり}をたのむかな雪^{ゆき}も我身^{わがみ}もふりまされども

除夜^{じよや}によめる

こむ春^{はる}を思^{おも}へば長^{なが}き心^{こころ}かな年^{とし}くれたけの一夜^{ひとよ}ながらも

雜

風をよめる
 浮雲の消えてあとなき行方をばうはの空なる風やしるらむ
 雲を
 色もなく香もなき風を心にてすがた定めぬ空のうき雲

曉によめるが中

鳥羽玉の闇の寢覺の現にも夢にも御代のひかりをぞ思ふ
 つくくと我夜ふけぬる鐘の音を寢覺の床に數へてぞきく
 數ふればうせにし人も年々に添ひゆく老の寢覺わびしも
 夢絶えし心の空に神と人の隔てぬ月の影ぞ見えける
 誰か今同じ心に覺してこの有明の月を見るらむ

曉の鐘を聞きて

ちぎりあれば今年のけふの曉の寢覺の鐘の音をきくかな

夕の鐘を

けふの日も暮れぬと告ぐる鐘の音に驚かでこの年を経し哉

夕陽の海に映じたるを

波のあやも見えぬばかりの夕風に入日のこさぬ沖の島々

畫によてよめる

不二の根にたちものぼらぬ白雲は麓の山のさくらなりけり

忍山を見て

昔をも何か忍ばむしのぶ山さかゆく御代にあへる身なれば

淺香山にて

淺しとは誰かいひけむ今もなほ埋もれぬ名の山の井の水
心こそ淺香の沼の水なれやかつ見るものに影うつりゆく

白川の關の跡を見て

白川の關路のあとを尋ねれば今も昔の秋風ぞ吹く

關の湖といふを作りたるが其小亭を共樂と名づけ其うしろの

山を鏡の山と名づけぬ

湖のこゝも鏡の山なれや心うつさぬ人しなれば

共樂亭

山と水の清きひきくもへだてなく共に樂しき園居すらしも

忍の里の醫王寺にゆきて繼信忠信の跡を見てよめる

こととひと答ふるものは涙にて空しき昔に山風ぞ吹く

なき魂よ物いひかはすものならばおなじ心の道かたらなむ

一橋の巢鴨なる御別園の鶏聲が井といふを

筒井筒一つの曉波みそめてとりの八聲の名には立ちけん

白坂のあたりの松の並立ちたるを見て

植ゑおきし千代の松原ゆき返り君がさかえをいざ契りてむ

山里の景色を

見るが内に軒端の山もかつ消えてたいよふ霧ぞ雨に成りゆく

田家の心を

夢を

荒田うち早苗とりにし露はさで小田の庵に袖ぬらすらむ
むす栗のいひがひなしや五十年もたゝ手枕の夢の間にして
さまぐ心に浮ぶまにぐよみたる

幼きと思ひし人はとしたけぬ我身のおいよいかに見えなむ
悲しきと思ふことにも堪へにしを嬉しきにおつる老の涙よ
子を思ふ心の道の心もておやにつかへよ世のなかの人
色と香に迷ふ心のころもて君につかへよ世のなかの人
よしといふも我よきならで人並にたいよふ蘆の世の中の人
越後の雪入朝旦初めに物かたりしたるか余のはとすあまう七

の八つになむなり給ふ天稟明敏驚くに堪へたり

昔には及ばぬものと思ふ世にまた立ちまさる今もこそあれ

定永初めてまうのぼりしに班列ことに仰せを蒙りしかば
臥して思ひおきてぞ仰ぐ吳竹のこのよにかゝるつゆの恵みを

同じ年從四位下に叙せらる

嬉しさもあまりの事に涙さへ共につゝめるけふのころも手

我家はもと五位になりて年經て四位に叙するを

椎柴のみちよりのぼる位山麓の松のかげははなれて

一橋宰相君の簾中かくれ給ひて物の音をとめらる

こすのうちの花の薫も消えはてゝ鳥も聲せぬこの頃の空

田安の姫君かくれ給ひしを
あはれなり世に似ぬ庭の撫子も露と風とのうさはのがれず

水戸黄門君重き病にかへり給ひていとすゝませ給ひし頃かの
御館へまうで、御氣色伺ふべしとてしばし居たる時入相の鐘

の響きければ

常にきく物ともなしにつくぐと哀かすそふ鐘の音かな

龜山のぬしの世子生れて程なくみまかり給ふ翁がうまごなり
嬉しさの涙かわかぬ袖の上にぬれそふ波のあはれ世の中

田安故黄門の君の御法會ありける折詠みしが中

此君復古の樂に御心こめ給へりしかは

降りし世の雪をめぐらす袖だにもせめて背に返してしがな

かくばかり恵みにうるふ此身ぞと何にたぐへて君につげなむ

朝恩の深き身なるを

世にまさば嬉しきふしを吳竹のこの身ながらも添ふべき物を

定永任叙のこと告げんと御寺にまうでて寛にひかりまします

御墓に詣でて

嬉しさにまた悲しさも猶そひぬ何よりさきに君につげまし

俊成卿の六百年忌にかの肖像をかけて卿の述懐百首なるもの

とり出してそれにて百首詠みてけり手向にといち早く詠みた

ればこゝに記すもいと少し

散る露に袖ぬらしけり枝折する櫓のはしばの跡をたづねて

月 ながさむと誰かいひけむ眺むれば月こそ物は悲しかり

けれ

ながむれば月こそ物はとばかりの思ひを今も慕ふ夜すがら

虫 さりとともと思ふ心も虫の音も弱り果てたる秋の暮かな

さりとともと思ふ心を音にたてゝ言葉の露に虫を鳴くなる

雪 杣山や梢におもる雪をれて絶えぬ歎きの身をくだくか

な

及びなき身にはなげきをこりつみて降りにし雪の跡をとふ哉

鶴 年だにも若の浦和の田鶴ならば雲井を見つゝ慰めてま

梅 数ならぬ袖にはしばし梅の花此世にとまるつまともぞ

なる

数ならぬ袖にもしばし移しつゝ此世の梅の香をやしたはむ

柳 春雨に玉ぬく柳風吹けばひと方ならで露ぞこぼるゝ

青柳の玉ぬく露のことの葉を一方ならず慕ふけふかな

鹿 世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞなくな

る

鹿の音を知るべにやせむ思ひ入るやまと言葉の道の奥にも

露 衆する奈良のはしばに散る露のはらくゝとこそねはな

かれけれ

若の浦に年のみ経りて及びなき雲井を見つゝ田鶴ぞなくなる

山 我身をばわが心さへふり捨てゝ山のあなたに宿もとむ

なり

恐なる心をいつかふりすてゝ山のあなたの道もとめてむ

侍女貞順みまかりての七年にかありけむ 本室の外の子は皆此生みしなり

七年に廻ぐれる雲は果敢なしや夕の雨の露と消えしも

仙鼠が身まかりての年回に庭の草花を手折りて其子にやる

(重臣元門致仕してかくいふ予に茶の事を傳へしなり)

手向けよとおくる情も七年のその世かはらぬ露のいる草

明和の御臺所の御法會あり

(昔いとけなき時御膝下に近づき奉りし事など思ひいでゝ)

雲の上の月のみ影を仰ぎてしその夜は夢の心地する哉

前の妻の二十三回に

散りすぎしこの葉を慕ふ袂には今もちしほの露を残れる

此人終焉に我常に勇に過ぐるなど諫めおき給へりしを

年へてもいかで忘れむ汲み見てし野中の水の深き心は

田安故黄門の君の千鳥さへ友呼びかはし遊ぶなりなどてや人

の獨たのしむと詠み給ひし御歌を松山の少將の君と互にかき

かはしたる時詠める

過ぎし世を慕ふ千鳥の音にぞ鳴く浦回の松の枝をつらねて

紀伊亞相の君の御宴室に濱邊の千鳥を壁にゑがきたるわた殿

あり公主のいませし時通ひなれしを再びまた通ふとて

年を経て又たちかへる浦千鳥すぎし浪路を慕ひてぞ鳴く

田安の御燕居の新室に松など軒近く植ゑなし給へるを

十かへりの松の花さへさき草やみつ葉よつ葉の軒に並びて

立教館に行きて書生を考試して各その玉成を庶幾すとて

行末は國の光とみちのくや言葉の露も玉をなしつゝ

小松原あさ夕露にやしなふも國をぞ思ふ君のためとて

車の巻々をつくりし時稻村何某にとひものしなどしたり

小車のせばきものみの我身には人の言葉をたゞかりもすれ

尺蠖の屈はなどいふことをよめといへば

晴れゆきて一際まさる影を見れば曇るや月の光ならまし

廣橋亞相より知命の賀とて歌を送りこし給へれば其使またせ

てよめる下向の折なり

鳥の跡をしるべになして年波のよする磯棠を摘みやそへまし

知命の時越え給へと愚なる身の只に齡重ねしのみにてなとか

いて

まちをしむ心ばかりに年もへぬ咲き散る花の道くらくして

我有司事とふ文書は箱に入れて出す常の事なりある日其箱出

したれば封切りて見るに空函なれば戯れに其箱のうちへ書き
て入れけり

浦島が昔おぼゆる玉手箱あけて空しき水の江の月

頼民何がし十布の菅菰を奉る此者聊公役にあづかれば

菅菰の十布のみふをばわれにして七ふは御代の恵みとを知れ

鏡のうらに鑄させぬる二首

我ならぬ身をも知るかな足乳根の面影それと向ふ心に

されば去り向へば向ふ面影の残る鏡のうちや何なり

五倫の心を詠めるが中夫婦の道を

つゝまじき新平枕の心をば妹背の道の来も思ふな

佛の教を只管にさかしらするをきゝて

いやしむもまた尊ぶもその道を知り得て後に思ひ定めよ

白川のかしまの明神に奉りける

來方もまた行先も頼みあれや神と君とにまかせてし身は

天満宮の御畧傳を作りて

天みつる神の恵を今こゝにうつして遠き世にも傳へむ

石山縁起のかけたる巻の繪を補ふとて

鵜の海の深きえにしの跡とへどかひもなぎさの波のうたかた

芝山黄門の六十の賀に

けふといへど松吹く風も千代の聲耳順へるはじめとやきく

根岸何某の七十の賀にかありけむ 此人鄙官より登席せられ

し

千代よばふ聲ぞ木高きやよの松昔は野邊の二葉なりしを

九鬼松翁七十の賀に

松が枝は老木ながらも若縁さすがに千代のためしとぞ見る

尙齒會をなしたる時とき家臣等の七十以上をよび集めたるが二百二十人

仙人の流れ汲まばやいく千代のよはひの淵をみなかみにして

定和朝臣に参らす

文政十年十一月十五日

樂翁自書

こは文化の始めの頃より致仕までの聊かこゝにかいとめお
きぬ

一方に厭ひなはてそ八重葎これも縁の春雨の空

これも恵みの深さなりけりと秋のながめの静かなる窓に向ひ

てなん

む
ぐ
ら

春

花の上はなの上に厭いとはむものと思おもふにも心こころうき立たつ春はるの初風はつかぜ

子日かひにかひよめる
子日かひする末野すえのにうすき朝霞あさがすみ春はるも二葉ふたはの松まつの色いろかな

花はなも霞かすみを
花はなもいまだ遠とほき尾上おのへの朝霞あさがすみまづたちそめて春はるや見みすらむ

住吉奉納すみきほうなの中うち

住吉の松も聲せぬあさなぎに霞いろこき沖津しら浪

若菜を

七草のいつも二葉の心かなかへらぬ年はつみそふれども

雪の降れるに鶯の鳴きしかば
鶯の囀る聲に去年の空あらたまれども雪は降りつゝ

残れる雪を

有明の残るばかりの峯の雪これもつれなき色やみすらむ

柳を

春雨の降るとも見えぬ遠方にひとむらくもる青柳のかけ

人ならばいとほむ老の手枕にむかしかはらで通ふ梅が香

月を

春ながら雪解の雲のおぼろ月霞むと見ても寒き影かな

曙

老らくの深き霞のあはれまで思ひ籠めたる春のあけぼの

曙

横雲にひきわかれゆく雁金はたがきぬくの心をかしる

若草

なほざりに摘むな里の子秋に咲く花の二葉の春のわか草

花をよめる

ず

ながら苦味ば
棒、それも超
真弓、27歳。
えるのはあま
査一課のバリ
なぜか仲睦

と、そそっか
得て、赤川次
モア推理。

夏

世の中の人々の心の花もいまさかりなりける山櫻かな
つくくと花に向へば世々の人のめでこし春の名残さへそふ
飛鳥の羽風もいとふ花の枝にあまりつれなく吹く嵐かな
山吹を
實はなきになしても匂ふ山吹はつかふる道の花とこそ見れ
池の藤を
池の面は櫻山吹ちりしきてたえまにうつる岸の藤浪

世の人々の心の花のうつろふを今朝しも袖のいろに見せつゝ

早苗を

雨まちし早苗は早もふしだちぬ植ゑにし方の生ひたゝぬまに
靡くさへ末は短かき若苗は水の緑に風やふくらむ

五月雨を詠める

玉水に軒のしのぶも亂れあひて限り知られぬ五月雨の空
鐘の音は此頃たえて鵲も明方たどる五月雨の空
世にふるも程こそあれと獨きく老の枕の五月雨の空

橘の夜半にかをりくるを

さめにける夢の行方もかをるまで夜深き窓の風のたち花

螢を

茂りあふ木の下くらき草むらは暮れぬさきより螢とぶなり

夕立 住吉奉納にかありけむ

雲きはふ武庫の山風ふきおちて里もすいしき夕立の空

蚊遣を

蚊遣火の煙を見ても民の戸のにぎはひしるき夕暮の空

夏祓

こむ年も今年のけふはなきものをいかに厭ひて御祓しつらむ

秋

秋たつ日よめる

一葉ちるかげに思へば木枯のゆく末侘びし秋の初風

萩をよめる

きゝそめし秋を思へばそのかみの寢覺こひしき萩の上風

一しきり吹きしく折は静まりてたゆむあとより萩のうは風

住吉奉納にかありけむ

秋の風松よりおちて濱をぎの下葉についく波の音かな

萩を 萩咲く頃雨しげければなむ

秋ごとに萩さく時は雨しげし露の外なる色やいかなる

朝顔

ならず

背ながら苦味ば
泥棒、それも超
野真弓、27歳。
考えるのはあま
捜査一課のバリ
ビ、なぜか仲睦

主と、そそっか
を得て、赤川次
ユーモア推理。

うき秋のゆふべをしらぬ朝顔は物おもひなき花といはまし

露

袖の上にかゝらむ物と思ひきやよもぎが末のつゆの秋風

鹿をよめる

吹きおろす嵐に虫もなきやみて尾上の鹿の聲ぞまぢかき

夜やふけし月や出でけむ小男鹿の遠き高嶺の聲のまぢかき

夕ぐれ

ともすれば思ふ事なき我身をも忘れてかこつ秋の夕暮

とはいやな誰をかまつ秋風に琴の音そふる夕暮のやど

蝦夷の景色書いたる畫に

ところ／＼こさふく聲に海くれて月をたづぬる浪のうき霧

月をよめる

眉根かき見そめし秋の夕より月の顔のみ身にはそひつゝ

すぎし夜もまた行末も秋の月一つむしろに立たん夜半かな

すめる夜は天の川瀬の浪の音も月に聞ゆる心地こそすれ

春にのみ霞むとは見し秋の夜の月さへ老はおぼろなりけり

はれ渡る月の桂のかげすみて雲のあととふ木枯の風

あこがるゝ心のはてや一むらの月にはなれぬ空のうき雲

山めぐる河瀬の末もはる／＼と月にかくれぬ水のうきり

武藏野は露をひかりの海原や月も尾花のなみにただよふ
 面影も向へばそれとうかびきぬ代々のかたみの秋の夜の月
 一むらの足とき雲におとらじと行きちがふ月の山風の空
 住吉の松の嵐にくもはれて細江にあまる月の影かな

住吉奉納のうち

八月十五日

名にしおふ今宵は蝦夷が千島にもこき吹きやめて月や見るらむ
 なれにしを思へば久し百年の秋のなかばのもちづきのかげ

五十の秋にかありけむ

あかざりし其後の夜の望月は影も加はる心地こそすれ

擣衣といふことを

落穂拾ふ晝のうさまで賤の女が一人かぞへて衣うつらむ

秋の末つ方によめりける

蚊の聲もたえし軒端にさゝがにの蛛の巢よわき秋の夕風
 あはれなり友なき蝶のこゝかしこ枯生に残る花を尋ねて
 見るがうちに入日の影も消えはてゝ夕月細き秋の山の端
 村時雨鹿鳴く山もかくやふるたゞにたへぬ秋の夕に

冬

冬の始によめる
 嵐ふくけさに思へば一葉散りし秋こそ冬のはじめなりけれ
 時雨を

世にふるも音せぬ春に比ふればけさ浮雲のしぐれなりけり
 落葉を

散りしくも又たちまふも山風やさしてこのはの心とは見ず
 山風を水上にしてみちもせの落葉の川は越えぞわづらふ
 枯野をよめる

百草はかれふす野邊にさりとともと霜の尾花の何まねくらむ
 冬枯の野中の清水へすちは霜にまよはぬ行方ぞをみる

水をよめる

池の面は氷らぬ方もなかりけり鳩の浮巢やいづこなるらむ
 月を

春秋のあはれもことにたちこめて夕霧ふかし霜の上の月

水鳥を
 朝づく日影さすかたに水鳥のねぶりのどけき池の中鳥

網代の晝に
 篝火のかげもしらみて宇治川や月もりあかす瀬々の網代木

霞をよめる

風をあらみむらたつ雲の絶間より日影ながらに霞ふるなり

ともしびの消えて目さむる手枕に霜夜の犬の聲ぞきこゆる

富士の根を

富士のねは雪と霞をすがたにてたい大空のものとこそ見れ
夕づく日山のあなたに影おちて白きはいづこ雪の不二のね

關といふ事を

よき事もすぐれば同じ足柄のせきの中道こゝろといめよ
古への關のいづこも秋の風夜半の月のみもりあかしつゝ

武藏野の畫

不二は雪箱根は時雨ゆく雲のはては夕日の武藏野の原
行路の市を

心とめぬゆきゝの市もくる人のことよき方に先づぞれちよる

橋を

かけてしも又中たゆる山川の橋や浮世のわたりなるらむ

角田川の月を

こととはむ鳥のねぶりも静にて月にこたふる秋の川浪

窓の竹を

君が代の千年のかげを祈るかな竹のおきふし窓のあけくれ

曉の鳥を

きぬくのうらみにそひし鳥が音を寢覺の夢の別にぞきく
おきいづる鳥の八聲によしあしの道分かれ行く曉のそら

蜘蛛をよめる

かけそむるその一筋は誰か知る風を心のさゝがにの糸

やがて歸るといふ人の別によめる

夜も寒し衣かさねよかたそぎのゆきあひ近き旅のみちにも

旅といふ事を

旅とても我大君の海山をめぐるの外にみちあらめやも

柴野大人旅立つと聞き内官なれば久しくあはざりしに

幾年か相見ぬものをあながちに旅としきけばなほ思ふかな

石山の古縁起うつしに侍臣などやりたるが冬に成りても歸ら

歌のうち

石山や海吹く風はさえぬらむ今宵重ぬるふすまもやある

日數経ば比叡の嵐に比良の雪しほなき海はこほりもやせむ

旅の道すがらよめる中

汲む人はたえてしもなほ山の井の浅きながらも水は濁さず

名にし負ふあだちの眞弓年へてもひく心なき老のおろかさ

山家の心を

なれぬるや松の嵐の吹かぬ夜はさすが友まつ山のしたいほ

苔清水たえなばたえね一かたにむすびとむべき山の庵かは

名にしおふ都は花も散りぬらむ梅が香にはふ春の山里

夏の日も軒端の山の霧深み朝よりたえぬひぐらしの聲
目さめなば軒端の山の月を見む夢をば鹿のこゑにまかせて
田家の心をよめる
たのみさへ我物ならぬ賤やもるもらぬ賤のみ秋やたのしむ
園中に深山の景色つくりて戯れに
殊更につくりなしたる深山こそすてぬ心のおくも見ゆらめ
松山少將君茶釜を鑄させ給ふが銘をかくくの心もてといひ
給へば恩波亦及于此としるして
松風も浪のひときも君が代の恵にもるゝこゑやなからむ
しのぶなりといふ物なるをよみてしるす

ら苦味ば
それも超
27歳。
のはあま
果のバリ
ぜか仲睦
そそっか
赤川次
ア推理。

陸奥のしのぶの里の賤の男がもちりするなる絹ぞ此きぬ
用捨箱のやうなるものつくりて消息などいるゝは雁がねを畫
がき反古は落葉をかゝせて歌をかいつけたり
月花の外にはなれもかきたてゝ通はぬ雲の雁の玉章
おのづから程よき程に拂ひけり風にまかする庭のおち葉は
辛崎の夜雨の繪に
静けしな松の葉くらき夜の雨に波も音せぬ志賀の唐崎
老いたる人の歌かいたるを
老の波よるとはいへど和歌の浦の鶴の歩みの跡ぞふりせぬ
思ふ事をのぶるが中に

何といひ何とかたらむ昔今の君がめぐみの露かゝる身は
 世の人に劣らじと思ふ一筋は老もへだてぬものゝふの道
 言の葉のはかなき道に休らひてうき名を風に傳へずもがな
 山に世をのがるゝよりも久方の空に我身をすてつべらなり
 朝に道をきゝて夕に死すともなどいふ心をよめとあれば
 咲く花よあしたの雲にまがひなば夕は雨とふるも厭はじ
 古き世を思ふといふ事を
 思ふぞよ新羅百濟の國までも我日の本の波かけし世を

住吉奉納の中

住吉奉納の中

見し夢は見しにまかせて跡とはぬ老のねざめぞ心しづけき

佛の道といふ事を 是も其奉納の中にかありけむ

我國のひろき教のうちなれば佛の法もあるにまかせつ

ある人の母の賀に

寒さをも知らぬ恵みの毛衣は千代もわするな宿の老鶴

致仕の事願ひものしたるに類なき仰を蒙りて御ゆるしなかり

しかしこまりを

契りおきし月と花とに違ふとも違はじものを君が意に

月花も君がめぐみの光よりまだ世に知らぬ色香をぞ見る

其仰の後執政の方へゆくとして

思ひきや霜の板ばし踏みならし月と花とをよそに見むとは

其後みづから花月を別號とせり

文政十年十一月二十あまり五日みづから書いて定和朝臣に参らせたり

樂

翁

致仕のころより文政七年のころまでのを些かしるしぬ柴の戸は人こそ訪はね浅茅生の末葉の露も月はいとはすしのみありける世かなと獨語ちて書い留めぬ。

同じ年の長月の夜

あさち

春

試筆によめる

千世呼ばふ聲は隔てぬ草の戸や軒端の松の春の初風

春くれどおなじ松の戸竹柱世のうきふしはよそになしつゝ

朝霞立ち出でゝ見れば誰が門も松と竹との春の初風

世のふりも人の心も松竹のみさをにならせ春のはつかせ

竹芝の浦の見るめののどけさを千代もと祈るわが君がため

此歌はくづれずの岸よりうちながめてなむ

玉櫛笥二見が浦にいつる日は神代の春の光とぞ見る

こは舊領に復したる春の試筆にかありけむ

御神忌の春

百年をふたら山の朝づく日げにも曇らぬ御代の春かな

六十の春

春きぬと思ふ心のどけさも耳に従ふ軒の松風

睦月三日の遊びせし時

長閑なる軒の松風吹きそへて春に和らぐ糸竹の聲

子日

風かよふ琴の子日の小松原春の調をひきやとめまし

霞

世の人の心の空にたちそめて四方にかすめる春の色かな
朝日影にほふあたりは三吉野のふりにし山の雪も霞めり

若草

生ひそめて幾日もあらぬ若菜をば飛火の野守出でて摘むらむ
生ひたゝば鹿も立ちふす秋の野の是も千草か春のわか草

早蕨

早蕨ははたやく賤が煙にもありそふばかりもえにけるかな
手を折りて春の日數をかぞふなる姿に通ふ初蕨かな

山鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

山里は花散りなばとまちなまし都の春の鶯の聲

京の鶯を得て庭に放つとて

後の世に園の春とふ人しあらばこゝにこたへよ庭の鶯

窓の鶯といふことを詠めとあれば

鶯はたが教へより春をしりて學びの窓しまだき鳴くらむ

春の雪

花と見てしばしまぎれむ待遠き櫻が枝の春の淡雪

残の雪

松が根におちて積れる白雪は去年見しよりも寒きいろかな

いとさえかへりし夜半に

此頃の寒さにやすく寝をばせじ若いぬる親のます世なりせば

梅を

殊更にいとまある身の恵なほかさねて袖につゝむ梅が香

軒近き春や昔のにほひまで袂にしめる梅の下露

散ると見し夢の行方は敷妙の枕にのこる風の梅が香

霞にもつゝみあまれる梅が香は風にゆるして四方につてまし

花の色にあらそひかねて明けにけり梅の立枝の朧夜の月

葛飾の里の臥龍梅を見に行きけり若き頃駒なべて見しがそは

朽木の残るばかりなり

朽ちのこる老木の梅にこととはむ汝も若木の春やいかでと

上邸の庭の梅一本あり代々めで給ひしと聞けるを聊手折りて
こしゝかば

代々めでし庭の一本の一枝に多くの春をかけて見るかな

西行忌に梅月といふ題を人のこしゝかば

咲く梅にとめきて匂ふ春の月うときかげさへ折にあひつゝ

かぞいろのめで給ひし梅のさきけるに雨の降り出でければ

梅が香も其世ゆかしき朝とでに袖も一つの春雨ぞ降る

柳を

つらからず靡きもはてす青柳のあかぬ姿に春風ぞ吹く

雪と見し高根の雪の色消えて柳の花に春風ぞ吹く

月をよめる

老が身をかこちもはてし春といへば涙の隙をおぼる夜の月

ともしびをそむけても猶影たどる霞の底の春の夜の月

曙を

霞さへまだたちなれぬ山の端は色香むなしき春のあけぼの

長閑なるまたねの夢の浮橋も絶えくかゝるあけぼのゝ空

夜もあけば若菜つまむと若がへる老の寢覺の春のあけぼの

雨を

うちしめる鐘の響に春の夜の音せぬ雨の音をきくかな

一しほの色そふ松はもみち葉の時雨とやいはむ春雨の空

霞とも雲ともわかで池の面の水にあとなき春雨ぞ降る
 夕月のありかはそれと見えながら霞にこめて春雨ぞ降る
 春雨の降るともわかぬ夕まぐれ軒の雫を数へてぞさく
 花を
 たづね入る心に深き山ぞなき野寺の鐘も花にかすめり
 一重より日毎に深き春の色を花にも見せて咲く櫻かな
 君が代は大宮人にあらぬ身も櫻かざして春をくらさむ
 まちをしむ人の心は長閑なる花の色香の嵐ならまし
 かざしても花に頭の雪ぞそふ六十路に近き老や隠ると
 散り残る梅にあらそふ心とは一重に見えぬ花の色かな

咲く花のがをりながらの松風は花が玉露の名残なるらむ
 梢まで霞みわたたりて咲く花の雲しづかなり夕暮の空
 花櫻咲きにし日よりうつせみの空しき枝の春をしぞ思ふ
 玉すだれかゝげし山の色ながら霞むや花のにはひなるらむ
 咲く花の梢しらみて青柳にまだ夜をのこすあけぼの空
 軒近き花の光にあけそめてひきおくれたる峯の横雲
 老いぬれば偲ぶことさへ重なりて花見る折も袖はぬれつゝ
 雫にもにはひこぼれて軒端までさくらにかすむ春雨の空
 軒端なる梢の色はさやかにて花をよそなる入相の鐘
 薫さへ四方にかすみて咲く花の雲間しづけき夕月のかげ

花にそゝぐ派といひる袖もなし關屋の里は名のみばかりに

飛鳥山の花を見て

大方の花を長閑に見る人も御代の恵みは知るやしらすや

飛鳥山あすもないひそ今日來すば消えぬ雪とや花も散るらむ

不二筑波花の木のまにはの見えて遠近かすむ春の山風

その山口にな折りをなど札たてしを

折れとても折られましやは大君の代々の恵の山櫻花

花を折りて送りけるに歌よみてこしゝかばよみてやりける

言の葉の露かゝれとて手折りにし甲斐もありける山櫻かな

花遅き年に

思ふにはそはぬ習を春の風いつ知りそめて花に吹くらむ

咲くと見し去年の空目の雪の色は似るべくもあらぬ花櫻かな

さく花に向ひてもまづ思ふかな静かなる世にしづかなる身を

上野の彼岸櫻の盛りを見てよめる

來て見れば吾妻の比叡の山も今重ねあげたる花の白雪

木々は皆枝もたわゝの花の雪つもらぬ松に春風ぞ吹く

三吉野の吉野の山もかばかりの深き色香の雲やかゝれる

その御山の父母の御寺にまうでて

なき人の面影うかぶ花の色も遠くへだてゝ霞む春かな

隅田川の關屋の里むかしならせ給ひしことを

春もやゝ末の松山なみこえぬ咲くらむ花をまつとせしまに
 花の散るを
 青柳の糸よりかけて散る花をぬきといむべき春風もがな
 うらむべき行方たどらむ夕月もかすむあらしの花の白雪
 春風のさそふまに／＼散りゆくは根にかへるとも見えぬ花哉
 けさ見れば梢の雲も中たえて花にあとある夜半の山風
 庭白き眞砂もわかす花ちりて梢にかはる有明の月
 さそふ風あるもうれし／＼おのづから散らば恨みや花にかゝらむ
 世の中のことわり見せて散る花に是もならひと春風ぞ吹く
 咲く花を心一つに惜むかな一人がための春ならねども

咲くも散るも同じ春風春の雨うらみむものは櫻なりけり
 とことはの松の調も散る花もおのがさま／＼春風ぞ吹く

糸遊

山の端の雪解の空は色きえて日影のかたに遊ぶ糸遊

駒の繪に

花山の昔かはらぬ武藏野やのとけき御代に駒いばふ聲

歸雁を

故里のまつををしむに比べればうらみかねたる春の雁金

あながちに花を見捨つる雁は憂し月をたのむの心なりとも

呼子鳥

聞きしらぬ身はいかにせむ呼子鳥聲は雲井にありとばかりに

苗代

散りうかぶ櫻山吹せきいれて苗代にほふ小田の春風

桃の木蔭にて酒くみつゝよめる

花の名のもゝ囀の鳥の音のかすにも酔ひをすゝめてしがな

藤をよめる

手にとらぬ桂の花やこれならむ木末に高き松の藤波

千世の春もかたみにこそは契るらめ松の末こそす花の藤なみ

彌生のつごもりにかありけむ

ひきとめむ霞の袖もさえて行く春の別れのきぬぐの空

夏

衣がへをよめる

立ちかふる袖の上にも世の人の心の花の色は見えけり

世の中の花ぞめ衣すてし身は今日とてかへむ袖だにもなし

花衣かへてもおなじ白妙の袂に春の名残をぞ見る

新樹を

こきませし花も柳の浅緑いとより通ふには朝風

花の雲きえて青葉のそらの色にうつればかはる風もすいしき

深見草を

蓬生の露もひとつのふかみ艸げに草の戸にをしき色かな

時鳥をよめる

むら鳥なくだにあかぬ月の夜に山ほとゝぎす一聲もがな

かけゆけば松の嵐も村雨の聲する方になく郭公

有明をながめてけりな郭公待つ夕暮のつらさながらに

老が身の人におくるゝならひをば空にもつぐる郭公かな

時鳥鳴きけんかしと深き夜の夢をうたがふありあけの月

一聲の名残の月の影消えて雲もわかるゝ山ほとゝぎす

一聲にすぎ行く方は見し春の散りにし花の山郭公

郭公雲のはたての一聲に心そらなるものをこそ思へ

百千かへり啼くかと思れば山松の梢を去らぬ時鳥かな

郭公なくよといへどきかざりければ戯れに

時鳥つか過ぎけりそよなくといひもてはやす聲のまざれに

あやめを

誰が軒も賤が庵の露けさを忘れじとてや菖蒲ふくらむ

軒近き花たちばなのかをりにもあやめわかるゝ露の朝風

陽明家の下りたまひける時わが知れるもの其供に加はりて御

館に旅寝すると聞きしかば菖蒲をやるとして

菖蒲草みつばよつばの軒端にもさすが旅寝の露やかゝらむ

橘を

橋のかばかりかはる袂にもむかしみはしのもととは忘れず
 橋の露散る袖の夕風にかけしやいづの涙なるらむ
 橋の今を昔とかをる世にしのはむ人の袖もゆかしき

五月雨

人目のみかれゆく軒の五月雨にいと生ひそふ葎よもぎふ
 松風もこの頃絶えて玉水のおとづれかはる五月雨の空
 昨日かも降り出でしものを五月雨の幾日とたどる窓の徒然
 くだかけの聲もくもりて鳥鵲も横雲たどる五月雨の空
 梅の實は緑の中に色わきて紅匂ふ五月雨の頃
 五月雨の空しくすさて有明の今もつれなき五月雨の空

五月雨の雲間なりけり夕月のほの見しかげを今朝に思へば
 五月雨の深きしめりにむらくと霜を見せたる夏のさむしろ

早苗

植ゑそむる小田の早苗にもる庵の秋の露さへ早おきにけり
 千町田の早苗の色はわかねども水の緑に夕風ぞ吹く

月を

月すめる緑のそらに白雲のむらく残る夏のさよ風
 月影は秋に真砂の夜半の霜降らぬ雨聞く木々の下風
 五月雨の晴れしと見れば蚊遣火に又かきくもる夏の夜の月
 まだ宵の空と見るまに影ふくる短き軒の夏の夜の月

草を

茂るとおなじ草葉の緑かは花こそ咲かね露のいろく

生ひいでし姿もいまは忘れ草こはしのぶなり野邊の早蕨

風わたる蘆邊すいしき難波江やつのがむ蘆を夢のまにして

螢

夏山の木の間もりくる月影にむらく消えて螢飛ぶなり

夕顔

月影に色そひてしも蚊遣火のけぶりにくもる夕顔の花

からすふり

からす羽にかく色なして白妙の雲のゆかりの世の

夕立

遠方のこりしく中にひとむらの白雲はしる夕立の空

時の間に日影くもりて降る雨のかをりすいしき夕立の空

池水にかすみ雨をなごりにてよそにすぎ行く夕立の空

鳴く蟬に夏をのこして夕立の名残の露に秋風ぞ吹く

蚊遣

煙にも入日へだてゝ暮れそひぬ軒端みじかき宿の蚊遣は

蚊遣する扇もいといこがるるや妻まつ賤がたそがれの宿

蓮を

吹く風に蓮の立葉のうら見えて花の香しめる夕暮の雨

法の道のたとへにひきしうき名のみあたら蓮の濁りとぞ見る

照射

ねにたてぬ夏野の鹿の思ひをや夜半の照射の影に見ゆらむ

扇

半いづる月の面影あらはれて招けば通ふ袖の秋風

納涼

夕暮の葉のぼる露をふみわけてすいみやせまし松の下陰

夕されば峯の松風谷の水一聲ならず秋ぞかよへる

夏祓を

秋

秋の初に詠める

散りそめし桐の一葉のあとゝめて木の間に白き三日月の影

涼しさをまちし昨日にかはらねば扇にならす秋の初風

七夕に

夕月の入りぬる後の空すみてひとり静けき天のかは浪

更け行けば庭のともしびかつ消えて秋風わたる烏鵲の橋

文月八日のあした

天の川あけ渡る空の鵲はよのまの橋の名残なるらむ

萩を

いつしかと聞の扇の風絶えてうは葉にうつる萩の音かな

中々におとなき秋の淋しさを思へば戀し萩の上風

夕されば野山の秋のあはれまで風にこめたる庭の萩原

尾花を

松虫の聲する方に月おちてひとり尾花の露まねくらむ

畫によて

うちなびく尾花の袖の露散りて月吹きかへす須磨の浦風

千年へて折ちなび松の行末をかげてぞ見する朝顔の花

虫

聲たてぬ虫もさぞなとなく虫に秋のあはれを集めてぞ聞く

老いらくの寢覺ことゝふ虫の音もやゝ年々に遠ざかり行く

人とはぬ草の庵の夜の雨にとはすがたりの虫の音ぞする

琴の音に通ふ高根の秋の風たゆむ裾野に松虫ぞなく

夕ぐれ

枯れはてし軒の菖蒲の末葉よりしづく短き夕暮の雨

大方のあはれは秋の夕暮につくとや鐘の入相の聲

とはれじと思ひ定めし草の戸もさすが人まつ秋の夕暮
 とはんとも我は思はで人にのみうらみかけたる秋の夕暮
 夕づく日雲間に影はさしながら村雨白く山風ぞ吹く
 秋の日のかげや、よわき夕間暮色なき雲を峯にただよふ
 村時雨鹿なく山もかくや降るこゝだに堪へぬ秋の夕べに
 いで、見れば山は鹿の音野邊は虫處わくべき秋の暮かは
 心しらぬ人はとふとも寂しさを何なぐさめむ秋の夕暮
 秋に今つれなき色の松が枝もあはれは知るや夕暮の聲
 いつの世のいかなる秋の夕暮にちぎりかなしき秋の上風

鳴く虫も庭の尾花もわが袖も露はへだてぬ秋の夕暮
 などてかく野山の上に眺むらむ人の心の秋のゆふべを
 庭のおもは秋も昔の秋ならぬ蓬むぐらの露の夕暮
 思はじと思ひすてゝも夕々浮世にかへす葛のうら風
 草むらにさす影よわき夕づく日それにも虫の聲ぞ聞ゆる
 月ほそく叢雲迷ふ山の端に雁がねさむき秋の夕暮
 とはれにし庭の浅茅の跡たえて残る露さへ秋の夕風
 紅の入日の影はやゝ消えて雲なきみねに秋風の聲
 まらうどの來りければ
 人目なき草の庵にことゝふはこの夕月のかげばかりかは

思ふことありける折にかありけむ
大方の秋の夕はいかにぞと物思ひなき人に問はばや

秋の末つかた角田川原にゆきて

ことゝはむ鳥だに今はなかりけり角田川原の秋の夕暮

稻妻を

鳥羽玉の闇にぞ迷ふ稻妻の消えてはかなき雲の行方も
稻妻の影に玉ぬく夕露はあだなる世をや人に見すらむ

駒迎といふことを

ひく駒の名をのみ月に残しつゝ残らぬあとの逢坂の關
月をよめる

白妙のゆふつげ鳥はほの見えて軒端におつる三日月のかけ

茜さす入日の名残消えはてゝ雲にいろわく夕月の影

隈もなくはれゆく遠の高根より松をのこしてのぼる月影

夕されば色なき露に月見えて聲なき松に秋風ぞ吹く

はれくもり月の夜わたる影を見ても我葎生の露ぞしづけき

秋の月うきみに何の契ありてかならず袖の露をとふらむ

空にめで袖にうつして大方の人にはをしき秋の夜の月

つくゝと獨むかへば我身さへ月の中なる心地こそすれ

更けゆけば松風きよく月すみて心の空も雲は残らず

萩のみか聲なき葛のうらみまで月にのこさぬ庭のおもかな

露をとふ風は物かは夜半の月音なきしもぞ寢やはねらるゝ
 隈もなく月の影すむ庭の面は木蔭に見する空のうき雲
 ふけゆけば四方の嵐も静まりて月に音なき軒の下荻
 くれふかみ葉のぼる露をふく風の芝生のそこに月を宿れる
 吳竹の風はしぐれの雲の月おきふす影に晴れくもりつゝ
 いとひにし花の嵐も秋の夜の雲間の月にかつ待たれけり
 世の人に見せばや露の八重葎しげれる軒の月の光を
 草の戸の今もみはしの月影を袖にうつして仰ぐ夜なぐ
 見ぬ影もすぎにし空の戀しさに思ひあつめてむかふ月かな
 うき事も嬉しきふしも思ひ出でゝ秋の夜の月

昔今思ひのころぬ秋の夜の月に涙のかぎりを見む
 數ふれば月に多くの秋もへぬ身は元結の霜ときえなで
 思ひいづる我世の上のむかしさへ月に多くの秋は經にけり
 なれにしははや古のそらの月それも戀しきかげとなりつゝ
 代々の人のながめすてゝし秋の月思へばこひし行末の空
 なき人の形見の露も數そひて袖にくもらぬ夜半の月かな
 共に見し人も多くはあだし野の露を形見のありあけの月
 代々遠くしのぶの露も袖の上にみだれておつる軒の月影
 さやかなる影より外の色ぞなき秋風しろき月のさむしろ
 大空のかぎりを見せて月影に海原しろく秋風ぞ吹く

清むは空濁ると見るは遠方の月のひかたの秋の海づら
風さわぐ木々の葉ごしの月影は千々に碎けて散るかとぞ見る
あけぬると見れば雲井に霜白し月のそらねの鵲のはし
ひたすらに厭はむ月の雲ならむ捨てしうき世に思ひこりずば
雲も風もをさまる御代に草の庵すみとげたりと月を見る哉
秋もやゝ末葉色づく露の上に霜をかさぬる淺茅生の月
寢覺して見ればこそあれ老いすばと命うれしきありあけの月
草の庵に一人ながめて思ふかな我身は今ぞありあけの月
世にすみし影を昔になしはてゝ雲にまぎるゝ有明の月

月おつる戸山に星の影をみえ、雲のわかれたる花年の初月
世にすみし影を昔になしはてゝ雲にまぎるゝ有明の月
月ばなほいりての後もさやけさの名残をのこす軒の松風
八月十五夜によめる
昔たれこよひ一夜を名にたてゝ曇らぬ月の影を知りけむ
殊にさやかなりける時
蟬のかる最中に月のすめる夜をわれからやつす袖の上哉
草の庵に心しづけくながむれば恵みも月も身にぞみちぬる
致仕の秋にかありけむ
まらうとと月を見てよめる

とふ君もとほるゝ我も向ふ夜の月より外は言のはもなし
朝臣在邑の時

月見ても先こそ思へ白河の關のあたりの秋風の空

舟中にて

とる棹のものと雲も末の露も月のなかなる池のともぶね

さす棹の桂も影のえにしとや舟のあとゝふ月のしらなみ

てる月のちりも曇らぬ池の面は浮べる舟やくまと見ゆらむ

連夜月を見て

満ちぬるもかくるも月にまかせつゝ心のとかに向ふ夜なく

雲の上も同じ心を見れば又身におふけなき暮生の月

あかし町といふ所にて

こゝも亦月の明石の名にしおへばよるとしいはむ浪だにもなし

明石瀉月のでしほもほのゝと心によする秋の浦浪

長月十三夜に

琴の緒のかずも今宵の月影にかよひて澄める軒の松風

めでそめし其代の人の面影もしのぶ夜遠き長月の影

田安黄門の君長月十三日に立寄りせ給ひけるを

長月の今宵の月の名のみかは年に稀なる光さへ添ふ

月の蝕するを

夕づく日このよの下にかげくれてしばし隈ある夜半の月かな

復圓したるを戯れに

あらためて圓にかへる月影を人皆仰ぐ今日の空哉

なりどころの小池の月を見て

わたつみの波のみるめはさもあらばあれわれに事たる池の月影

畫によて

ながめやる沖の小島の二つ三つ月の隈なる秋の海原

四つの緒のしらべも絶えて秋風の聲のみ月に逢坂の關

端居して浪の月をうち見て

月影の清き階に向ひてもさすかに通ふ風の秋風

舊領に復したる秋にかりけむ

雁を

春の夜の霞みていにし行方をも月に數へん秋の雁がね

さやかなる聲を光に先立て、月まつみねをこゆる初雁

友やなき友やわかれし雁がねのつばさ寂しき秋の夕風

羊かふ遠つ島根のあはれをもとひてや見まし雁の一つら

霧をよめる

朝霧のはれゆく跡に森見えていまかあけなむ山もとの里

もすのなく櫨の立枝はほの見えて行末ふかき野邊の夕霧

露を

草の上うへに結むすぶも散ちるも世よの中なかのことわり見みする秋あきの白露しらつゆ

擣衣きぬたといふことを

嵐あらしふく賤しんが夜寒よさむの浅茅生あさぢふにわすれぬ霜しもの衣ころもうつらむ

うち拂はらふほどや碯きわたも聲こゑたえむ夫つままつ賤しんがの涙なみだを

故里ふるさとの小萩こはぎがもとのから衣ころもななく月つきをうつしてやうつ

紅葉もみぢを

ものゝふのかざしにせばや紅葉もみぢばは散ちりなむ頃ころぞ人ひとにしらるゝ

遠山とほやまの松まつもあらはになりにつけり時雨しぐれを見みする木々きぎの梢こやぶに

いつか又酒またさけあたゝめむ木きの下もとの苔こけにいろづく枝えだののみち葉は
花はな散ちりてうとくなりしももみち葉はに立たち上ありてふ山やまの下したへ

菊きく

心こころあてに見みれどもわかす月影つきかげの霜しもに通かよへる白菊しろぎくの花はな

さまぐの花はなに心こころをおく露つゆも今は一つの庭にはの白菊しろぎく

紅くれなゐにほふがころは吹上ふきあがりの波なみにわかるゝ白菊しろぎくの花はな

暮秋はしゅうの景色けしきを詠よめる中うち

紫陽花あじさの花はなの面影おもかげなほ見みえて尾花おなの雪ゆきに秋あきぞふり行く

浮草うきぐさの消きえ行く秋あきの池水いけみづは桐きりの朽葉くちはも底そこに見みえつゝ

秋あきの日ひの影かげおとるふる草くさむらに晝ひるなく蟲むしの聲こゑぞきこゆる

冬

冬

うかりける秋よりもげに寂しきは冬の初瀬の山おろしの風
 曉にわかれし秋のうつり香をしのぶ朝けの霜の白菊

時雨を

定めなき世の浮雲の例をも空に見せてやまづしぐるらむ

涙さへ袖にあらそふ時雨かなふりし世したふ老の枕に

すぎゆけば又音たてゝ手枕の夢路ゆるさぬ小夜時雨かな

時雨には色なきものをかくばかり濡れて木の葉のいかに染むらむ

しぐれゆくあしたの雲は後朝のたが袖とひし名残なるらむ

落葉

木の下におのれと落つるもみち葉に風の思を思はれを思はる

散りしける庭の木の葉をふきたてゝ梢にかへす山おろしの風

吹く毎に松の落葉のむら時雨これもや風に晴れくもるらむ

梢にはふく音たえてもみち葉や庭に色ある木がらしの風

嵐をば松のこすゑに残しおきて心しづかに散る木の葉かな

みどりなる中に見そめし紅はいくへの下の落葉なるらむ

霜をよめる

朝ぼらけ前のたなはし霜しろし渡らぬ人のあとも見えつゝ

有明の月の光をそのまゝに結びこめたる野邊の朝霜

高根には残る入日の影のうちに夕霜こほる山の下草

木枯を

花ならば紐とく頃の三日月にあまりはげしきこがらしの風

庭の落葉軒のかれ萩うちさわぎ霞まじりの山風ぞ吹く

吹きのこす時雨の雲も月影もこほるばかりの木枯の風

昨日見し櫺の立枝も落葉して尾花にのこる木枯の風

松を

木がらしはたえし高根の月かげに琴の音のこる松のひとむら

落葉せし梢にたえてところ／＼嵐をのこす松のむらだち

草を

野をふみたる花はかりになりけり下は風のふりしをわて

露は霜に結びかへても蕨原のをよげぬる／＼穂の上かな

散るは雪残るは霜のおもかげや花も末葉の池の枯蘆

浪の花ちるかと思ればむら蘆の穂末の雪に浦風ぞ吹く

冬されば浦回の蘆も枯れはてゝあらはになりぬ霜の八重葺き

菊

花なしといひけむ人に知らせばや冬さく菊の深きあはれを

氷

池の面は氷らぬ方なかりけり鴉の浮巢やいつこなるらむ

浅香山影さへ今は絶えはてゝ雪もこほる山の井の水

まがひつる浪も氷りて志賀の浦や梢にかへる松風の聲

時雨にも此頃なれし手枕にまた音かへて霰ふるなり
 村雲の絶間に月はさしながら風のあられの窓をうつ聲
 槇の屋の霰のおとに目覺むれば夢の行方もくだけてぞ散る
 風はやみ高根の雪をふきたてゝあまぎる空に霰ふるなり
 雪をよめる

秋しのゝ里の時雨のあとたえて生駒の嶽に積る白雪

さればこそ厭ひしものを浅沓のあとより早く消ゆる白雪

とちはてし律も今は霜がれぬはや道かくせ宿の白雪

降りはれし雪の朝けは長閑にて春日おほゆる空の色かな

花と見る雪の隙のそらめにもくらさはおなじ春の山風

秋ならば月まつ頃のゆふべにもまだくれやらぬ雪の白妙

さとびたる犬の聲さへ雪ふかみ末ふす竹のおくになくなり

仰ぎては限なきものをむら消えの雪間にくもる庭の月影

鳥が音は雪の下より告げそめてあくる夜はやき逢坂の關

風さむみ雪消の雲の通路に少女の袖もこほる月哉

降るがうちばかりかひ曇る海原もはれて間近き雪の島山

三吉野も心の奥にかゝりけり花よりさきの花の白雪

此ごろはいづこの山も末の松雪の浪のみ越すと見えつゝ

なよ竹の靡けば早くあけそめて窓しづかなり雪のあけぼの

降る雪に上毛くもりて立つ鷺のあとに緑の松の一枝
 咲くと見し四方の梢もくれはて、花に聲ある夜半の雪折れ
 冬ながらぬるむ夜風に雨となりて軒端にいそぐ雪の玉水
 年の暮に深くつもりしかば詠めりける
 とかへりの花まち遠き老が身はまづもてはやす松の白雪
 雪まつ頃ふりしと夢みしと語るものに
 夢のうちに積れる雪の玉手箱あけてくやしき庭の面かな
 庭にしほやが崎といふあり
 汐やかぬしほやが崎はふる雪をけふりになして浦風を吹く

雪ふれば花が枝も伊豫すだれ更にむかしをかけてこそ見れ
 雪の降るを見て戯れに

降りやむか柳の花と散るがうちに櫻もまじる夕暮のゆき

十月廿日雪の降りければ

事しげき賤は晩稻を刈るひまもほすまもあらで雪やわぶらむ
 埋火

是もまた老にけらしとかき起す寢覺の友の間のうづみ火
 寒さをもいとはで賤がやく炭の心もしらすむかふ埋火
 小夜ふけて見れば螢の秋ちかきかげよりまれに残る埋火

鷹狩を

かり衣交野の春のおもかげや雪の花散るあけぼの、空

とく咲く梅を

一年の花のとちめの菊もまだのころが中に匂ふ梅が香

年の暮に

あすといはい春と共にやたちいでむ我をすまりの谷の鶯

齡のみつもの浦の磯馴松ことしも老の波はかけり

このごろの降りかふ雪もけふ霽れぬ來むといふ春の道は惑はじ

冬と春とゆきかふ今日はふる雪の片枝に梅も薫りそめつゝ

いとさなき身にのみつもる年ならばいかに嬉しき今宵ならまし

雜

星

風をあらみ静こゝろなきむら雲にそれまたく夕づゝの影

風

月にまち花にいとひて世の人の心みせたる春の小夜風

香をさそひ花をちらして一方にうらみもはてぬ春の山風

ひとすぢの雲ものこらぬ秋風をさやけき月の光にぞ見る

曉といふことを

きぬくの露よりなれて猶しぼる老の寢覺のあかつきの袖

曉のねざめに何をおもはまし花に嵐のなき世なりせば
 唐土の見ぬ世の人のうへまでも戀しきものをあかつきの床
 年々に霜夜のかねの響きさへむかしに遠き老の手枕

曙

窓の戸のしらむ光ももしびの消えて見そむるねやの曙
 暗くなりあかくなりゆく燈にあげがた近きねざめをぞしる

朝

有明の月の光と見るがうちに朝日の影ぞ雲にうつるふ

霧はれて松の葉しるき蜘蛛の巣に玉ぬく露の庭の朝風
 有明のひかりぬきまゐる朝日影に名残るひしき庭の霜かな

水鳥の聲もほのかに霧こめて霜おき迷ふあけくれの庭

夕

茜さす入目のどけき山の端の霞にくるゝたそがれの空

ひとむらの遠の林もかすみつゝとまり鳥の聲ものどけし

ねぐらとふ林の鳥の聲までもかすみにしづむ夕暮の空

霞たつ花の夕はさもあらばあれ残る紅葉のうすぎりの空

夜

目さむれば虫より外の秋ぞなき松も音せぬ夜半の枕に

見しよりもあふぐばかりに聳えたつ庭の闇夜の常磐木の影

ともしびの光しづかにたちのびて霜夜の月の鐘ぞさえゆく

富士の根を

今朝見つる雪はいづこぞ不二のねの色より急ぐ黄昏の空
入日かげ染めしがうちにそめ残す色は夕の富士の芝山

不二のねは夕日の跡に猶見えて遠の林のいろぞ暮れゆく

見るが中に不二のみ雪はきえはて、白きを譲る夕月の影

心あてに見ればそれかと打ち向ふ霞のそこの雪の富士の根

海原のかぎりを見せて白浪のつきぬる空にうかぶ富士の根

白雲もいゆき憚かる不二のねはいづこに雪のふり積るらむ

仰ぎ見る筑波の山にますかけはかすみの中の雪の富士の根

朝日影切ふ高根はあらはれもふもととは霧の浪ぞたゞよふ
夕の山

海ごしの山もさやかにあらはれて波の限を入日にぞ見る

風の山

見るが中に吹きまく風の程見えて靡きさだめぬ峯のうき雲

雨の山

こゝかしこ山の姿のはの見えて隠るゝ方に村雨ぞふる

春の海

ひく汐に色香も遠く通ふらむ花さく岸の里の夕風

夏海

飛ぶ驚のみの毛亂れぬ浦風に音なき松の風もすいしき

冬海

木の葉をば拂ひつくして浦波に吹く音弱る木枯の風

朝海

朝づく日すがた定まる浪の上に光を散らす沖つ汐風

晝海

朝な夕な間近く見しも中空の日影に遠き沖つしま山

風海

雨となり雪と碎けて荒磯に風のこゝろをよする波かな

石

おのづから聲ある浪に沖の石の顯れぬしもさすが知らるゝ

故郷

故郷といづれをいはむ生れしも又生ひたちし方もある身は

本あらの萩の下葉も色づきて古里さむく雁や鳴くらむ

寺といふ事を

寺々もあるにまかせてまさじとの掟たふとき君が御代かな

隣といふ事を

高麗宇留馬君が御國の隣とてうとみもやらす近づけるせず

唐人からびとを春はるごとに櫻さくらをかざすのどけさを入日いりひの國くにの人ひとに見みせばや王昭君わうせうくんうつし繪えの筆ふでのすさびのぬれ衣ころもかさねて君きみが恨うらみをぞ見る松まつを吹ふく風かぜの絶間たえまに見みれば軒のきちかき松まつの梢こやしは聲こゑなかりけり色いろかへぬ心こころばかりは幾千代いくちよのはるもくらべむ住吉すみよしの松まつ

つはふき

陸奥むつの黄金こがねの花はなの色いろのみかかつはふうきの名なもおひにけりからねこの眠ねのどけき春はるの日ひは是こゝも胡蝶こてふの夢ゆめや見みるらむ春鳥はるのとり雲くもに入いる雲雀ひばりの聲こゑも草くさむらのそこのきいすも春はるやたのしむ鶴つるたらちねの深ふかき恵めぐみぞ思おもひ知しる霜夜しもよの田鶴たづの聲こゑをきくにも鶏にほとり鳥とりが音ねにおき出でる程ほどは變かはらねどつとむる道みちぞ人ひとにわかるゝ蝶てふ散ちれば散ちり咲さけば飛とびくる胡蝶こてふこそ心こころの花はなの色いろを見みせけれ鏡かがみ

うてばうてうたねばうたぬ影なるを鏡の中の人なうらみそ

父母の持ち給へりし鏡を

ます鏡むかへばうつる面影はさらぬ形見のちぎりとぞ見る

燈臺を作りて

かゝげては月の光も花の色も同じくこもる夜半の燈火

船

君と臣の契はかくぞありそ海のしづけき浪にうかぶ浦船

探香丸といふ船をつくりて梅莊の梅見むと始めて乗りし時

さく梅の花にこがれてゆく舟は香をとめてこそ梶やとりてめ

ものゝふのたけき心も正しさの月いる道にかへりみて知れ

笛の名を

青柳の振分髪の水かゝみうつるやいつの名残なるらむ

明石といふ筆簾のうつしを

名にしおふ明石の浦の月の影映る浪さへ世に似ざりけり

軍學の師に

唐土の七つの書をまねぶ身も五つの道を基にぞする

老人といふ題にて

年ふりし人を厭ひし報いにや且我老のいとはしきかな

ある社にまうでゝ

すなほなる心の外のねぎごとは神もゆるさじ我も思はず
 思ふことをのぶる
 睦じき其はらからも所せき身にはかたみに遠ざかりつゝ
 うら表かはらぬ人を友とせよこの手柏のともかくにも
 言のはのしげさ増れど花もなき夏野の草ぞ我たぐひなる
 何にかけて昔のあとを尋ね見む長柄の橋も名のみばかりを
 大空の心のはてをつくぐと月によそへてながめつるかな
 何事もことたる上はふしもし足らぬぞものゝ哀見せける
 年月はかへらぬものを我ながら驚かぬ身ぞおどろかれぬる
 いかにせむ撫下し名残の黒髪もや、白雪とふりかはる身を

一筋に道をばつくせ鏡波山このもかのもに心うつさで
 世の人を心の如くなさばやと心にうきもおふとこそ聞け
 たふときも中々くるし浮雲に身はなしはてゝ月にあそばむ
 なみならで皆品こゆる世なりけり人の心の末の松山
 時ぐれば木々も花さき落葉して迷はぬ道を庭に見るかな
 假の世と此世をいはじ君と親の恵はいかい人にこたへむ
 事足れば足るにもなれて何くれと足るがうちをも猶歎く哉
 塵ひちになり出づる山を見ても知れよしあしつめる人の行方は
 わが爲によければ國のためならず身を忘れてぞ國は治めむ
 夕月の夜毎のかげを見ても知れ望はかけゆく空のならひを

千代經ちよへとも一つ誠まことは久方ひさかたの月日つきひと共に照てすべらなり
 天地あめつちの誠まことはそれと知りながらまことにしらぬ我心わがこころかな
 おひたてし親おやの恵めぐみを思おもひしらば我身わがみを君きみにつくさいらめや
 人の親おやとなりにし後のちにとはいやな子こを思おもふ道みちは浅あさきものかと
 大方おほなたは我身わがみの上うへにまぎるめり世よをすてゝこそ世よをば思おもはめ
 惜をしからぬ折をりと思おもへばをしからぬ命いのちをししく思おもふ年月としつき
 うしとても人ひとな咎とがめそ人ひともまた恨うらむことなき我身わがみならじを
 慈鎮じちん和尚をしやうが長ながかれと思おもふ人ひとのみ短みじかくてあらざれかしと思おもふ人ひと
 の身みといふ歌うたの心こころをよめといへりければよめる
 惜をしと思おもふ人ひとのみ人ひとに惜をまれて惜をまれぬ人ひとのさてもつれなき

さまくゝ畫えによて

風かぜほそき河邊かはべの柳やなぎかつちりて人ひとなき舟ふねぞ岸きしにつなげる
 はるかなる繪島えしまに通かよふむら千鳥ちどり聲こゑは心にまかせてぞきく
 秋あきふかき外山とやまの尾花おはな霜しもがれてたちどあらはに鹿しかぞ鳴なくなる
 秋風あきかぜになびく尾花おはなの末すえはれて鹿しかの音おとおくる山川さんせんの水みづ
 小田おだの庵いほをいでゝも瀬々せせの網代木うらぶきに故里ふるさと遠とほき月つきや見みるらむ
 木の葉は散ちる後は高根たかねも聲こゑ絶たえて嵐あらしにのこる三日みか月の影かげ
 おく霜しもに影かげをのこして千町田ちまちだの稻葉いなばにしづむ有明ありあけの月つき
 水青みづあおく遠山とほやまくろき夕暮ゆふぐに入江いりえの田鶴たづの色いろぞまがはぬ
 秋あきふかみ外山とやまの尾花おはなしもがれて夕月ゆふづきさむき小男こゝし鹿しかの聲こゑ

石ばしる瀧にまかせて山守も心のどかに花や見るらむ

義家朝臣勿來の花の繪

陸奥の勿來の關は名のみして世に越えにける花の言の葉

楠公の像

明らけき君が心は月と日の光と共に世を照さなむ

契沖の像

雲とながめ雪とめづるも咲く花の深き色香を盡すとはなし

謡曲最妙寺雪中潜行の繪

毛衣に寒さを知らぬためしよりすこし心の深き雪かな

同程々の盡によりて酒のみ

酌めど盡きずのめども更に繼らぬは我程々をしるにぞ有りける

小松川の御狩の繪

長閑なる御代の例にひきも見よ小松の川の春の御狩は

角田川の都鳥

角田川今はまことの都鳥むかしの鄙の事や問はまし

玉の繪

朝夕にみかくを玉の光にて遂に車の數もてらさむ

玉ならば猶も磨かむ言の葉のかけたる霜ぞせむ方のなき

諫鼓をかきて鳥はなし

鳥は今すむべき里に所得むいさめの鼓聲絶えずして

雪月花の繪

峰の雪麓の櫻いろそへて霞にもるゝ春の夜の月

夕月の影もひとつに霞みつゝ花につゞける富士の白雪

紅葉に菊

秋もやゝ入あや近きかざしとや紅葉のもとに菊も咲きけり

三猿の圖によてよめるが中

いふべきをいはざるも亦いはざるをいふも道には叶はざるなり

團扇の繪によて

手にとれば袖に袂に通ふなり雲井の月に軒の松風

桐壺

紫のはつともゆひの色と香に迷ふこの身を結びこめつゝ

空蟬

空蟬のはかなき露に迷ふかな過ぎし雨夜の心ならひに

夕顔

夕顔のあだなる露のそれよりももろき心のみだれをぞ見る

若紫

末とはき若紫のゆかりより長き闇路にむすばほれつゝ

紅葉の賀

心ならでたちもふ袖はもみち葉の仇なる露の色と知りきや

花の宴

行末のふかき霞に迷ふかなおぼる月夜のかげをたのみて

繪合

はかなさの心くらべの寫し繪に其世の人のけしきをぞ見る

東屋

東屋のあまり身に似ぬやすらひに袖も沾ちぬる軒の村雨

夢の浮橋

行末のわたらむあとも残りけりたえてはかゝる夢のうき橋

風月水月といふ事をよめる中

ふさわしたす軒の簾の白露は月と風とのやどりなりけり

柳の葉のなびくばかりの秋風にこれもいとかく三月月の影

おのづからうつる月影うつす水の深きや池の心なるらむ

圓なるもくだけで散るも池水の月の姿は只秋の風

硯を水月と名づけて

月影のうつればうつしされば又あとなき水にかへるしら波

又風月といふをつくりて

吹く音は光になしてさやかなる月をすがたの秋の小夜風

旅だつ人に扇を送りて

手にならす扇の風にいく里の野山の露をはらへとぞ思ふ

文化十三年鹽竈へまうでむと思ふころ

思ひたつ旅にしあれば椎の葉の白き朝けの霜もいとほす
 其旅だつ時御衣賜はりしかしこまりをよめる中
 かさね着る厚きめぐみの衣手に野山の風もなにかいとほむ
 此旅の道すがらよめる中 古河のやどり月を見て
 寝を安く誰か夢みむ枕かの古河のわたりの月さゆる夜は
 古河のあたりよりうちつゝける松の並木を
 玉鉾の道のゆくての松が枝は御代を契のいろとこそ見れ
 白坂の道の松杉を見て
 おひしげる道のゆくての松杉も二葉のむかし我にとはなむ
 こは我むかし植ゑたればなり

阿武隈川のほとりに櫻山といふありこゝに亭あり珍らしくこゝに來にければ昔近侍したるもの集めて酒くみあひてよめり

ける

年をへて阿武隈川によるものはかたみに老の波ばかりなり

同じ時に詠める

圓居するけふの心のどけさは櫻の山の春もかはらす

行くく詠める

うづもれし岩井の水も時しあれば朽ちせぬ代々の験をぞ見る

其頃石文掘りいだしたればなむ

そめつくす安達が原のもみち葉は心こはくも見えぬ色かな

實方の塚を 西行法師とひし頃を思ひいで、
 事とひしあとだに今は霜枯れて野原の薄たれ招くらむ
 霜枯の尾花は何をまねくらむすぎてこぬ世を我は戀ふめり

義經の腰掛松といふを

たちよりし其世の人の名もそひていといふりせぬ松の色哉

仙臺領に入りて

やま人の臺の松の風の音はげにも異なるしらべとぞ聞く

千貫松といふを見て

春の宵の時のまにだに舟人はかへじとや思ふ峯の松原
 宮城野にて 長月二十あまより六日頃にかありけむ

宮城野の本あらの萩もかれはてゝ残りすくなき秋風ぞ吹く

鹽竈のあたりにてよめる中 勝書樓にて

うつし繪にまさるみるめを藻鹽草えぞかきあへぬちかの鹽竈

松島や又も見るべき身にしあらば宮屋の波に袖はぬらさじ

松島の月見が崎の雨の夜はこゝろばかりぞ澄みわたりける

松島やをしまぬ老のとしなみも今日はうれしき命なりけり

歸さ急ぐとてうらみいひこしたる人へ

よる浪は返るならひを松島のまつともいはでなどうらむらむ

白河の關のあととふとていきし折の歌の中

とめゆきてけふ白川の關はみしとばかり告げむ秋風もがな

山路ゆきてふりさけ見れば關の海やうちよする波は只松の風

武隈の松 もみちの山までは我領中の名所なりき

武隈の二木の松のふりし世をとはいこたへむ峯の秋風

忘れずの山

世々経ても心の奥に通ひけり人忘れずの山のあらしは

阿武隈川

豊なる世に阿武隈の川波は深き心によるとこそ見れ

さくら山

春ごとに遊ぶ胡蝶となりてだにさくらの山の花をとほまし

紅葉の山

思ひやる心ややがて雨となりて紅葉の山の秋を染むらび

其旅のかへさによめる歌の中

刈り残すおくての稻葉なびきつゝところぐに秋風ぞ吹く

紅のいり日の色もやゝきえてひとむら雲ぞ空にのこれる

ところぐ水田の面はあけそめて横雲くろき山の端の空

富士松島の優劣をとへば

世の中にたぐひなきものは駿河なる富士の高根におくの松島

八景とてこひしによめるが中 鹽竈の浦の霞

蟹のたく煙の末はほのぐとかすみ消ゆる鹽竈の浦

末の松山の櫻

吹きさそふ花の薫も波ならでこえくる風の末のまつやま

宮城野の鹿

宮城野の萩のゆかりの夕露にこれも色ある小牡鹿のこゑ

近江の八景を二所づゝよめる中

よる浪の音も静けきよるの雨のおつるやいづこ初雁の聲

暮おそき空かと思れば雪の中にたえゝ通ふ入相の鐘

大塚の六園にて

願はくは千年の後にわれゆきて花やもみぢの蔭にあそばむ

浴恩園の山上に石文たてゝ

なれにける園の春風あきの風吹くらむ未の袖もゆかしき

竹にて東屋をつくりて

起きふしも國やすかれの一ふしは心にこむる笹竹のやど

大崎の雲州の別荘に行きてよめるが中 臥雲眠雲の額かけた

る亭

雲かゝる折々ごとに夢や見む月のしたぶし飽かぬ夜すがら

亭あり案内のものに名をとへど答へず主人この世去り給ひし

後に此亭落成したりしなど語る頃遠寺の鐘の聞えければ

庵の名をとへど答へず袖の上に露うちそふる鐘の音かな

再びゆきてよめるが中 折しも雨ふりていと物さびしき秋な

りければ彼亭にて

鐘の音も去年にかはらぬ夕暮にうち重ねつゝぬらす袖かな

水月君庭見に來り給ふ時月を見て

殿の中に袖をつらねし折だにも月見し夜半はなかりし物を
君も今みどりの雲にかゝらずば月にくまなき圓居せましを

久しくあはざりける人に逢うて

昔見しまゝのつぎ橋朽ちもせで再わたるえにしをぞ思ふ

水府の御館にて西山公の道服を其まゝにうつして給ひければ

うれしさも袖につゝみて幾千年ゆづるの衣家につたへむ

田安の箱崎の御別荘にゆきて貝拾うて

ありたちて貝や拾はむ玉松のひかりさしそふ袖のなごさに

松浦ちしの君の庭をとふ

とはるゝもとふも一つに柴の戸の露靜かなる世をぞたのしむ

或人の庭の梅をみにゆきしに、けふよりは折らずかがめず土か

はむ君がやどりの梅の木のもと、といひければ

幾春もをらず土かへ大君のこれもめぐみの園のうめが枝

向南ぬし訪ひ來て、里はあれす人も老いせぬ宿の月籬ばかりや

野らとすむらむ、といへりければ

言の葉の露の色草さくべしや庭もまがきも野らとならずば

とよ村のある人のなり所に三齋君のつくられし曲水の流の跡
を見て

盃さかづきのうかぶながれも水涸みづかれぬ何なににむかしのこことやくまなむ

白金しろかねの薩摩さつまの別莊べつさうのゆげたの井いといふを

數かずへ見みむゆげたの井い筒づついつか其そのくみにし儘ままにうつる月日つきひを

南湖なんこに石いしぶみたてゝ

みづうみの其名所そのなじころも末すえとほく傳つたふしるしの岸きしの石文いしぶみ

哀傷あいしやうのたぐひ

末三郎すえさぶらうといへる翁おきなが始はじめての初孫玉うひまたまの様やうなるをの子こなりしと

かゝるべき契ちがひなればや撫子なでこのいろしもふかく思おもひそめけむ
年としのめぐりなむとの時ときよみしが中

みし夢ゆめのさむるはもろき常夏じやうかの露つゆのあとゝふ藤ふじのゆふかぜ
はかなさはゆふべの風ふうの露つゆの玉樹たまきの半しやうも貫くわんきはとめなで

彼季三郎玉樹かのすえさぶらうたまきといへばなむ

なき人ひとの今年ことしもまたも數かずそひぬかくては誰たれか我われをとふらむ

元日大喪中げんじつたいさうちゆうなりしかば 其去年そのこぞのしはす尼君あまぎみかくれさへ給たまへ

り

吹ふくとても袖そでの氷こほりてとくべしやあしのすごしの春はるの初風はつかぜ

夢ゆめに尼君あまぎみを見奉みだてまつりてなむ

夢ゆめにさへさらぬ別わかれのある世よぞと思おもへばいとぬるゝ袖そでかな

其頃そのころよみしが中うち

母子家庭で育った加藤まさ子は
中学一年のとき母が再婚して伊

庫 文 人 婦 (148)

ともし火は消えてもきえぬ係を闇にぞしたふあかつきの床
仰ぎ見しほども嵐にかきくれて雲にしづめる三日月のかげ
たらちねの恵にもれぬ此身にはおつる涙も形見とぞ見る
ありし世の事をあまたに忍ぶ哉幼きをりを始にはして
喪中上使ありし時

此頃の袖にあらそふばかりなりかゝる恵におつる涙は
御寺に詣で

たきものゝくゆる煙もかたみぞと見れば消えゆく燈のもと
夢とのみたどる日頃も過ぎぬれとさめはてぬしや現なるらむ

天が下にぬれぬ秋は有磯海や浪邊の海人の袖ばかりかは

其頃物の音をといめらる

夢さそふ夜半の嵐に露きえて庭にかれたる虫の音もなし

なく雁の聲やいかにと見おくれれば是もきえゆく夕暮の空

尼君一めぐりの折なむとによみしが中

去年今年ひとつ涙にかきくれて夢かうつゝかわく方もなし

一年もはやめぐりくる小車にやる方もなきなげきをぞ積む

なき人の形見の雲のひとすちも残らぬ空の風さへぞ憂き

其頃うちくもりて雪ふりければなむ
其かみはひと日にかけて思ひしを誠のみつの秋ぞ經にける

(149) 集 草 三

三年の時にかありけむ

邦姫君のかくれ給ふときよみしが中

結びとめむ名残も夏の朝寝髪みだれし露の行方かなしも

同じ時日頃たきものを好み給へば橘といふをたきて手向けし

時

たち花のかをりしめれる朝風に袖もひとつの村雨の空

たきものゝ煙もきえて墳墓に色なき花の香ぞ残りける

圓諦君のかくれ給ひし時よめるが中にたゞ

涙さへといめがたきを世の中のさらぬ別はいかにしてまし

足乳根にさしをふばかり思ひてし心のいろや袖に見ゆらむ

深川の御寺にまうでゝ 朝臣任官などの頃まうでしにかあり

けむ

生ひ茂る竹の此世の末かけて嬉しきふしやみそなはすらむ

濟海寺にまうでゝ海原を見やりて 定國少將の君の御寺なり

わだの原こぎ出づる船を見ても思ふすぎゆく物の哀なりとは

清照君の御法會によみしが中

形見ぞと思へばさすがわが袖の涙もさらにはらひかねつゝ

なげきある頃又追悼などによめるが中

藤衣かゝるも露のたまくしげふたゝび君にわかれぬるかな

こは重服ぬぎし折にかありけむ
 白露はおくと見しまに散りにけり何を形見の朝顔のはな
 ふして思ひおきても慕ふ散る花の名残つきせぬ春の夜の夢
 それとなくたゞよふ雲の行方まで夕はわきて物ぞ悲しき
 わが袖にくらべて見れば萩の葉は只大方の露ぞおきける
 さりとともと思ふ心もかれ蘆の岸にまどへる老鶴の聲
 夢なれやそれかと見ればそれならで萩の下葉の露の夕風
 人の世の別はかくと七夕に涙ながらの袖やかさまし
 塵をだに据ゑじと思ふ床夏の花にあやなき夜半の村雨
 架さへげに短夜の半枕に夢かと通る山ほととぎす

あはれなり池の蛙もみかくれて霞にむせぶ夕暮の聲
 形見ぞと見しも昔の空の雲をだに今は残るともなし

うち靡く尾花の袖になき人の面影さそふ庭の夕風

みそぢあまり見し世の雲も消えはてゝ袖に残れる夕暮の雨

別れにし秋の名残に人の世の露うちそふる萩のうは風

此頃の去年の夕の空の月まためぐりきて袖やとふらむ

いる月のあととふ風の暗き夜に散りにし露の行方をぞとふ

おけば散る露の習をいかさまに袖にも見よと秋風の吹く

よし姫かくれ給ひし時よめるが中

いかにせむこはいかにせむと思ふよりつらかりけりな袖の涙も

あすよりは何をたのみにながめまし嵐あらしにかれし撫子なでしこの花
 心こころにはかすみの衣ころもかさぬれどよのならばしの風かぜぞつれなき
 日をふれば猶悲なほかなしさも身にしみて其そのあらましの跡あとも悔くやしき
 しばし今いまありと見えつる月影つきかげの雲くもがくれぬる曉あかつきの空そら
 うち靡なみく袖そでもしをれてちる露つゆの玉たまよばふ庭にはの篠しののをすゝき
 其そのひやくにち百日にちに詠よめる

今日けふといひ昨日きのふとすぐる時ときのまに十づゝ遠とほき別わかれとぞなる

眞田さきたの尼君あまぎみかくれ給たまふ時とき

四年よんねん経へば八十路はちじろあまりの八千代やちやうだいをも契ちぎらむ浪なみの恨うらめしの世よや
 たれこめし簾すだすとしながらも簾すだすをあらはに月つきのよるもうらめし

仙臺せんたい君きみかくれ給たまふときゝて

袖そでにのみ波なみの名残なごりを残のこしおきてかへらぬ道みちの友ともをとふ哉かな

よし姫ひめの名残なごりとて庭にはに地藏菩薩じざうはつさつを安置あんちしける三さんとせたちて深ふか
 川がはの寺てらへうつすとてよめるがうちに

三年さんねんへて又また今更いまさらにわかるゝやあさちに深ふかき袖そでのあさつゆ

俊徳しゅんとく君きみの五十回いそかいの法會ほふゑに

五十年いそとせの昔むかしはよそに見みし雲くもの行方ゆくへを慕したふ夕暮ゆふぐれの雨あめ

みち姫ひめかくれ給たまふよし姫ひめの形見かたみと頼たのみしことのありしを

かげ頼たのむ入日いりひのあとに見みし雲くもの形見かたみの色いろも今はのこらす

仙壽せんじゅ君きみかくれ給たまふ折をりよみしが中うち

かぞいろの形見の露もこゝ彼處消えにし跡を尋ねてぞとふ
 田安故中納言の君の五十年の御法會にかすくよみしが中に
 夢うつゝ今にさだめぬ心地して袖はかはれど露はかはらず
 悲しさよはゝその露も今しばしきえなでふにあふべきものを
 法の會の今年のけふの後の世は我をあはせて人やとふらむ
 寢る夢にせめて其夜の月の影みばやと思へば村雨の空
 思ふにもいふにも餘る名残をばたゞ大空とあふぎてぞ見る
 世にまさば猶も訓のかすくを言の端にもきかましものを
 物をそれと覺ゆる頃今の世の心しあらは悔いざらましを
 かすくの仕へし人も早うせてひとりふたりに昔をぞとふ

眞田致仕の君の北方かくれさせ給ふを 眞珠院と號しけり

くもりなきまことの玉の光こそ道をてらさむ鏡なりけれ

寛光君三十三回の法會の折よみしが中

世は遠くよし隔てゝもまぢかきは君が御聲に君が面影

侍女貞順が二十三年に

幾秋かふる枝の萩のものと露すゑの雫の世々に絶えせぬ

かめうらといふ老人みまかりぬ齡は七十あまり二つ五十とせ
 餘の勞にて翁の十ばかりの頃よりつかへしなり

思ひやる思ひはあさし五十とせの積る月日のこゝろづくしを
 冠山の君の末女つゆ子すぐれたることなどいひ傳ふることは

別にしるせしかどもかゝで歌よみて参らせしが中を
 よそにきく袖にもかけて思ふ哉もとの雫のたえぬなげきを
 稻村行教みまかりての後志のほどをきゝて
 古のみよのちぎりのあとゝだにいはいはぬ心ぞなほしのばるゝ
 徳本行者みまかりぬもとよりあひ見しことはなけれど
 同じからぬ道なりとても人に越えし人の別は惜みやはせぬ
 家臣中島それがし夢に見えけることありし時
 君と臣の御代の契はいかさまにたえせぬものか夢の浮橋
 こは昔よみしがよもぎなどにも洩れしかばしるしつ
 無常といふことを詠めといへば

花のとぼりかゝげし人も草の戸もおなじ雫のあめの世の中
 タぐれの雨とふる身は徒にあしたのくもの行方をぞとふ
 つねなきを常とやいはむ散れば咲き曇ればはるゝ月花の空
 かへりこぬ昨日はけふの昔にて過ぎしは悲しあとは戀し
 ことほぎによめるが中

井伊家の賀に

花も實も世にかぐはしき橘のふりせぬ宿は千代もかはらじ
 致仕の上猶恩賜の絶えざるを
 草の戸のかゝる露にもありし世の月のみ影は隔てざりけり
 定永溜詰に進み又侍従にのぼりしかしこまりを

かぞいろのまさばとばかり老らくのけふの筈にしき忍ぶ哉
 なみならぬ恵に袖のなみださへ超えゆく老の末の松山
 豊なる御代をちぎりの軒の松しびかに千代の調をぞきく
 柴の戸の月と花とのあけくれによるとしもなき老のなみ哉
 ことばぎの歌御賀の屏風をはじめかすくなれどくだく
 しければ洩しつ
 此あさちの一卷みづからかいて
 定和朝臣に参らす
 文政十年十二月十三日

豊なる袂なれどもうれしさの重なる今日はいかにつゝまむ
 祝のこゝろをよめる
 柴の戸は夜半もとざで通路の落葉をひろふ人だにもなし
 定和生れたまひし時
 若緑さすがに千代のおひさきもこもる二葉の松の色かな
 文化未の頃みづから賀のやうなることし侍る折によめりける
 七首
 鶴の千年龜のよろづ世とりをへて君にぞ契る身には契らず
 大君にさゝげおきてし玉の緒のゆらぐも御代の恵とぞ思ふ
 かぞいろの形見を君に捧げおきて又我物にいはいふ今日かな

三草集終



大正五年六月廿五日印刷
大正五年七月三日發行

定價金貳圓

編輯者兼

朝野昇

印刷者

山口信勝

東京市神田區小川町一番地
愛善社印刷所

著 作
權 有

發行元

東京市神田區表神保町十番地
振替貯金東京(二六四二番)

昌文館書店

